

エヴァンジェリンと呪いの玉

ほほほ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私がいつも月ばかり見て いるのは何故かだつて？

そんなこと何故坊やに教えねばならん、と、言いたいところだが……。

いいだろう。今日は満月。機嫌がいい。私も酒を片手に誰かに話したい気分だつたんだ。

だが、聴いたからには最後まで付き合えよ？

これは、私があいつと出会つた時から始まる物語だ。



魔法先生ネギま！の二次創作です。

原作開始前、戦闘ほとんどなし、エヴァンジエリンが主人公となります。

オリジナルキャラクターがいます。

自分のペースで更新していくのでご了承下さい。

目次

第1話

私は今でも、あの日のことを思い出す。

ひとりわ存在感を放つ満月がぽつりと浮かんでいて、それでも、それを囲む空の闇夜の方が圧倒的に濃くて。周りに星の一つも見えない中、寂しく浮かぶ大きな月は、孤独の中にいるように見えていた、あの夜。

確かに、あいつと出会ったのは、そんな日だった筈だ。



月が好きか、と問われたら、私はううむと首を捻るだろう。
吸血鬼なのだから満月ならばいつもより力は出るし、あの金色に近い輝きには趣きがある。

ただ暑苦しく、起きたくもない朝に強制的に光を浴びせるくせに、沈む時だけ同情を釣るかのようにわざと光を弱々しくしていく太陽に比べたら、月はずつとずつといい。

何より、月見大福も月見そばも旨い。

だが私は、夜の暗い静かさの方が好きだった。月の一つもなく、雲の一つもなく、ただ拡がる黒い空が、好きだった。

人は皆一人であると、是非もなく一方的に私達に言い付けるあの圧倒的な空気が、好きだった。

だから、あいつと出会った時に浮かんでいた月を、私は悔やんだ表情で見ていたような気がする。あの月さえ無ければ完璧だったな、と、心の中で唱えていたのかもしれない。

そんなどうでもいいようなことを考えながら、人の気配もなく明か

りすら乏しい外れた街道を、私が一人で歩いていた時だつた。

「いらっしゃい」

真横から、しゃがれた声が私に声を掛けた。

屋台のよう簡易に作られた出店は紺色のカーテンで周りを囲つていて、夜に合わさつて不気味な雰囲気が溢れている。店の真ん中に座る老婆は、黒い三角帽子を被り、如何にも自分は魔法使いである、と主張する様子が、逆にコスプレ臭くて仕方がなかつた。

「いらっしゃつたつもりはないんだがな」

暇潰しにそう答えながら横を通り抜けようとすると、老婆の笑い声が聞こえた。ヒヒヒ、と不気味に笑つているつもりだろうが、作られたその声はつまらないB級映画を私の頭に彷彿させた。

「そう言わさんな、お嬢ちゃん。いや、真祖の吸血鬼よ」

情けのないことに、そう言われただけで私は立ち止まつてしまつた。私の情報など調べたらどこにでも出てくるようなもので、見知らぬ誰かに知られていることなんて日常茶飯事であつたのに、その呼び名で呼ばれたことが久々で、反応してしまつたのだ。

「だつたらなんだと言うんだ」

「そう怖い声を出さんでおくれ。私はただ、商売がしたいだけさ」

そう言つて、聞いてもいないのに老婆は自分の身元を明かし始めた。

曰く、自分はただの魔法に憧れる婆であると。

魔法使いの家系に生まれたが一切の才能もなく、それでも魔法に関わることに憧れ続けて、気付けば商人になつてゐるだけのものだと。

この麻帆良のように魔法使いが存在する街に出向いては、気まぐれに魔力を宿るものや魔法世界のものを商品として並べてゐるらしい。

「あんたと会えて嬉しいよ」

魔法使いは本当に嬉しそうに言つた。魔法に憧れる老婆にとつて私の存在は伝説的であるらしく、まるでお伽噺に出てくる登場人物に遭遇したかのような気分だと、皺だらけになつた頬を高揚させて語つ

た。

「ふふん。 そうか」

悪い気分ではなかつた。

「どうせなら、商品を見て行つてくれないかね」

「悪いが手持ちはない」

「貴方ほどの巨悪なら、金など払わずに私を吹き飛ばして全てを持つていき、そういうものだと思つたが」

「私ほどの巨悪なら、そんなどうでもいいことに悪を振り撒いたりはしないんだよ」

私の答えが気に入つたのか、老婆はまた嬉しそうにして、これ以上下がらないと思わせた筋力の抜けた目尻を更に下げた。

「なら、売り物ではなく、ガラクタを貰つてくれ。持つていても仕方ないものや、一向に売れないものは、もう処分したいのさ」

老婆はどうしても私に自慢の品を見せたいらしく、そう理由を付けた。

正直に言えばあまり興味はなかつたのだが、かといつて特にやることもなく、老婆の格好は取り繕うのに自分の身元は偽りなく語る性格に妙に好感を持つてしまつたため、私は言うことを聞いてあげた。

「……本当にガラクタばかりだな」

「……本氣かい？ これも？ これもかい」

「ガラクタだよ」

私が溜め息混じりに言うと、老婆は悲しそうにした。
歳をくつても表情筋は意外と動くものだな、と私はどうでもいいことを思う。

「結構珍しい拾い物をしている自信はあつたんだがねえ」

珍しいと言えど、有用性がなければそれは塵に近い。もしくは芸術性でもあればまた別なのだが、老婆の趣味はあまりいいものとは言えず、特に目に惹かれるものはなかつた。

そんな中で、唯一、一つだけ、私の目に止まつたものがあつた。

「……ん」

「おお！ 何かあつたかい！」

「うるさい」

興奮した老婆を黙らせ、私はそれを注意深く見る。

それは、玉だつた。

4つの木の柱に支えられたガラス板の中に、宙に浮いて存在している。

ビー玉ほどの大きさしかなかつたが、その金色は淡い光を放つていて、まるで小さな月のようだと、私は思つた。

「……これはなんだ」

「ああ、それはだね……」

そこから話を続けることなく、老婆は黙つてしまつた。

「おい。なんなんだ」

「すまない。それが何かは分からんんだ。それこそ本当に拾い物で、かなり昔から存在している物だとは分かるんだが、それだけだよ」

老婆は申し訳なさそうにしていた。

それから、老婆は他の商品の説明を熱心にしてきたが、私はその玉だけをずっと見ていた。

「……これは、いくらだ」

「おいおい。それはただの玉だよ、吸血鬼。欲しがるものなんていやしない」

「ならただで貰つてしまふぞ」

「いいけどさあ」

老婆は自慢の商品がただの玉つころに負けたことが悔しいのか、不貞腐れた様子を隠す気もなく笑わしていた。その豊かな表情は相変わらず年齢を感じさせなかつた。

「あんた、なんでそれを欲しがるんだい。その良さを見抜けなかつた私に、そこだけは教えておくれよ」

私はそれを手にしてから、もう一度集中して見た。

「この箱自身に、幾つか魔法が掛けられている。意識操作、感覚低下、まあつまりは認識阻害か。誰から見ても特に注目されない物のようにされているな」

「それは……何のために」

「知らん。だが、それだけでこいつがまともで無いってことは分かる。むしろお前はよくこれを見付けられたよ。常人ならこいつは道端の石ころと変わらん」

老婆は誉められたことで照れ臭そうにした。

「……じゃあ、その中の玉は、結構危ないもんなのかい」

「多分な。私の見立てでは、何かしらの呪いが掛けられているように見える」

「呪い」

老婆は魔法使いの格好をしているくせに、呪い、だなんて言葉に恐怖を感じたらしい。

「危ないじゃないかい」

「かもな。だが、ちょうどいい。私は今呪いについて色々調べていたからな」

貫つっていくぞ、と声を掛けて、私はそれを持ち去ろうとする。老婆は名残惜しそうに小さく言葉を漏らしてから、大きな声を出した。

「吸血鬼よ！　また来るよ！　その時はまた顔を出してくれ！」

どこまでも元気な老婆だった。

私は彼女に背を向けながら少しだけ微笑んで、軽く手だけ上げて返事をしておいた。

○

「……ゞこ主人。なんだよソレは」

「拾い物だよ」

家に戻ると、茶々ゼロが私の持つものを不審そうに見つめた。

これを手に入れた経緯を1から説明する気はなかつた。理由は單純に、面倒だつたからだ。

「結構禍々しい感じがスルが」

流石に私の従者なだけあつて、これの危険性を察知したようだつた。

「多分、呪いが掛かつてる」

「開けたらどーなるンダ」

「呪われかもな」

「オイオイ」

魔力がないために動くことも出来ない人形は、呆れるように私を見た。

「これ以上呪いを重ねる氣力ヨ」

「それもありかと思つてる」

この時の私には、既に呪いが掛かつっていた。

登校地獄、という馬鹿げた呪いだ。

実際は学校を嫌がる子供に無理矢理行かせる程度の呪いだつたのだが、これを私に掛けた人物が異常であつたため、おかしな因果に囚われた呪いとなつてしまつていた。

居場所を制限され、行動を縛られ、力も無くされた。

下手くそが呪いに手を出すと録なことはないとは知つていたが、ここまでのことになるとは思わなかつた。それほどあいつの魔力が異常だつた、ということなんだろう。

かつてはこの呪いを解くために四苦八苦していたが、この時の私はもう打つ手が無くなつていていた。

だから、呪いの重ね掛けだなんていう、自暴自棄に近いやり方をしようとしていたのだろう。

もしかしたら新しい呪いによつて、効果が変わつたり上書きされたりするかもしけんと、期待していたのだ。

玉の入った箱を、上から押さえ付ける。

認識阻害の魔法を解くために力を入れたら、意外と簡単に出来た。

「本気でやる気力ヨ。もつと酷いことになるかもしんネーヴ」

「これ以上酷いことなんて、ある訳無い」

本当にそう思っていた。

何もすることなく、馬鹿な餓鬼達と一緒に勉強だなんて、苦しくて仕方がなかつた。

毎日が、苦痛だつた。どこにも行けず、何にも期待出来ず、ただ生きるだけの日々が、辛かつた。

昔は独りでいることなど何てこともなかつたのに。中途半端に光を知つてしまつたせいで、孤独をより色濃く感じるようになつてしまつた。

これも全部、あのアホのせいだ。

迎えに来るというのは、嘘だつたんだ。

ナギのことを、待つていた。

死んだ、という情報が出回つてからも、私は待つていた。ナギがそんな簡単に死ぬか、と思いながら、私は暫く待ち続けた。いつかこの呪いを奴が解いてくれると信じてたから。いつも通りの適当な笑い顔で現れて、颯爽と私を撫でてくれると信じていたから、待つていられた。

だが、もう駄目だつた。

いつまで経つてもナギの新しい情報は出でこない。

つまりは、奴は死んだのだ。

帰らぬ人をいつまでも待てるほど、ロマンチックに生きてきたつもりはない。

事実は事実として私の中にしっかりと刻み込まれ、ただただ痛々しい思い出となつただけだった。

だからもう、抜け出したかった。

この日常から去ることが出来るなら、呪いでも何でも良かつた。

「開けるぞ」

茶々ゼロの返事はなかつた。何を言つても私が止まらないことを知つていたのだろう。

ガラス板を割るように力を入れる。

ひび割れが高い音を鳴らしながら、それは壊れていく。

パキン、と呆氣ないほど簡単にそれは割れた。

剥き出しになつた黄色の玉が、光る。

夜だというのに、部屋の中に太陽が昇つてゐるかのような明るさが私達を襲つた。

それから、黒い魔力が螺旋状に舞い上がつて、私を囮んだ。

身体に熱が籠る。血流は速度を増し心臓は五月蠅いくらいに唸つた。

黒い渦は、どんどんと速度を増していつて、私を覆い被せる。家具や食器が大きく揺れて、家中が下手くそな演奏会をしているかのようだつた。

「ゾ主人!!」

「来るな！ 茶々ゼロ！」

どんな物だろうと、受け入れるつもりだつた。
変化が欲しかつたんだ。

この糞みたいに退屈な人生に、何か新しい風が吹き込んで欲しかつたんだ。

——だから、驚かなかつたよ。

突然部屋が元通りになつて、私の頭の中に直接声が聴こえるようになつても。

『……あら』

一切の物音が消えてから、その声は、ぽつり、と頭に響いた。
優しい、声だつた。

落ち着いていて、静かで、淀みがなくて、水面に垂れた雫のように、
スッと透き通る声だつた。

『今度の相手は、随分可愛らしいわね』

クスクス、と小さな笑い声が続いて聴こえる。
辺りを見回すが、誰もいない。

茶々ゼロは今にも動き出しそうな様子で私のことをじつと見てい
る。

『貴方には悪いけれど、取り憑いてしまったわよ』

慈悲をそのまま音に乗せたかのような声と共に、黄色の玉は、ピカピカと点滅するように光っていた。

私は理解した。これが、呪いなのだと。

『……しばらくの間、宜しくね。可愛らしいお嬢さん』

まるでウインクと共に発しているように、その声は軽快に私にそう告げた。

これが、私と、呪いの玉との出会いだ。

正直、呪いだなんて唱つておいてこの程度だつたことにはがっかりしていたよ。

仕方ないだろう？ この身に何が起ころかと期待していたのに、頭の中に女の声が聴こえるだけなんだ。

結局何の変化も起こらないのと大して変わりはない。

だが、もう少しだけ聞いておけ。

この出会いは私にとつて大きなものだつたと気付くのは、もう少し先のことなんだ。

第2話

『御早う。お嬢さん。朝よ。もう日が出てるわ』

脳に直接語りかける声で、私は起きた。髪はボサボサでまだ眼は半開きだ。時計を見る。いつも起きる時間より一時間は早かった。

私はもう一度毛布をかぶり直した。

『……お嬢さん？ 学生なんでしよう？ 起きなくていいの？』

頭に声を響かせるのは、卑怯だ。どうやつたつてその声を無視できる筈がなかつた。

「……煩いぞ。私は私の起きたい時間に起きる」

『……へえ。そうなの。でも、関係ないわ。私は私が起こしたいと思つた時間に貴方を起こすのよ』

それからも、布団から出てこない私に向かつて、ちよくちよくと声を掛けてきた。不快で仕方なくて、朝から苛々とした気持ちが積もつた。

「おい！ 茶々ゼロ！ こいつを黙らせろ！」

「……」主人。それは言うケドヨ。俺にはその声は聴こえないし、その玉つころを壊すことも出来ないぜ」

『あら、私の声を聴かせることくらいできるわよ』

「ウオお！？」

突然茶々ゼロにも声が届いたのか、茶々ゼロは飛び上がるようになを上げた。しかしこの玉、取り憑いた人物だけではなく、誰にでも話し掛けることが出来るようだ。

昨日の夜。

こいつに取り憑かれた私は、とりあえずその玉を壊そとしました。呪いを望んではいたが、女が取り憑くだけのものなどは要らなかつた。鬱陶しいだけだ。

こいつの本体は玉であることは明らかであったので、玉さえ壊せばこの声は消えると予想した。本人も、もしそれを壊せたら私は消えるわ、と意味深に言つた。

色々と試してはみたが、その玉にはどんな物理的ダメージも魔法的干渉もモノともしなかった。私が弱っていることなど関係なく、それはきっとどんなんことをしても壊れないのだろう。そういう手応えだつた。

他にも方法が思い付かない訳ではなかつたが、妙に身体が疲れてしまつたので、その日はもう眠ることにしていたのだ。

「ああ！ 分かつた。起きる。起きるから、頭の中でラッパを鳴らすのはやめろ！」

『ふふ、分かつたわ』

声は、楽しそうに笑つた。私はストレスが貯まるばかりだつた。

「くそ。海にでも投げ捨ててやればいいのかコレは」

『やつてみてもいいけれど、きっと無駄よ。家に戻ればまた玉は元通りよ』

「そんなことだらうと思つたよ」

呪いと言うからには、そういうものなのだろう。RPGで捨てられない武器があつたことを私は思い出していた。

これ以上頭で騒がれても面倒なので、私は大人しくベッドから降りる。

カーテンを開ければ、既に太陽が昇つっていた。
眼を照り付けるその光は、眩しかつた。

適当に身なりを整えてからパンを一つ摘まみ、制服に袖を通して家を出た。学校に向かうにはまだ早い時間であつたが、起きてしまつた以上家にいてもやることはない。

我が家は街の外れにあるので、登校中に他の生徒に会うこととは少ない。

自然に囲まれるような形で朝の道を歩くのは、少しだけ心地が良かった。

『いい朝ね、お嬢さん』

本体である玉から離れてもその声は聴こえた。取り憑く、といったからには、ほぼずっと私の中にいるということなのだろうか。

憂鬱だった。

「まず、お嬢さんと呼ぶのを止めろ。そんな歳じゃない」

『あらそうなの。道理で、少女にしては貫禄があると思つたわ。それで、いくつなの』

『600年は生きている』

私がそう言うと、声は笑つた。

『なんだ。そんなの、私にとつてはお嬢さんよ』

「なに?」

『だつて私なんか、もう千年は前に生まれてるわ』

千年前と言えば、日本で言えば平安時代辺りだろうか。

あの玉としてこいつが生まれてきたのか、それとも人間の意思がある玉に移つて存在しているかは分からんが、どちらにせよこいつは随分と長いこと人間の歴史を見ていたことになる。

『もしお嬢さんと呼ばれたくなければ、名前を教えて欲しいわ』

『……エヴァンジエリンだ』

名前を言うべきかは迷つたが、お嬢さんと呼ばれ続けるよりもまだと思った。

『……エヴァンジエリン。ああ、聞き覚えがあるわ。闇の福音つて貴方だったのね』

『まあな』

長いこと存在しているからか、私のことは知つていてるらしい。

『……ふーん』

『なんだ』

『じゃあ、不老不死の吸血鬼、つて言うのは本当なのね』

「本当だよ」

再び笑い声が頭に響いた。クスクス、と口に手を押さえて控え目にしている映像が想像出来た。

「何が可笑しい」

『いーえ！ 面白いって訳じやないけど、中々個性的な人に取り憑くことが出来たつて思つてね』

跳ねるように上機嫌になつた声は、朝の私には煩わしかつた。どうしたらこいつは消せるだろうか、と考えながら、私はいつもより人通りの少ない登校路を進む。

私の通う麻帆良学園は、始業時間ギリギリに駆け込む生徒が圧倒的に多い。

部活動が盛んなため朝練を直前まで目一杯励むものも多いし、早朝バイトしているため遅れそうになる奴もいる。加えて全寮制であるために、もつと寝てもまで大丈夫だろう、と怠けた奴は毎度限界まで部屋にいようとしている。私は寮で暮らしてはいないが、そのタイプだ。

だから、早い時間に教室にいる奴は大抵日直の仕事があるか、真面目な奴かのどちらかだった。

下駄箱置場で内履きに履き替える。

いつもはドタバタ感で煩い場所なのだが、今日は静かだった。

『そういうえば、エヴァは何故学校になんて通つてているの？ 600歳なのに』

早速名前で呼ばれて、その馴れ馴れしさに腹を立てるかと思つたが、意外にも私の中に不快感は芽生えなかつた。

『趣味なの？』

「違うわ」

うんざりとしながら私は答える。

「呪われてるんだよ、私は。ずっと学校に来なければならぬという、最悪の呪いにな」

『……へえ。あら、本当ね。呪いが掛かってる』

「分かるのか」

『まあ、見ようと思えば宿主の身体のことは大体見えるわ。私がいれば健康診断いらすよ、エヴァ』

「それは嬉しい限りだ」

どうでもよすぎて、皮肉っぽく答えておいた。

『……んー。無茶苦茶ねえ、これ。頑丈な鍵を使つた訳でもなく、丈夫な門がある訳でもないけど、相当硬く縛られてる。紐を使つてるんだけど、適当に縛り過ぎてほどけなくなつてる感じね』

自分も呪いだからか、登校地獄という呪いについて興味深く分析しているようだつた。初めてこいつが役に立つ気がした。

『相当魔力を込めてたのねえ。長いこと生きてたけど、これほど魔力を込められる存在は片手で数えるほどしか見たことないわ』

長い歴史で見てもナギはやはり規格外だつたらしい。私の目からしても、奴ほどの実力者はほぼいなかつた。

『しかも途中から呪いが螺曲がつてしまつてゐるわね。まさかエヴァ、中学生生活ループしてゐる?』

「そのまさかだよ」

もう何年目だろうか、この中等部に通い初めてから。

せめて中等部の後は高等部に、と移つてくれたよかつたのだが、それすらも出来ない。

自分が、時に置いていかれているようなこの感覚は、私の孤独を色濃くさせた。

「……解けるのか、この呪いは」

『……解きたいの?』

「当たり前だろう」

『……ふーん』

考るよううにそう答えて、声は静かになつた。

廊下にも人通りはほとんどいない。

時計を見ないでここまで来たが、どうやら相当に早い時間に私は学校にいるらしい。

2—Bと書かれた札のある教室を、私は開けた。

教室はがらんとしていた。いつもの煩い活気はなく、まるで別の場所のようであつた。

そんな中で一人の生徒だけがいた。

黒板消しを持って、黒板に当てている。今日の日直はその少女らしい。

少女は私を見て眼を丸くさせていた。

「…………あ、あの…………。おはよう、ございます」

私は少女の挨拶を無視して、どかりと席について荷物を置いた。少女は顔を曇らせたが、気にしない。

後はいつも通り、屋上に行つて放課後まで寝て過ごす氣だつた。

『ちよつと。無視は良くないわ』

教室を出ようと直前に、声は私にそう言つた。

それも無視して、私はさつさと教室の扉を開けようとする。

が、突然、身体は動かなくなつた。

「…………き、貴様…………！」

「えつ。わ、私ですか!?」

「ち、違う。お前ではない」

身体は全く動きそうにない。

不自然な形で動きを止めた私を、少女は不思議そうに見ていた。

『挨拶をその子に返しなさい』

声は、怒っていた。

まるで、幼稚園児の母が子供にマナーを教える時のような口調だった。

(……貴様！　こんなことをして貴様に何の得がある！　)

頭の中で、私は怒鳴った。

『損得で言っているんじゃないの。人として、やるべきことをしなさいと。そう言つてるの』

(私は人ではない！　吸血鬼だ！)

『そういう事を言つている訳ではないわ。貴方が人であろうと、吸血鬼であろうと、マナーとモラルを持ちなさい。誰かの善意を、無視するの止めなさい』

強い力だった。

頑なな意思で、私の身体全てを支配しているようだつた。腐つても千年生きた呪いだということなのだろう。

(……ちつ！　分かつた！　挨拶くらいするから、力を弱めろ！)

そう答えると、やつと私の身体の自由は戻つた。

私は、少女をキッと睨むように見つめる。

少女はビクリと震えた。

『エヴァ』

(分かつてるよ!)

少女は私が近付いたことで、その震えを強くした。
脅すつもりはなかつたが、苛々を伝えてしまつたらしい。

「……おい」

「は、はい！」

ぴしつとした姿勢で少女は返事をした。

よく見れば、少女は可愛らしい顔をしていた。前髪は少々長く、落ち着いた雰囲気というよりは陰キヤラといった感じではあつたが、素材は悪くないと思つた。

「……おはよう」

「……あ、はい。おはよう、ございます」

「……おう」

氣まずい空気が流れていった。

だが、挨拶はした。これ以上話すことはない。

そう思つて私が再び教室から出ようとした所で、少女は私に声を掛けてしまつた。

「あ、あの。え、エヴァンジェリンさんは、今日は早いんですね……」
明らかに無理して話し掛けていた。

私が怖いのなら相手にしなければいいのに、少女は無理矢理話題を作つて私と話そうとしたのだ。

無視したらまた動きを止めるわよ、という無言のプレッシャーを感じた。

本当に、厄介な呪いだつた。

「……そうだな、いつもより早く起きてしまつた」

「へ、へえ。私はてつきり、エヴァンジェリンさんが日直なのかなつて、思つちやいました」

「……口直はお前なのだろう？」

「あ、そ、そうでした。えへへ」

少女は、照れ臭そうに笑つた。少しだけ緊張が解けてきているようだつた。

「あ、あのエヴァンジエリンさん。わ、私の名前、分かりますか？」

「……知らん」

「そ、そうですよね！ 私、ちゃんと自己紹介もしてないし、その、それで……」

「名前。なんと言ふんだ」

私が面倒くさそうにしながら聞いたのにも関わらず、少女は、とびきり嬉しそうにした。

「わ、私！ 吉野 あきほって言います！」

「……吉野 あきほ、な。覚えておく」

「は、はい！」

あきほの返事を背中で聞きながら、私はやっと教室から出ることが出来た。



「おい貴様！ どういうつもりだ！」

屋上で、私の怒鳴り声が響いた。本当に姿があつたなら胸ぐらでも掴んでやりたかった。

「ああいう意味のないことをさせるのは止めろ！」

『意味のない？ エヴァ、全ての行動には意味があるし、意味はないわ』

「そういう哲学めいた話をしたいのではない！」

あんなことをしても、何にもならない。

他者とわざわざ絡んでも。あいつらとの縁が出来たとしても、私に

良いことなんて起こりはしない。

それは、独りで生きていた私には分かつていた。

「私は学園^ぐつこをするつもりなんてない！ 余計なお節介をかけるな！」

『……あら。登校地獄、という呪いを解くのに、その学園^ぐつこが必要だとしても？』

「……何だと？」

私の熱は、その言葉によつてすぐに引いていった。

「……どういうことだ」

『登校地獄、つて呪いはね。本来不登校の生徒を学校に無理矢理行かせる程度のものよ。それが貴方の中では、無茶苦茶な魔力と無茶苦茶な仕掛け方によつて、因果や記憶操作にまで作用する呪いとなつているわ』

そこまでは、私も分かつている。

『でもね、いくら無茶苦茶になろうとしても、呪いは根本的には変わらない筈なのよ。本来の登校地獄を解くためには、ちゃんと学校に登校していくことが条件。学校にさえ通つていれば、いつかは解ける呪いよ』

「私はしつかり通つていたぞ！」

正確には呪いによつて通わざるを得ない状態だつたのだが。

『いいえ。エヴァ。貴方本当にちゃんと学校に通つていたかしら？』

『』

「……どういうことだ」

『ちゃんと勉強して、ちゃんと部活動をして、ちゃんと学校行事に励んで、ちゃんと友達と遊んだかしら？』

『』

私は、こいつの言いたいことが分かつてしまつた。
その答えは、当時の私にとつては、どうしようもなくきつく、辛い
答えだつた。

「つまり、まさか」

『そうよ。強力になつた登校地獄を解くためには、ただ学校に通う程
度では駄目。しつかりと学校生活を謳歌してやつと、その呪いは解け
るのよ』



この言葉を信じるか信じないかは、迷つたさ。

だつて、あれだけ解くのに苦労していた呪いなのに、そんなことで
解けるようになるとは、思わないだろう？

いや、そんなこと、とは言つたものの、私にとつては大変なことだつ
たさ。

……え？　吉野　あきほ、なんて人のことは知らない？

それは、そうだろう。これは、坊や達の代が中等部に入部する前の話
なんだから。

第3話

結局私は、その日午後の授業には出席した。

学校生活を謳歌する、という定義はよく分からぬが、屋上で寝て過ごすよりは授業に出た方が学生らしい、とあいつがアドバイスをしてきたので、午前中一杯考えた結果、従つた。面倒だが、一理あると思つてしまつたのだ。本当に面倒だつたが。

あいつの言葉を信じきつてゐる訳ではない。ただ、反論する材料が足りなかつた。否定しきることが出来なかつたのだ。

よくよく考えれば、この呪いには不可解なことがある。

呪いとしての効力が強すぎるのだ。

学生として学校に通わなければならぬ、というだけならまだしも、私を大きく弱体化し、行動範囲を狭め、更には、私が中等部をループすることに違和感を覚えさせないように大きな範囲に渡つて記憶操作まで行われてゐる。

ここまで無茶苦茶な上、呪いを解くのに加害者本人がいないとどうしようもない、というのは、あまりに強すぎる。

いくらナギが実力者としても、適当にしただけでここまで出来るなら、これは最上級クラスの呪いとして研究されるものだろう。

長い時間を持って入念に準備した呪いでないのならば、どんな強い効力の呪いであろうと解くのは意外と簡単、ということはよくあるのだ。

だから、あいつの言うことにとりあえずは従つた。

が、とりあえずそうしただけで、今後どうするかはまだはつきり決めていない。

学園生活を謳歌、なんて、具体性のない目標はどうすればいいかも分からんし、もしガキ達とばか騒ぎすることが必要だとしたら、プログラムがそれを許すかは微妙だつた。

『だからね、ばか騒ぎはしなくてもいいの。でも、お友達くらいは作つたらどうなの』

放課後、さつさと家に帰ろうと歩いている私に、こいつは溜め息混じりにそう声を掛けた。

「ふん。それが必要だとしたら、却下だな。まだ呪いが掛かつてた方がましだ。上つ面だけの関係を作ることになんの意味がある」

『エヴァはすぐそう言うのね。意味があるのか、意味があるのか、つて。つまらなくない？ その生き方』

「悪いが、600年そう生きてきた」

『今更生き方を変えれないって言いたいの？』

「ああ、そうだよ。私はもう、この生き方を変えようとは思つてない』

『……寂しいわ』

声は、泣きそなへど、沈んでいた。何故、こいつがそんな悲しそうにする必要があるのか、私には全くもつて理解出来なかつた。『エヴァ。貴方は勘違いしているわ。自分を変えるのは、いつだつて出来るのよ？』

「私が変えようとしてないんだ。余計なお節介をするな」

『……なんだかんだ言つても、まだ子供のままなのね、貴方は』

「……ふん。玉つころ風情が、粹がつた口を聞くなよ』

鬱陶しかつた。

説教口調で人の生き方に文句をつける奴は、うざつたい。普段なら無視してやるのだが、心に直接話し掛けられたら、そういう訳にもいかなかつた。

登校地獄よりも、今はこの呪いの方がよっぽど癪に障る。

「……エヴァ。どうしたんだい。何を怒っているんだ？」

学園を出る直前に声を掛けて来たのは、タカミチだつた。
私の苛ついた声が聴こえたのか、緊張した表情であつた。

『あら、まさか、お友達？』

(……いや、ただの知り合いだよ)

期待を込めた声に冷たくそう答えていると、無視されたと感じたのか、タカミチは一層表情を強張らせた。

「……何かあつたのかい？」

「なんでもない」

「……そうか。ならいいんだ」

私の言葉をその通りに捉えたかは分からぬが、追求する気はないらしい。嫌いじやない賢さだ。

「そういうえ、今日はどうしたんだい」

「何がだ」

「授業に出てきたじやないか」

「……ああ」

午後の授業は2限あつたが、一つはタカミチの担当する英語の授業だつたのを思い出す。

「気紛れだよ。別に珍しいことでもあるまい」

今までも、暇潰しに顔を出したことは何度かあつた筈だ。
「そうだけど、今日は暇潰しつて感じでもなかつたからさ」

よく見ている奴だ。

「これからは眞面目に学生をしてみようかと思つてな」「本当かい!？」

あほらしい、と笑いながら、冗談を言つたつもりでいたのに、タカミチは身を乗り出して私の肩を掴んだ。

「なんだ急に！　嘘に決まつてるだろう！」

「エヴァ、そう考えるのはとても良いことだと思うよ！　いつまでもつまらなそうに学校に通うくらいならば、一度くらいは本気になつてみたらしいと、僕は前から思つてたんだ！」

私の話も聽かず、タカミチは柄になくはしゃぎ出した。ゆきゆさと肩を揺らされて、頭が振り子のようになる。鬱陶しい。

良いこと言うわねこの青年、と笑う声が聞こえるのが、更に私を不快にさせた。



『エヴァ、なら、現実的に考えましょよ』

家に着いた後も、声は私に語り続けた。

『上手くいけば、あと一年半でいいのよ。もし今回がダメでも、次の三年間頑張るだけで、あなたが一生掛かったままかもしれない呪いが解けるわ』

頑張る、なんて言葉を聞いたのは久しぶりだつた。

「そもそも、丸々三年間しなくてもいいのか」

『途中からでもいいと思うけど。要するに、錯覚させればいいのよ。呪いを。抽象的な呪いだから、多分いけると思うわ。それなら、やっぱり今から卒業までを頑張つた方が短くていいと思うのだけど』

「その内容が問題なんだよ』

『学生達と絡むのが嫌だつて言いたいのでしよう？』

改めて言われると、嫌、というのは少し違う気がする。
確かに良いか嫌かでいえば、嫌なのだが……。

『だつたら、利用してやればいいのよ』

「利用?」

『そうよ』

氣付けば私は棚の上に置いてある玉に顔を向けていた。私自身の中にこいつの意識はある筈なのだが、元となるものがこの玉だと思うと、不思議な感覚になる。

『少しだけ、友達になるふりをするの。自分が解放されるために学生達と仲良くなつたような素振りを見せてやればいいわ。そうしたら、呪いは勘違いして解けるかもしれない』

「……お前、良い奴か悪い奴か、どっちなんだ」

学生を騙して友達になつたふりをする、というのは、今まで散々な悪行をしてきた筈なのに、それこそ最も悪である、とまで思つてしまつた。純粹な子供を騙すことに躊躇う心が私の中にはまだあつたらしい。

「お前はもつと、正義感ぶつた奴だと思つていたんだが」

『あら、それは貴方の勝手な印象ね。私は自分のことを良い奴だなんて思つたことないし、悪い奴だとも思つたことはないわ』

「そもそも、友達のふりをする程度でこの呪いは解けるのか」

『何もしないよりは可能性があるわ』

「それはそうだが……」

『何? もしかして気が引ける訳? 閻の福音ともあろうものが、自分のために他者を利用するることは出来ないっていうの?』

「……違うな。気が引ける、というより、気が乗らない、という感情だよ」

『違うの? それ』

「違う」

『そう』

嫌だ、と思つて いるのではなかつた。

私も分かつて いるのだ。

今後何年間も縛られた人生を送るよりも、たかが数年間を我慢して

さつさとここから抜け出した方がいい、ということを。

だがそれでも、その作戦をやろうと思い切るのには至らなかつた。
あの騒がしい奴等の輪に入つていく自分が、どうしても想像出来なかつた。

今まで私の周りに溢れていた風景と、あの学園の風景は、あまりに
違ひすぎていたんだよ。

生と死が隣り合い、殺伐とし、混沌としていた私の世界から抜け出
して、あの笑顔に溢れた世界に行くのには、恐怖があつたのかもしけ
ない。

ダークファンタジーの中にいるキャラクターが子供向けのコミカルな漫画の中に入つていくような不自然さがあると感じていた。

厳つい顔をし大剣を持った大男が、ほわほわと皆が笑い合うような世界に飛び込んでいつたら、どうなると思う？

倒すべき敵もいない大男は困惑するだろうし、コミカルな世界は、その男の容姿に初めて恐怖という感情を蔓延させるかもしれない。

そこままでしても、私はここから抜け出したいのか。

自分の気持ちを天秤に乗せた。

呪いに囚われた人生と、未知の世界に飛び込む自分。

ふわふわと揺れるだけで天秤は、動かない。

当たり前だ。重要度を簡単に頭の中で差をつけることが出来るならば、そもそも天秤に乗せて迷うだなんてことすら思わないだろう。

結局は、私の意思という重りがどちらに乗るか自分で選ばなければならぬのだ。

考えるのが面倒になつた私は、この日いつもよりずっと早く眠りにつこうとした。

『おやすみなさい。エヴァ』

羽毛で出来た毛布のような声を最後に、私はその日の意識をなくした。



翌日の朝も、家を早朝のうちに出了た。

あいつに起こされるのは相変わらず不快であつたが、静かな朝に外を歩くこと 자체は嫌いではなかつた。あいつが来てから、日中の活動時間が増えてきているような気もした。

学校も、やはり人影は少ない。

『……それで、決めたの？』

『……までもなく、今後どうするか、という話であろう。

「……まだだよ』

私は独りで首を振つて答えた。

1日寝た程度では、私の覚悟は決まらないようだつた。

「お前は妙に私に協力的だよな。何故だ』

こいつにも、納得出来ないことは多くあつた。

そもそも、この意思のある呪いの目的はなんなのだろうか。

私が麻帆良に閉じ込められていようとなかろうと、こいつにはどちらでもいい筈だ。いやむしろ、私を宿主として寄生していると考えれば、私の力は弱つちい方が色々と便利な気がする。

『だつて、ずっと同じ風景だなんて、つまらないじやない』

声は、はつきりと芯のある言葉でそう言つた。

『私はね、色々な世界が見たいの。人間が作つていく歴史を見ていたいの。だからエヴァにはもつともつと広い活動をしてほしいと思つ

ているわ』

「……それはもしかして、好奇心か？」

『もちろん』

不思議な話だつた。

呪い、というものが好奇心を持つて存在していることが信じられないつた。

生きていると言つていいいのかも分からぬ存在が、私よりも生き生きとしている。

「……お前が思つてているより、人間は大したものじやないよ」

私は、知つていた。

人間という奴等がどれだけ醜いかを。

そのどす黒い悪意や怨念を間近に受けて私は今まで生きてきていた。だから、こいつのよう人にに関する興味を今更持てはしなかつた。

『あら、私はあなたより人間のことを知つてゐるわよ』

声は穏やかに続けた。

『私はね、あなたより長く生きて、この世界の有り様を見てきたわ。それこそ汚い部分も沢山ね。それでも私は彼等に興味がある』

そういえば、そうだ。こいつは、私よりも年寄りなんだ。

思えば、自分より長く生きてきた奴に会うのは、本当に久しぶりであつた。

教室に入ると、また一人の生徒がいた。昨日あつた奴と同じであつた。

『吉野あきほちゃんよ』

(知つてるよ)

私が名前を忘れてると思つたのか、声は囁々しく教えてきた。忘れ

かけてはいたが、なんとか私は忘れてなかつた。

吉野あきほは、小さい身長で一生懸命に黒板を綺麗にしていた。

「あ、エヴァンジエリンさん」

私に気付いて、少女は此方を向いた。

昨日私に対して感じていた恐怖などはすでになかつたようだつた。

「おはようござります」

「……ああ、おはよう」

丁寧に下げた頭に対して、私はあいつに身体の自由を奪われる前にしつかりと返した。

「えへへ」

吉野あきほは、照れ臭そうに笑つた。何故笑つたのかは分からなかつた。

「お前、どうして今日も日直の仕事をしている」

私の記憶が正しければ、日直は1日やつたら交代の筈だつた。

「え、ええ、と」

吉野あきほは、頬を搔きながらもやんわりとした笑みを崩さなかつた。

「実は私ね、日直じゃないんだ」

「……なら、どうして」

「えと、朝のちよつとしたお掃除つてさ、日直の人結構忘れちゃつててさ、それで、先生が困つちやう時があるから……」

「昨日もか？」

「う、うん」

昨日自分が日直だ、と言つたのは氣を使われたくなかったからか、それとも、自分がやつていることをひけらかしたくなかったからなのだろうか。

「だとしても、お前がやる理由がない」

「ただけど……」

吉野あきほは、ずっと笑みを含んだ表情をしていた。多分、少女の普段は、こうしていつも笑っているのだろう。

しかめつ面なあなたとは正反対よ、と心に声が届く。

「私、あんまり人の困った顔つて得意じやないから。だから、いいの」

「自分が損しても、か？」

「違うよ。自分がしたいから、するんだよ」

えへへ、と吉野あきほは、笑った。

馬鹿な奴だな、と思つた。

同時に、強い奴だとも、思つた。

今まで録に周りを見ていなかつたら、私はクラスにこんな奴がいることを知らなかつたのだろう。

「……ふん。なら、せめて文句の一言でも言つてやるんだな。言えな
いなら私が言つてやる」

「ええ！　い、いいよ、そんなんの……」

「遠慮するな。自分のことは自分でやらせないと、お前はいつか紐で
も出来てしまふぞ。さあ、今日の日直は誰だ」

「ひ、ひも？　そ、それに、今日の日直は……」

黒板の隅にある、日直の名前が書かれた欄を見る。

そこには、見慣れた名前が書いてあつた。

『あなたじやない』

確かに、エヴァンジエリン、と書かれている。

声はケタケタと笑つた。

私は、本の少しだが、恥ずかしいという想いと、申し訳ないという
気持ちになる。

「……すまん。私がやる」

今までまともにこんな仕事をしたことはなかつたが、流石に目の前

の少女に自分の仕事を全て押し付けるという気はなかつた。

「え、うん。あの、なら、一緒に、やろ」

「……」

それでも少女は、吉野あきほは、一緒にやろうと言つてくれた。

私は黙つてもう一つの黒板消しを手にとつて、黒板に押し当てる。

友達、出来そうね、という声が聴こえた。

まだ私は認めた訳ではない。

吉野あきほを友達とするかも、友達として偽るかも決めていない。

ただ私は、この日初めてクラスの奴と一番長く話した。

第4話

それから私は、毎日学校に行つた。

いや、今までも確かに学校には行つていたのだが、授業など碌に出てはいなかつた。その日からは全ての授業に出席していただのだ。そういう意味では、まともに学校に通い始めた、ということなんだろう。昼休み、屋上で寝転びながら、これくらいで呪いは満足してくれるのか、と訪ねたら、声は、全然駄目よ、と穏やかに返事をした。

見上げた空は明るかつた。雲は疎らに泳ぎ、太陽は容赦なく大地を照らす。ずっと座り続けたからか体には妙な疲労感があつた。慣れないとをしているというのも、この疲労の原因であるのだろう。

『授業に出ても、あなたぼーっとしてるだけじゃない』

『どんな顔をしていればいいのか今一分からん』

ただじつと座つてゐるのは退屈であつた。だからと言つて聞いたことあるような話を今更真剣に聴くのは馬鹿らしく思つて出来なかつた。

『まあでも、それもいいのかもしれないわね』

『何がだ』

『授業中ただぼーっとして過ごすだなんて、いかにも学生らしいもの』

ふふ、と爽やかに笑いながら声は言つた。冷えたレモン水のように落ち着いたこの声は、私の中にさつと流れていく。

絶対に本人には言わないうが、私はこの声の質は嫌いではなかつた。『青空を見ながらこうして話すことも青春っぽい、などと言ひ出さんじやないだろうな』

『私と同じく、お友達と話していればそうだつたかもね』

それはそうか。

少なくとも、自分の内面に潜む呪いと会話をするような学生が世の中にあり溢れているとは到底思えない。

しかし、声の語る学生のイメージというものは未だに理解出来なかつた。そもそも、こいつも学校など通つた経験がないのだろうに、なんの知識を元にして話しているのだろう。

「大体な、学生らしい、という判断は何によつて行われてるんだ」

『そりやもう、登校地獄の呪いによつてよ』

「……なんだ、まるで登校地獄にも意思があるみたいな言い方だな」

『あるわよ、意思』

私が怪訝な顔をすると、声は、言つてなかつたかしら、ととぼけた風に言つた。

『私、エヴァの中に入つてからずつと登校地獄に話し掛けてるのよ？全然会話にならないけど、登校地獄が貴女の学生生活をちゃんと見たがつてるのは分かつたわ』

呪い同士で話をする、というのはあまりにシユールな場面だと思つた。そもそも、こいつはそういう呪いだと受け止めていたが、他の呪いにも意識があるだなんて思いもしなかつた。

声は私に説明をするように語りかけた。

『私ほど自意識のある呪いは他にはいないわよ。私は別格。普通の呪いは勿論しやべつたりする訳じやないわ。ただ、何て言うのかしら。赤ん坊と会話しているみたいな感じよ。声は聞こえないけどその表情や仕草で気持ちを察するみたいな』

「ほーん……」

『気の抜けた返事ね。本当に聞いているの？』

『聞いているさ』

実際に、興味深い話だつた。呪いというものがそのような形で人の中に残つているとは知らなかつたのだ。

長いこと生きていてもまだ知らぬことがあるのだ。そう思うと、何となく嬉しい気持ちになつてしまつ。未知というのは誰にとつても好物であるのだろう。

「表情がある、というのは比喩か？　登校地獄に姿があるというのか」「あるわよ。姿。イメージ、というか意識的なものだけれどね』

「……ちなみに、登校地獄はどんな姿をしている」

『……んー。これは、狐、かしらね。貴女の中で、律儀にお座りしてい
るわ』

校庭からは、学生達の騒ぐ声がずっと聞こえていた。

休み時間だというのに昼練習などといって部活動を励むものもい
れば、単純に遊んでいるだけのものもいるのだろう。

元気なものだ、と私はその声を耳にしながら目を瞑る。

「……狐、か」

『狐、嫌いかしら』

「いや、もし人の姿でもしているものなら何とかして殴つてやろうと
思つたんだがな」

流石に動物の姿をしているものを殴り付けるというのは、抵抗があ
つた。これが魔物っぽくあるのならばまた話は別なのだが、狐と言
われては手を挙げようとする気すら失せてしまう。

野蛮ねえ、という声を最後にして、私は眠りについた。



午後の授業も適当に座つて過ごした。

私がただ座つているということだけで、視線を向けてくる生徒が未
だにいる。教師すらも、私が席についていることが意外らしくて、い
ちいち驚いた表情をするのはうざつたかった。

他の奴らからしたら、不登校の生徒が突然学校に来た、という感覚
なのだろうか。それか不良生徒がいきなり眞面目になつた、とでも

思っているのだろう。

今まで誰よりもこの学校に通つて来ているのは私なんだぞ、と自傷
ぎみに笑つてしまいそうになる。

放課後、教師の連絡事項も終わり、さっさと席を立ち上_がると、ゆつ
くりと私に近付いてくるものがいた。

「あ、あの。エヴァンジエリンさん」

「……どうした、吉野あきほ」

吉野あきほは、指をもじもじとしながら私に話し掛けってきた。

緊張した顔で上目遣いしてじっと見てくる。

「……あの、あのね。今日ね、もしエヴァンジエリンさんが良ければ
ね、一緒に帰らないかなあ、なんて」

「……何故だ」

私が理由を訊くと、吉野あきほは両手を前に出して細かく振った。
「と、特に用事があるわけじゃないの。ただ、あの。私、エヴァンジエ
リンさんとお話がしたいなあって、思つて」

よく、分からなかつた。

理由もないのに二人で帰つて、何を話すと言つうのだ。

「……悪いな。今日は予定があるんだ」

「え、あ、うん。そ、そなんだ……。なら、仕方ないね……」

吉野あきほは、明らかに落胆した様子で、悲しそうにした。そこまでして私と一緒に帰りたかったというのか。

しかし、用事があるのは、本当だつた。

声が、『一緒に帰つてあげなさいよ』、などと言わなのは、私に予定があることを分かつていいからなのだろう。

「……じゃあな」

私が鞄を持つて教室を出ようとしたりで、吉野あきほは私の袖をちよんと摘まんだ。

「う、うん……。またね。エヴァンジエリンさん。また、だよ？」

私は、彼女を一瞥し、おう、とぶつきらぼうに返事をしてから、今度こそ教室を出た。



「何のようだ、じじい」

「ほつほ。機嫌が悪そうじゃの、エヴァ」

「うるさい。早く用件を言え」

学園長室に呼び出された私は、目の前の老人を睨み付けるようにしながら言つた。

ふおつふお、と爺は自身の髭を弄つている。目元が隠れるほどの眉毛も禿げ上がつた頭皮も爺が高齢者であることを表している筈なのだが、老人とは思えないほどの明るさを持つた奴だった。

『この人がここに長なのね』

(ああ)

『個性的ね』

恐らく、長く伸びた後頭部を見てそう言つたのだろう。見慣れた私から見ても、奴の頭はどうかしてゐる、と思つてゐる。

『あの頭つて、髪の毛生えてる時つてどうなつてたのかしら』

(知るか。想像させるな。気持ちが悪い)

『若い頃の写真を見てみたいわね』

(見たいものか。しかし、禿の方が似合いそうな頭とは中々気の毒だな)

「……エヴァ？ 失礼なこと考えとらんか？」

何でもない、と私は冷静に首を振つておいた。

「用というほどではないのじゃがの……」

爺は私を怪しげに見ながらも、とりあえず話を続けようとした。

「お主、最近何かあつたのか？」

何かあつたと訊かれれば、それはあつた。

例えば、変な玉つころに呪われ付きましたわれたり、だ。

だが爺が聞きたいのは恐らくそういうことではなくて、最近まともに学校に通つているのは何故だ、ということなのだろう。

素直に答えるもいいのだろうか、と一瞬考えたが、やめた。

もしこいつが私を学園に繋いでいるのが利としているのならば、私を簡単に逃がす筈がないのだから。

「どうしてそんなことを聞く？」

とりあえず、はぐらかすようにそう答えておく。

「色んな者から話を聞くのじやよ。お主の様子が変だ、とな。何やら、授業をサボることなく出席しているのじやろう」

この学園には、魔法を知るものが多い。

それは世界樹というばかでかい魔法樹を街の真ん中に飼つているのが原因なのだろうが、おかげで私へ関心を持つていてる教師は多く存在していた。

勿論、よい意味の関心ではない。

闇の福音、不死の吸血鬼。

私の悪行はお伽噺レベルで奴らの中では語られている。だとしたら、そんな私の動向を気にする奴がいるのは当然だろう。

もう大したことをする魔力もない私を気にしてどうするんだ、と思

いながらも私は今までその視線を受け止めてきた。

「ふん。それのどこが変なことなんだ。学生として当たり前だろうが」

先日タカミチに言つたように、冗談らしく、馬鹿にしたようにそう言つておく。

いかにも、裏には他の企みがあるんだぞ、という含みをした言い方のつもりだった。

私がまともに学校に通うと思うか、と意味を込めたつもりだった。
……だというのに、学園長の返事もやはり私の思惑とは違うものだった。

「ふおつふおつふお。ふざけていたとしても、まさかお主からそんな答えを聞くときが来るとは。どんな心変わりかのう」

爺の表情は、穏やかだった。

何故か嬉しそうに目尻を下げていて、私はどうしてこいつがそんな顔をするのか、よく分からなかつた。

「……おい。結局お前は何が聞きたいんだ」

「いや、確認じやよ。エヴァがどういう気持ちでいるのか、というな」

爺の落ち着いた声は、いつも私に話すものとは違つていた。

「会議でも話題になるんじやよ、お主のことは。闇の福音の様子が変だ、何か企んでいるぞ、とな」

「……」

爺の瞳が、眉毛の底からそつと見える。日本人らしい黒い瞳は、狡

猾な彼をそんな風には思わない光をもっていた。私には見慣れない瞳だった。

「タカミチ君は、必死に否定しておったよ。お主がまともに学校にいることの何が変なのか。今までエヴァがこの学園に何かしたか、とな」

「あの、馬鹿が……」

何故か、私が恥ずかしい気分になる。

あいつは一体何を熱くなっているんだ。

大体、他の奴らの前で私の味方をしたら白い目で見られることくらい、分かっているだろうに。

爺は、ゆっくりと椅子から立ち上がった。
静かに近づいてきて、私の前に立つ。

何だよ、と私が不審げに睨んでも、爺は笑っていた。まるで、孫を見つめるような目付きだったのが、癪に触る。

「……今までは、儂もお主をそういう風に見たことはなかつた。だが、お主がその気なら話は別じやよ。儂は、この学園の生徒の味方じや。だから、何か困つたことがあつたらいいに来なさい」

それは、爺が初めて私にした、教師としての発言だつた。

爺だとえども、当然私よりは背が高い。

だが、そういう意味ではなくて、この時何故か、爺が一回り大きな存在に思えてしました。

「……つは。今更貴様らなんかに、頼むことはない」

アホらしい、と思つた。

私の方が、ずっと年上だぞ。

何故お前らに教師面されねばならない、と思つた。

でも、爺はそれでも穏やかに笑いながら自分の髪を触つていた。素直じやない不良生徒を相手にしたときの教師のような態度であった。

「そうかのう」

「そうだ。もういいか、私は帰るぞ」

「ではまたの、エヴァ」

○

『好かれてるのね』

「はあ？」

家に帰り鞄をベッドに放り投げた直後に、声は私にそう話し掛けてきた。

ぼふり、と鞄がベッドの上で跳ねる。私はそのままソファーアーに向かつて勢いよく腰を下ろした。

部屋のライトがやけに目に染みる。すぐにも眠つてしまいたいほど疲れていた。今日は特に慣れないと感じたような気がした。

『皆が貴女に協力的よ』

「……ふん。あほだよあいつらは」

私の学生生活に協力的で、何になるというのだ。

奴らには何のメリットもない。吉野あきほも一緒だ。

私なんかと仲良くなつたところで、奴にいことなんてひとつもあ

るまい。

そのままソファーに横になつて、私は目を閉じた。制服が皺になるか、と考えたが、すぐにどうでもよくなつた。身なりにはそれなりに気を使う方だが、家にいる間はまた別だ。

『……貴女は、何に怯えているの』

声は、慎重な口調で私にそう訪ねた。

そうか、こいつからしたら、私は怯えているように見えるのか。

私は、小馬鹿にするように鼻で笑う。的外れ、とも言えない意見だった。流石に私の中にはあるだけある。

「……意味がないんだよ。仲が良くなろうが、優しくされようが、縁も何も、すべてがいらないんだ」

今更こいつに虚勢を張ろうとする気はなかつた。弱々しく、自分が嫌いになりそうな考えだが、どうせ私の中にいるこいつにはいつかばれる。ならば偽るだけ体力の無駄だということだ。

私は横たわりながら、ひとつそりと本心を語ろうとしていた。

『……また意味？』

「だつて、そうだろう？」

それは。

私の諦めの言葉だつた。

「どうせすべてはいつか灰になつて空を飛ぶ」

どんなものも、私より先に消えて、死んで、空を舞つていく。
仲良くなろうが、優しくされようが、全てが灰になる。
遠い昔に親切してくれた人も、私を愛そうしてくれた人も、皆
が死んだ。

今はもうその人を覚えている人はいなくて、世界では最初からいな
いことになつていて、私の中にうつすらと残像があるだけだ。その像
も、年が経つ度にどんどんと消えていく。

私の中にしかいないのに、それすらなくなつてしまつたら、それは
もう最初から存在していないと同じだ。

ナギほどの強力な存在なら、ずっと私に残つてくれるかと思つた
が、何のこともない。例え奴でも結局は消えるのだ。

この世界に残されていくのは、ずっと、自分一人だけだ。

「だから、意味がないと言つてはいるんだ。」

私の心は、もう、冷えきつっているのだ。

他の奴らに優しくされても、心が苛つきざわつくだけだ。

冷たい世界で、氷に埋め尽くされた世界で、私は独りで立つていく
のだろう。

『……それもまた、貴女に掛かつた呪いなのね』

声は、静かにそう告げた。

それから、ゆっくりとまた言葉を紡ぐ。

その言葉は、私の頬を撫でるかのように、優しく、柔らかく、告げた。

何もいらない筈なのに、目の前には、笑った女性の顔がある気がした。

『私がいるわよ』

「……なに？」

『一緒に、覚えてあげる。これからあること、私の中にも残してあげる。そしたら、一人じゃないわ』

「……お前、だつて」

『私は、貴女が死ぬまでしなないわよ』

声は、また笑つた。

私はいつの間にか、天井に向かつて手を伸ばしていた。

誰もいない空間にある筈の手が、何かに掴まれているような気がした。

『一人の中に残ればそれはただの記憶じやなくて、思い出になるわよ。これから先起こること、私と貴女の間に残していきましょう。そうしたら、全てが無駄じやないと、思えるかもしれないわね』

凍える冬の世界で、その言葉が、熱を持つているように感じた。大した仲でもなく、人でもない奴の言葉だ。

でも、その声が、私にとつてたつた一つの救いになる気がしたんだ。

第5話

「……ふう」

そこまで話すと、エヴァンジエリンさんは疲れぎみに溜め息をついた。

この別荘の中でも夜という概念はあつて、同じように太陽も月もある。人工的に造り出したものだそうだけど、月はちゃんと周期的に欠けて満ちていくようになつていてるらしい。

その満月を見て、僕の師匠は感情のはつきりしない複雑な表情をしていた。寂しみながら笑つているかのような、曖昧な顔だった。

どうかしましたか、と訊ねれば、彼女は過去を思い出していたと答え、駄目元で内容を聞いて見ると、また微妙な表情をしたけれど、ゆつくりと話をしてくれた。

昔を語るエヴァンジエリンさんは、いつもよりどこか大人っぽく、そして優げだつた。白い肌は美しくあつたけれど、同時に弱々しさを備えているようで、その姿はいつもの彼女からは想像が出来ないものであつた。

「……少し、話しそぎたな」

「いえ！ そんなことないです！」

勢いよく首を振つた。

エヴァンジエリンさんについて、僕はまだ知らないことは沢山あつた。師匠として僕に魔法を教えてくれるようになつて数か月。教え子として机に座る彼女が実は悪名高い魔法使いで、しかも僕の父と関わりがある、ということは聞いているけれど、彼女自身のことは分からぬことが多い。

だから、こうして話を聞く機会があつて純粋に嬉しく思つていた。

「おまえ、まだ聞きたいのか」

今度は縦に首を振つた。

こうして彼女が自分の話をしてくれたことは今までほとんどない。

たまたま今、満月が見える状況で昔を思い出したから気まぐれにこうして語つてはいるだけであって、多分僕に聞かせたいという感情ではないのだろう。私のことを知つてほしいと、年頃の女性にありがちな主張をエヴァンジエリンさんがする筈がなかつた。

だからこそ、今日この機会を逃したら、次はいつ彼女がこの話をしてくれるのか分からぬ。もう一度と彼女の過去を聞けることはないかもしないというのは、嫌だつた。

「つまらん話だぞ」

「そんなことないです」

「ただ私が一人で語つてるだけなのにか」

「その語りを聞きたいんですよ」

エヴァンジエリンさんはまた息をついた。

「……そうか。分かつた。だが少し私に休ませろ。喉が渴いた」

「えつーと、僕の血、飲みます？」

僕が自分の腕を差し出すと、彼女はふつと短く笑つた。

「嬉しい申し出だが、そんな気分じゃないな。ワインを持つてくる」

そう言つて、エヴァンジエリンさんはゆっくりと立ち上がり僕の側から遠ざかっていく。

長い金色の髪が、きらきらと揺れている。暗闇に映えるその色は、星のようにも月のようにも思えた。背丈は僕とそう変わらない筈のに、彼女はずつと大きな存在に見える。

遠くなつていく背中を眺めながら、僕は考える。彼女がしてくれた話は、今から何年前の話になるのだろうか。

お父さんが掛けた呪いである登校地獄と、不思議な玉の呪いの話。

エヴァンジエリンさんがお父さんと関わりがあるのは知つていたけれど、登校地獄という無茶苦茶な呪いを掛けたのがまさかお父さんだなんて思つてもみなかつた。

それに、意識のある呪いだなんて、僕は聞いたことがない。呼んだ書物の数には自信があつたけれど、その中にもそんな呪いの存在が書かれていたことはなかつた。

きっとどちらの呪いも、かなり稀少なものだろう。

今現在、彼女の内でその2つの呪いがどうなっているのかは僕はまだ知らない。

早く答えを知りたいという好奇心はある、急いで聞き出そうとは思わなかつた。ゆっくりと順序を追つて、彼女がそのことを話すのを待ちたかつた。彼女の口から、その答えを知りたいと思つた。

……しかし。この話の結末はある程度予想出来てしまう。今まで何度も彼女の家を訪れたけれども、家中で話に出ていたその呪いの玉は見たことがなかつた。

ということは、もしかすると、それはもうすでに――。

小説を読んでいてバツドエンドだと分かつてしまつたように、寂しさで胸を締め付けるような想いはしていると、脇にある柱から視線を向けられていることに気付いた。

不審に思つてそこをじつと見つめると、がた、と物音が立つ。

「……あのー、皆さん。何してるんですか？」

声を掛けると、彼女達は「しまつた」という顔をしながらぞろぞろと出てきた。やつちやつた、というジエスチャーをしつつも困つたような笑みを浮かべて、ばらばらに足音を立てて此方に向かつて歩いてくる。

「ほらあ、明日菜が顔を出しすぎるから見つかつてしまつた」
「ちよつと木乃香！ 私のせいだつて言うの?!」

「そもそもあんなところに皆で隠れるのが無理があつたんですよ
……」

「のどがなんて押しくら饅頭されてつぶれてたです」
「う、うう。辛かつたよお」

「皆さん……今までの話聞いてたんですか？」

僕がじつと見つめてそう訊ねると、明日菜さんはあまり反省してなさそうに頭を搔きながらごまかし笑いを続けた。

「盗み聞きはよくないってうちは言つたんや～え？ なあせつちゃん」「まあ、言うには言つてましたけど、お嬢様結構ノリノリだつたような……」

「なによ！ 私ばっかり悪者にして！ 皆結局一緒に聞いてたじやない！」

「はい、そうですね。これに関しては全員悪いといつていいでしょ？」

夕映さんは淡々とそうは言うけれども、悪びれた様子もなく、いつものように冷静な顔つきだ。

「一人で密会していますから、何かけしからんことでもするのではないかと心配だつたのですよ」

訊いてもいないのに夕映さんはそうは言つて、ねえのどか、と前髪で目を隠された少女にも同意を求める。

「ええ？ い、いや、……そう言う訳じゃなく……はないんですけど……」

うう、とのどかさんは顔をほんのりと赤らめながら、ごめんなさい、と小さく謝る。その姿は可愛らしかつたけれど、僕に謝られても、と少し困つてしまつた。

「……でも、珍しいわよね。エヴァちゃんがあんな風に自分のこと話すなんて」

「そうやなあ。うち、エヴァちゃんに色々教えてもらうとするけど、昔のこと聞いたのは初めてやわ」

同じクラスメイトである皆も僕と同じような感想を思つたらしくて、口々にそう言つた。

彼女達も、エヴァンジエリンさんにはお世話になつてゐる。この別荘は魔法の修行にも便利だし、ちよつとずるだけれど、休んだり勉強したりするのにも使えるのだ。エヴァンジエリンさんはこの場所に特にこだわりがある訳ではないようで、歳をとつても構わんと思うなら勝手に使うがいい、と言つていた。ついでに、皺が出てきた時にこそ使つたことを後悔しても遅いからな、と呆れつつも加えていた。

「……千雨さん。どうかなされたのですか？」

「……ん、ああ」

皆から一步引いたところで思い更けるようにしていったのは、千雨さんだ。この中でも最も冷静で、年不相応な落ち着きを持った彼女は、僕達を安心させてくれることが多い。まあ、たまに爆発したかのように騒ぎ立てることもあるのだが、それは置いておいて。

「エヴァがあいつの話をすることは思わなくてな」

「……あいつ？」

「それって、さつきのお話に出ていた、呪いの玉のことですか？」

「そうだよ、と千雨さんは頷く。

「千雨ちゃんも、その玉のこと知ってるの？」

「まあ、な」

この中でエヴァンジエリンさんと一番仲が良いのは、千雨さんだ。僕が着任してくる前から二人はよく一緒にいたようで、互いに話すときはいつも自然であつた。女子同士の馴れ合いというよりも、お互いの距離感をしつかりと掴んだ上で付き合っているみたいで、じやれあつたりするような二人ではないけれども、遠慮のないその感じは見ていて心地良いと思うことがある。

「あの話つて……私達が中学生になる前のことですよね？ 千雨さんは昔からエヴァンジエリンさんと知り合いでいたんですね？」

「昔つつても、小学校の時だ。多分四年か五年」

「あー、だからエヴァアちゃんと千雨ちゃん仲ええんやなあ」

かもな、と千雨さんは気の抜けた返事をする。

「それで、呪いの玉のことも知つてると」

「知つてるというか、私もあいつとは知り合いでたよ」

だつた、と千雨さんは確かに言つた。その発言に気付いた数名は、若干気まずそうに顔を背けた。

「……どんな人だつたんですか」

「……人ではなくない？」

「明日菜さん、ちょっと静かに」

「余計な茶々いれんでええよ、明日菜」

「ええ……なによなによ皆して……」

悲しい話になりそうだと直感した人は真剣にその話を訊こうとしていたため、気付いてない明日菜さんだけ妙に温度差がある。

どんな人と言われてもなあ、と呟いてから、千雨さんもエヴァンジエルンさんと同じように月を眺めた。

その横顔は、やはり曖昧であった。

寂しいという気持ちが見えつつも、ほんのりと見せる微笑みが穏やかさを備えている。眼鏡から反射する月の光が、さらに色濃く見えた。

「エヴァの言う通り、変わった奴だつたよ。我が儘に見えないのに変なところで我が儘で、何故か礼儀にはうるさかつた。人に厳しくも、甘くもあつた。大人っぽくて、今の私の周りにはいないタイプだつた。あとは、そうだな。いい声をしてた」

「いい声?」

「ああ。落着く声だ」

千雨さんは懐かしそうに頬を緩めていた。

「あと、そうだな。あいつはエヴァのことが……」

「なんだ千雨。いつから語り手が変わったんだ?」

エヴァンジエルンさんが、ワイングラスを片手にしながら戻つてきた。グラスの中で真紅の液体が僅かに波打つていて

「エヴァ。悪かつたな、勝手にあいつのこと話しちまつて」

「ふん。貴様らが隠れていることは分かつていて。今更さ」

エヴァンジエルンさんは皆がここにいたことに気付いていたらしい。彼女たちは順々に謝罪を述べるが、エヴァンジエルンさんはさして気にも留めていないようだつた。

「あのお……それで……」

「ふむ、続きか……」

僕がもう一度話をしてくれるよう促すと、エヴァンジエルンさんはグラスを持つていらない手を頸に当てた。

「気が変わつたな。私が語るのはやめよう」

「え?」

皆の視線が一斉に彼女に集まる。やはり盗み聞きはまづかつたと、反省する表情が見えた。

「そんな、師匠……」

「その代わり、だ」

エヴァンジエリンさんは細い指をそつと千雨さんに向けた。

「しばらくは千雨に語らせる」

「はあ!?

千雨さんは予想外だつたようで、蚊でも追い払うかのように片手をひらひらとさせた。

「ふざけんなよ。嫌だぞ私は」

「いいじやないか。私も少しは聞き手にならせる。今まで私の話を勝手に聞いてたんだろ?」

「だからって私だけが話すのは納得いかん」

更には背中を向けて、千雨さんははつきりと拒否の姿勢を示すのだが、エヴァンジエリンさんはぼつりと呟く。

「前のコスプレ」

「!?

「あの餓鬼っぽい服装をつくるのに協力してやつたのは誰だつたかなあ」

「ぐぬぬ……」

「あのとき貴様は、『恩にきる! エヴァのおかげでコスプレに間に合つた。今度埋め合わせする!』やら言つてたなあ」

「……コスプレ?」

「……コミケ?」

首を傾げるのは、聞き手の僕達。彼女がコスプレ趣味だと知らないものは、どういう話かも分かつていないだろう。しかし、コミケとはいつたいなんのことなのだろうか。

「さらに言えば」

「だあーーー! わかつたよ、話せばいいんだろ話せば!」

最初からそうしろ、とエヴァンジエリンさんは悪い顔で笑つてい

た。

思わぬ形で語り手が変わり、聞き手の人数も変わった。僕は、エヴァンジエルンさんの話が中断するのは惜しかつたけれど、同じくらいに千雨さんの話にも興味も持っていた。彼女もまた、自分を語るようなタイプではないからだ。

クラスメイト達も千雨さんの語りが気になるようで、おのずと小さく円をつくり座り始める。さつきまでと違い、今度は大人数で千雨さんを囲む形で、皆がじつと千雨さんに注目していた。

「……つく」

「なんだ、照れているのか？」

「うるさい！」

からからと笑うエヴァンジエルンさんに、千雨さんは耳を赤くしながら吠える。それから、ゆっくりと息を吸って、再び月を眺めた。「しゃあないから、つまらねえ話だろうけど、私も少し昔を語るぞ。何を言えばいいかわからんからエヴァアの言つてた、呪いの玉の話だ。私があいつと出会つたときはだな——」

こうして、語り手が変わり、また話が始まる。

満月はまだ落ちそうにはない。

第6話

それは確か、ちょうど蝉が鳴き始めたくらい時期だった筈だ。

小学校の夏服を着た私の腕に、まとわりつくようにしつとりした汗が付いていたのを覚えている。

照りつける日差しは強くて、あー紫外線っていうのはこのことが、なんて覚えたての言葉を浮かべながら私は公園のベンチに座つていた。

何をしていたのかつて？そんなの、覚えている訳ないだろ。

ただ、ランドセルを背負つてた覚えがあるから、きっと放課後だろうな。

学校が嫌で陰鬱な気分になつていたのかもしれないし、両親と喧嘩して家に帰るのが億劫になつていたのかもしれないし、暑いのが辛くて木陰のあるベンチで暇を潰していたのかもしれない。

分からぬが、多分ネガティブなことがあつたんだと思う。何もなければすぐ家に帰つてダラダラとパソコンでもしてるし、そもそも当時はあまり楽しかったという思い出もなかつたから。

そこ、悲しい小学生とかいうな。自覚はあるが。

話を続けるぞ。

とりあえず、当時の私が何か意味のないことを考えて座つていたら、声を掛けてくれた人がいたんだ。

「あのう、すみません」

そう言われたが、あまりに弱々しい声だつたから、最初は私に話しかけてるのではないな、と思つて無視したんだ。

そしたら、また同じボリュームで、同じことを言うんだ。

普通は2回目は声を荒げたりするよな？ そんなこともしないから、それじや聞こえんだろ、と思つて顔を上げた時、目の前にその人がいた。

思わず驚いてしまい、ランドセルを落としそうになつた。すかさず、だ、大丈夫ですか、と本気で心配されたので、私は手ぶりで大丈夫ということを伝えて、その人のことを見た。

その女性は、中等部の制服、つまり今の私たちと同じ格好をしていた。背丈は低く、肩につかないくらいの黒髪は内側に少し巻かれていて、ボブと呼ばれる髪型に近かつた。

そうだな、雰囲気は宮崎に似てたよ。目は前髪で隠れてなかつたけどな。あと、中学生にしては幼い顔つきをしていて、年上、という印象はあまり抱かなかつた。

「これ、あなたのですか？」

そう言つて彼女が差し出してきたものは、小学校の学生証だつた。そこには年度の初めにとつた目付きの悪い私の写真が貼られていて、それが他人の手にあると言ふ事実がどうしようもなく恥ずかしく思えた。分かるだろ？ 写りの悪い写真を他人に見られたくないつて気持ち。

落ちてましたよ、と笑つてくれる彼女に目も合わせず、私はひつたくるようにそれを奪つて、どうも、とどもりながら言つた。相当に態度が悪かつただろうに、彼女は笑顔でどういたしましてと返してくれた。

「小学校の近くにある駄菓子屋の前くらいに落ちてたよ」

買い物でもしたの、と続ける彼女に首を横に振り否定した。多分、たまたまそこで靴紐を結び直した時に胸ポケットから落ちたのだろう。しかし、気になることがあつたから、私は訊いた。

「……あそこからここまでつてかなり遠いですよね。もしかして、ずっと探してくれてたんですか？」

「ないと氣付いたら、困るかなつて思つて」

なんというお人好しなのだらうつて思つた。

拾わざ無視することも、小学校の誰かに届けることも出来た筈だ。それなのに私を探して届けてくれるのは、結構な労力だろう。彼女の笑顔の裏には打算なんて全く見えなくて、人のために、なんて言葉は偽善と信じて疑わなかつた当時の私にとつて、その行動は衝撃的でもあつた。

「わざわざありがとうございます」

流石に私もお礼を言つたと思う。

「ううん。大丈夫だよ。ああ、でも、ついでに少し聞きたいことがあるのだけれど、いいかな」

あくまで下手にでる彼女に、私は頷いた。すると彼女は一枚の紙を私に見せるように拡げてきた。どうやらこの街の地図だった。

授業以外で街の地図を見るなんて経験はそれが初めてで、なんとかそれだけでこの人は眞面目な人なんだな、という印象を受けた。

「……に行きたいのだけれど、ちょっと道が分からなくて……」

指さすところを見れば、街の少し外れにある林の方へ行きたいようだつた。

なんでそんなところについて、それはもう少し訊けば分かる。そん時の私もきっとお前らと同じことを思つただろう。

「えつと、この道をまっすぐ行つて、小川を上流に沿うように歩けば近いどこまで行くと思います」

「ありがとうございます」

私は小学生だというのに、彼女は気にする様子もなく丁寧に頭を下げてくれた。

「私、あんまり外を出歩いたりしないから、道とかよく分からなくて……」

確かに、そんな街の外れの道は近所にいなければ行くこともないし、そのくせ見渡しが悪いから土地勘がなければ迷うのも分かつた。頬をかきながら困ったように彼女は言つたから、わたしは反射的にこう言つてしまつた。

「……そこまで、案内しましようか？」

自分でも驚いた。極力人に関わることを避けて来た筈なのに、そんなこと言うなんて。彼女のお人好しさに当てられていたのかもしれない。

しかしそう言つたあと、これは悪い提案ではないと思えた。

苦労して私を探してくれた彼女に、言葉でだけお礼してハイおわりとするのは、私自身納得いってない所があつたからだ。

「でも、悪いよ」

「……いえ、私は全然。時間あるので」

一瞬だけ気温の高さに憂鬱を感じて後悔したけれど、ずっと学生証を持つて私を探してくれた彼女にそんな風に言う訳にはいかなかつた。

彼女は私のことをおもむろに見つめた後、柔らかく笑つた。

「それじゃ、お願ひします」



案内をしながら、成り行きでお互い自己紹介することになった。

彼女の名前が、吉野あきほ、というのもその時初めて知つた。

当時の私は、中学生という人達は、もつとしつかりしてて、大人で、怖い存在に思つていた。

今のお前らを見ていても全くそろは思えないが、上級生や上の学校の人が怖いって気持ち、なんとなく分かるだろ？

親と過ごす実家暮らしから寮暮らしへと変わつて、大抵のことを自分でやるようになり、ランドセルを背負わなくなつたその日から、小学生という殻を破つた大きな存在。それが中学生だと思つてた。

でも、その少女は全くそろは見えない。言つたら悪いが、弱々しくて、小学生とそろ変わらないようにも見えた。

しかしその一方で、落ち着いて、優しげで、その雰囲気は本当の人つぽさて感じがして、私はなんとなく憧れを抱いたりもした。

「それじゃあ、吉野さんは休んだクラスの友達のところに届け物をして、行くところだつたんですね」

「うん……そろなの」

少し困つたように返事をしたので、疑問に思うと、彼女は呟くように話してくれた。

「友達、つて私は思つてるよ。でも、あつちはそう思つてくれてるか分からぬの」

「……そろなんですか」

私に気の利いた返事なんて出来る訳がない。友達とも碌に話さないのに、年上の相談になど乗れる筈もない。

「それより、敬語喋りにくかつたら普通に喋ってくれてもいいんだよ？」

「でも、自分小学生ですけど……」

「私だつてまだ中学生だよ？ そんなに変わらないよ」

学校というのは、学年の差で先輩か後輩かが既に決めつけられていて、その関係は絶対に変わることがなく、下のものは先輩に逆らえず敬語で話し続けなければならぬというルールがあるものだと思つていた。小学校ですらそうなのだから、中学ではより厳しいと聞いていたのだが、この人はそういうことを全く気にしない人であった。

本当に。本当に友達のように、私に話しかけてくれるんだ。

私が年下だからといって上に立とうとする気もなく、同じ目線で話してくれる。

「そうだ。千雨ちゃんつて呼んでいい？」

それでも、そう言われた時は正直かなり気恥ずかしかつた。名前で呼ぶなんて友達でもいいくらいだ。断りたかったのだけれど、その純真で無垢な瞳にしつかりと見つめられたら、嫌です、とは言いづらかつた。

「はあ、まあ、いいですよ。」

結局私は承諾した。

しかし、こんなことだけであきほさんは頬を緩めて嬉しそうにしていて、私はなんとなく対応しづらかつた。

優しさに溢れたその笑顔は、私の周りにはいないタイプで、どう接するのがいいのかよく分からなかつた。

「でも敬語は別にいいので、使わせて下さい。それで、その友達つて、どんな人なんですか？」

あきほさんはうーん、と考えてから話した。

「すごく綺麗な人。金色の長い髪が素敵で、白い肌は雪を見ているみたい。話す時にね、ちょっと緊張しちやうの」

「それは、すごいですね」

そこまで手放し褒めるので、私は純粹に興味が湧いてしまつた。芸能人を見る感覚、というのに近いのだろうか、美しい人がいると言わ

れたら、同性でも見てみたいと思つてしまふ。



本当にこんなところに住んでいる生徒なんているのだろうかと、案内している途中で思つた。

周りには店もなく住宅もなくあるのは木々だけ。もしかしてあきほさんは騙されているんじゃないだろうか。クラスの苛めつ子にありもしない住所を教えられ、そこにちゃんと届け物しろよ渡すまで教室に入るんじやねえぞ、なんて言われて。純粹なあきほさんで遊んでいるのではないだろうか。

そう思うと、私が胸が熱くなるくらい苛ついた。まだ会つたばかりの人だが、こんないい人を騙すなんて許せねえ、とまで思った、

「千雨ちゃん、どうしたの？」

「いや、その、あきほさんつて……」

虐められてるんですか、なんて率直に聞けるはずもなく、私がゴニョゴニョと言い淀んでいた時、あきほさんは、手を前にして指をさした。

「あ、あつたよ。ほら、あそこじゃない？」

え、と思いながら見て見ると、そこにはたしかに家があった。

ログハウスと言われるものを実際に見たのは、それが初めてだった。

木で組み立てられたその家はまるで作り物みたいで、私は柄になく感動してしまつた。

「（）、玄関だよね」

あきほさんは意外と臆すことなくドアの前に立つて、ドアを見つめる。

「呼び鈴、ないね」

そう言つてそのドアをこんこん、と鳴らした。

「はあい」

少し経つてから女性の声が聞こえて、ドアが開いた。

現れた女性は、とても綺麗な人だつた。

肌が白く、背は高く、腰まで届くような金髪はまるで宝石のように輝いていて、私は思わず息を飲み込んだ。

なるほど、確かにこの人と話すなら緊張してしまう、と思つた。

「あら、あなた……」

「あ、あの、私、エヴァンジエリンさんと同じクラスの、吉野あきはと言います。あの、今日エヴァンジエリンさん休まれたので、プリントとか、持つてきました」

あきほさんはたどたどしくその女性にそう言つた。そして私は、この人があきほさんの友達でないことにやつと気付いた。普通に考えればこんな中学生がいるわけがない。綺麗という情報で判断してしまつたが、この人はきっと母親なのだろうと、私はもう一度その美しい女性を見ながら推測した。

「あきほちゃん、ありがとね。それで、そつちの子は」

「え!? えっと、私は……」

「私の友達の長谷川千雨ちゃんです。ここまでついてきてくれました」

口籠る私の代わりに、あきほさんは私を紹介してくれた。それが頗もしくも恥ずかしくも感じて、私は、ども、と短くお辞儀をした。背中に背負うランドセルが場違いのような気がして、すぐにでも降ろしたいと思つた。

「あの、エヴァンジエリンさんの体調は……?」

「ああ、もう大丈夫よ。ただの風邪みたいだし、しばらく寝たら良くなつたみたい」

「良かつた……」

胸を撫で下ろすようにして心から安心しているあきほさんの目線に合わせるように、女性は少し脚を曲げた。

「せつかくだから、顔を見ていいかい? あの子、喜びはしないけど、驚くわよ」

悪戯つ子っぽい笑みを浮かべたその人は、急に幼くなつたように見えた。

しかし、喜ばないとはつきり言うのはどうなんだと思つた。

「で、でも」

「いいからいいから、ほら、貴女もどうぞ。お茶くらい出すわよ」

そう言つて、女性は私たちの背中をぐいぐいと押して家の中に招き入れた。私はそこまでするつもりなどなかつたのだが、押しに弱いのであつさりと迎え入れられてしまつた。

家中には洋風で、人形などの小物が沢山飾つてあつた。どれも手作りのようだがとても良く出来ていて、じっくり見て見たくも思つたが女性が私達を先行して進んでいくので立ち止まりにくかつた。

一つの部屋の前に立ち、コンコンと女性が扉をノックする。

「エヴァ、入るわよー」

そう言つて、返事もしないうちに扉を開けた。プライバシーも何も感じなかつたが、家族ならそういうものだろうと私は納得した。

「……お前、まだその姿でうろついていたのか」

部屋に入れば、ベッドの上に、少女が座つていた。まるで人形のような少女。

彼女がエヴァンジエリンで、その時が私たちの初対面だつた。

……今言うのは少し恥ずかしいが、あきほさんの言うことも分かると思った。美しい女性とよく似たこの少女と話すのは、緊張してしまふかもしぬれない。

少女は機嫌が悪いようで、眉を寄せた表情で女性を睨みつけていた。

「その格好を辞めろと言つただろう。さつさと私の中に戻れ」

「だつて、あのままじや看病も出来ないじやない。貴女、強いくせに風邪なんかにかかるから」

「うるさい。呪いで抵抗力も弱まつてるんだ。それと、なんでその格好だ。私の姿を使う必要があるか」

「正確には、貴女が幻でみせる大人になつた姿ね」

「どつちでも一緒だ」

その時は、その会話の意味が全くわからなくて、私もあきほさんも

呆然としていただけだつたと思う。

少ししてやつと、エヴァは私達に気付いた。

「……なんだそいつらは」

「あきほちゃんとそのお友達ですつて」

「そういうことを聞いてるんじゃない。なんで家にいてしかもこの部屋にまで連れてきてるのか聞いてるんだ」

「学校のプリントを届けに来ててくれたのよ」

「そもそもなくて、なんでわざわざ私の前に連れて来たのかを……。はあ、もういい」

頭を抱えるようにしてうな垂れたエヴァは、心底疲れているように見えた。

「あ、あの、エヴァンジエリンさん。風邪なのにごめんね？ 大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。だからお前は置くものを置いてさつさと帰れ」

私は、その態度にカチンときた。

わざわざこんなところまで届け物をしてくれたあきほさんに、その態度はないだろう。

「あんた、普通はまずお礼を言うもんじゃないのか？」

「ああ？ なんだそのガキは」

「あんただつて、背丈はガキと変わらないじやねえか」「なんだと？」

「千雨ちゃん、私は大丈夫だから、落ち着いて。ね？」

睨みつけてくるエヴァに、私も睨み返す。

その間に入つてくれたあきほさんは困った顔をしていて、私は少し心苦しかつたが、それでも怒りは収まらなかつた。

その時、コン、という音が部屋に響いた。

女性が、エヴァの頭を軽く叩いたのだ。

「エヴァ、千雨ちゃんの言う通りでしょ。まずはお礼よ」

「別に頼んでないだろう。なんで私が……」

「エヴァ」

「……はあ。わかつたよ」

そう言つて、エヴァはあきほさんとしつかり向き合つた。

「届け物、助かつた。これでいいか？」

「あんたなあ、もつと言ひ方が……」

「千雨ちゃん、いいの。エヴァンジエリンさん、どういたしまして。勝手に部屋まで入つてごめんね」

やつぱりあきほさんは凄く出来た人で、自分が悪くなくてもしつかりと頭を下げて謝つていた。それを見て、私がこれ以上ややこしくするのはきつと間違つていると思い、私は怒りを胸にしまつた。

「お母さんも、エヴァンジエリンさんに会わせてくれてありがとうございました」

「いいのよ、私が連れてきたのだから」

そう言つて、女性は優しくあきほさんの頭を撫でていた。すると、エヴァはまた機嫌の悪くなつた顔をして、おい、と私達に言い放つた。

「誰がお母さんだ」

「え、あの、この人がそうかと……。ごめんなさい。違つたの？」

ああ、姉だつたのか、と私は一人納得した。母親にしては若い人だとは思つていたから特に不審には感じなかつた。

「違う、そいつはただの……居候みたいなもんだ」

「はあ？ こんなにそつくりなのに、そんなことあるかよ」「あるんだよ」

ぶつきらぼうに言うエヴァは信用出来なくて女性を見るが、その人は否定もせずにいたので、まじかよ、と私は呟いた。

「すみません勝手に勘違いして……。あの、貴女のお名前は……」

「ああ、そう言えば名前を付けてなかつたな。タマとかそんなんでいいんじゃないかな」

「なんであんたが名付けるんだよ。ペツトじゃねえだろ」

「ペツトみたいなもんだ」

「お前……！」

流石に無礼すぎて、私はまたエヴァに対して怒りをぶつけようとしたが、それを遮るように、しん、と心に響くように聞こえた声があつ

た。

暑い筈の日だったのに、汗はすっかり引いていた。喧しく鳴いていた蝉の声も、いつのまにか聞こえなくなっていた。私達は皆、その女性に注目していた。

「雪姫よ」

女性は、雪姫さんは、自分の胸に手を当てて、もう一度言った。

「私の名前、雪姫って呼んで」

第7話

雪姫。

その名前を聞いた時、初夏だと言うのに肌寒さを感じた。暑い陽射しが窓から部屋に入り込んでいる筈なのに、何故か冷氣のようものが充満している気がして、気付けば私は自分の腕をさすつていた。しかし決して不快なものではなく、むしろどこか清々しさがあるようと思えて、心がすっと楽になる感覚に覚える。

外に見える木々が宿す葉は黄緑で、僅かな風で揺れるその様は間違いないく今の季節を示すものなのに、場違いだと感じてしまう。

彼女の、肌白くシミひとつない美しい肌は、その名に相応しいと思つてしまつた。

「……雪姫、か」

エヴァが呟くように言うと、私達はハツとして現実に戻されたような気になつた。再び蝉の声が響き渡り、部屋がみるみる暑くなつていつような錯覚に陥る。

「大層な名前だな。雪の姫だとは。自分で言つて恥ずかしくないのか

「そうかしら。私の形^{なり}に値すると思うのだけれど」

「自己評価が高いやつめ。それにそれは私の姿だろうが」「だからよ」

「……意味がわからん」

エヴァはそう言つたが、勿論私にも二人の会話の意味はよく分からなくて、黙つて聞いている他なかつた。

するとそんな私達に気付いてくれたのか、雪姫さんはこちらを見て笑いかけてくれた。

「ごめんなさいね、こんな病人の部屋に長いこと居させて。それじゃ別の部屋で約束通りお茶でもしましよう」

「いや、その私は、エヴァンジエリンさんに会いに来ただけで……」

「いいのよ、この子は。私ずっとこの子としか話してなかつたから、他

の人と話すのは久しいの。私の話し相手になつて欲しいのよ」「

「ふん、私に気を使うならさつさと部屋から出てつてくれ」

「ほら、本人もこう言つているし、ね？」

遠慮しておきたかつたが、無理矢理背を押されるとなんとも断りづらい。あきほさんも困ったような顔をしていたけれど何も言えないようで、私達は移動していく。

「美味しいお菓子もあるのよ。みんなで食べましょう」

そう言つた所で、後ろからドタドタとついてくる足音がした。

「おい！ お前！ まさかあの菓子を勝手にあげるつもりじゃないだろうな！」

さつきまでは掛け布団で隠れていてよく分からなかつたが、エヴァの服装はワンピース型の洋風なネグリジエで、淡いピンク色が可愛らしかつたのだが、その時の表情は可愛らしさとはかけ離れたものだつた。つまり、怒つていたのだ。

「どの菓子のことか分からぬけど、棚の中の物を出すつもりよ」

「ばか！ やめろ！ あれは私がジジイから奪つた高級菓子だぞ！」

」

「奪つたものならいいでしょ」

「だめだ！ ばか！ とまれーー！ やめろーー！」

エヴァは怒号を上げながら雪姫さんの服を掴むのだが、力が足りないようでズルズルと引き摺られている。その姿は、今まで大人ぶつた喋りをしていた人と同一人物とは思えないほど子供っぽく、私はなんだか可笑しかつた。

あきほさんはそんなエヴァの様子が意外だつたようで、驚いた表情をしていた。

○

「くそ……。どうしてお前らと三等分して食わねばならんのだ。これは大月堂の菓子だぞ……」

ぶつぶつと文句を言いながらエヴァは羊羹を口に運んでいた。

結局エヴァも私達と一緒にリビングに降りて来て、お前らに食われるくらいなら私もここで食うと言い、どつしりと席に着いた。雪姫さんが出してくれた和菓子は確かにとても美味しいくて、それだけで面倒だつたが着いて来たことが報われたと感じるほどだった。さらに彼女が入れてくれた冷えた煎茶も、お茶などまったく分からぬ私でも美味しく思えるものだつた。

「あんた、風邪はいいのかよ」

「もう治つた。しかし呪いが発動しないところを見ると、ちゃんと病欠として処理されてるようだな」

「ちゃんと学校に欠席の連絡をしたからよ。学生として真つ当な理由があつて正しい手段を行つた上で休みなら何も問題はない筈よ」「……呪い？なんの話だ？」

「貴様には関係ない。というか、結局何者だよお前は」

「今更だな」

「長谷川 千雨ちゃんよ。あきほちゃんの付き添いで来てくれたんだつて」

「そうか」

「興味なさそうだな。別にいいけど」

「あのう……」

「なかなか和菓子に手を付けようとしなかつたあきほさんが、おずおずと訊ねようとした。

「どうしたのあきほちゃん。嫌いなものだつた？」

「いえ！そんなことないです！とつても美味しそうで、ありがとうございます！でも、その、雪姫さんは、いいんですか？」

「いいつて何が？」

「お菓子、私達の分しかないの……」

そう言われて、私は初めて雪姫さんの分がないことに気が付いた。コップも3つ分しかなく、お菓子もそうだ。彼女がわざわざ私達のために自分の分を譲ってくれたのだとすると、美味しい菓子なだけ、申し訳ないと思つた。そして、言われるまでそのことに気付かずご馳走

になつていた自分を恥ずかしく感じた。

「いいのよ、私は。食べられないから。気にしないで」「食べられない？ 調子悪いんですか？」

「そうじやないの。食べられないの」

私達が頭に疑問符を浮かべてその意味をよく考えようとしていた所で、エヴァがまた羊羹を爪楊枝で刺しながら適当に言つた。

「いらんいらん。これ以上私の食う量を減らしてたまるか。それに、こいつは元は玉つころだからな。今の姿は魔力を形どつてるだけで飲み食いする能力はない」

「……はあ？」

「あそこにあるだろう？あの金色の玉がこいつだ。中の思念は私に取り憑いてるようだが、まさかこんな風に離脱して意識を持てるとは、私も今日知った」

「そんなに離れたりは出来ないけどね」

「……まじでさつきから何言つてんだよ」

もはや意味が分からぬどころじゃなかつた。巫山戯ている様子もなく淡々と理解できないことを言つてゐる。日本語の筈なのに私には何も分からぬことが、苛つく気持ちにさせた。

「エヴァ、二人がいる前でそんな話ししていいの？」

「構わん。秘匿だのなんだは私には関係ない。話したいときは話すしやりたいようにやる。当然オコジョにされるつもりもないしな。それに、分からんだろう？お前らには。私らはこういう訳の分からぬい話をする不気味な奴等なんだ。関わらん方がお前らのためだぞ」「すぐそう言うことを言う。だから友達出来ないのよ貴女」「うるさい。余計なお世話だと言つてるだろう」

「……あきほさん、この人達ちょっと変ですよ。さつさと帰りましょ
うよ」

多分、この暑さに頭がやられたのだろう。それか、二人共厨二病的なものを患つてゐるか、だ。そういうものに理解がない訳ではない。漫画やアニメで見る剣や魔法を格好良く思うのは良く分かるし、もし

自分が使えたなら悪漢などをさらっと倒して、見かけた通行人に向かってそつと指を唇に当てて、秘密だぞ、なんてやつてみたい。いや違う。やつてみたいじゃない、やる奴もいるだろうなあ、だ。私がしたい訳じやない。勘違いするな。

とにかく。

現実でそんなことを言い出して、それを躊躇なく他人に言い聞かせるように話してる時点で、普通ではないのだ。害のない厨二病は心で妄想するだけで止まるが、周りを巻き込む時点でそれはもう痛い人でしかない。これだけ美しい容姿をした奴らがそんな性格なのは凄く勿体ないのだが、私にその性格を変えられる訳でもない。

だから、私は早くここから帰りたいと思つた。美味しい和菓子は惜しいが、それよりもあきほさんを連れてこの家から出ることを優先しようとした。

「……私、分かります」

だから、私はあきほさんがそう言つたことが、途轍もなく衝撃的だつた。こいつらちよつと痛いですよ、と続けて言おうとしたところでの発言だつたので、口はぽかんと開いて間抜けな顔になつていたと思う。

「何を言つているか、分かります。呪いとか、そんなに詳しい訳ではありませんけど、でも、そういうの知つてます」

そういうの、というのが何を指しているのか、私には理解出来なかつたが、雪姫さんとエヴァには通じたようで、二人の表情が少し変わつた。真剣味を帯びたこの空気に、私だけが疎外感を覚える。

あきほさんもそつち側だつたのか、と私は逃げ場のなさを嘆いていた。

「知つている、か。なら、私のことは分かつてゐるのか？」

「……うん。分かるよ。有名人だもん」

「吸血鬼ということもか」

「うん」

あちやあ、吸血鬼ときたかあ。

私は頭を抱えた。年頃の女性オタクは吸血鬼にハマる人が多いというのには聞いたことがある。背が高く黒いローブを羽織り颯爽と空を駆ける様子が格好いいんだろう。その尖った牙に襲われたいという気持ちを抱いてしまうんだろう。しかしそれなら自分が吸血鬼という設定は悪手じやないのか、なんて私は考えてしまう。

「……どうして、あきほちゃんはそういう事を知っているの？ 貴女、魔力もないし鍛えてる様子もない。とても関係者とは思えなかつたのだけれど」

「家系です。両親はそうでもないのですが、叔父が名の売れた魔法使いで、私の一族は皆一度は魔法を学びます。私は身体も弱く特に才能も無かつたため、深くは追求しませんでしたが、それでも、エヴァンジエリンさんの話は聞いたことがありました」

魔力、魔法使い。もう私にはとてもついていけなくて、どう切り出して逃げ出そうか悩んでいた。いやむしろ、私も何か職を設定した方がいいのだろうか。魔法少女、という言葉が浮かんで、朝のアニメでやつてている変身した少女達の姿に自分が重なる妄想をする。意外と悪くなかった。

「……ふん。だからが、貴様が私に絡んできたのは。興味か、今の私に対する同情かは知らんが——」

「違うよ!!」

あきほさんが、椅子から立ち上がりながら大きな声を出すので、わたしは驚いた。

彼女は、とても声を荒げるタイプには見えなかつた。設定や演技でこんな真剣な声が出せるとは思えなかつた。エヴァと雪姫さんの真つ直ぐな眼差しが、とても巫山戯て出来るようなものには思えなかつた。

だから私は、凄く混乱して、どうすることも出来なくて、ただ、座つ

ているしかなかつた。

「あなたが吸血鬼だからとか、そんな理由で、私はあなたと友達になりたい訳じやない！ 私は、あなたが……」

ゆつくりと、彼女はもう一度席に座りなおす。だれも机の上の菓子に手を伸ばすこともなく、あきほさんの言葉の続きをじつと待つた。

「……一年生の時にね、エヴァンジエリンさんを見たとき、私、凄く悲しい気持ちになつたの。この人は、『生きたくない』と思つてるつて感じたから」

『死にたい』ではなくて、『生きたくない』。その表現の違いは、簡単には説明出来ないのだろうけど、なんとなく伝わつた気がした。死にたい訳じやない。ただ生きるのが辛い。そう思うことは、確かにあると思つた。

「……分からんな。例え私がそう思つてたとしても、お前になんの関係がある。まさか、私を救いたいとでも思つたか？ それこそ、同情でしかあるまい」

「救いたい……って思つてはないと思う。エヴァンジエリンさんは、毎日そんな風に思いながら、それでも学校に来てて、ずっと外を眺めてた。……そんな姿が、とても悲しくて憐いけれど、私には、凄く綺麗に見えたの。素敵だと思った。そう考えてから、私は、貴女と友達になりたいと、思つてた」

あきほさんは、喋りながらも悩むようにしていて、慎重に言葉は選ぶけれども、はつきり纏まつているとは思えなかつた。

「……お前は分かつてないな」

「私は、吸血鬼だ。闇の福音だ。600年生き、人の生き血を吸い、殺し、そうして生きてきた。素敵だと？ 馬鹿を言うな。殺人鬼と仲

良く手を取り合えるか？ この血で塗られた手を躊躇なく握れるか？ 悪いが私は、今更誰かと共にいようだなんて思っちゃいない」

「……あんたさ、何言つてんの？」

思わず。

口を出してしまった。

「……貴様、まだいたのか。帰つていいぞ」

「いや、こんな状況で帰らねえよ」

そう言つて私は立ち上がり、あきほさんのそばに行き、その手を持った。困惑している彼女を立たせて、そして、エヴァの席に近付く。彼女の手を、エヴァの手の上に無理矢理置いた。

握つて。

そう私が呟くと、彼女は一瞬驚いた顔をしたけど、すぐに意を決したように、強くエヴァの手を掴んだ。

「……何をしている

「ほら、あきほさんはあなたの手を握れたぞ。これで友達。何か問題あるのか？」

「……貴様、何も分からぬのなら黙つていろ」

「ああ、分からねえ。さつきからあんたらがなんの話してるかなんて、1つも理解できん。でも、そんな難しい話じやないつてことくらいは、分かる」

なんで私はこんな行動に出たのか、考えた。

きつと、ムカついたからだ。

ただ友達になろうと言つているだけなのに、一生懸命に言葉を選ぶあきほさんや、格好つけて自分を語るエヴァに、ムカついたんだ。

私に友達は少ないが、友達作りがそんな大変なものじやないことくらい分かる。

エヴァがなんだつて、あきほさんがどう思つてたつて、そこに手があるなら、握るのが難しいなんてことはない筈だ。うだうだと悩むより、さつさと繋がつてしまえばいい。その考えは間違つていいのかもしれんが、でもそうした方がいいと思つてしまつたのだから仕方がないのだ。

「なんなら私も握つてやるよ。ほら、これで三人友達だ。あなたが吸血鬼だか人殺しだとかは知らねえが、気に食わなかつたら文句いつてやるし最悪縁を切つてやる。でも、それまでは友達。いいだろう？」

「

「……貴様……」

「あはははは！」

エヴァがまた何かを言おうとしたが、それを遮るように、雪姫さんの綺麗な笑い声が部屋に響いた。

「あはは、エヴァ、負けよあなたの。千雨ちゃん、いい子ね、本当に。意外とわがままで、いい子なのね」

本当に楽しそうに雪姫さんが笑うから、部屋の空気は少し和やかになり、私は自分が偉そうに口上を切つたことを冷静に思つて、少し顔を赤くしたのだった。

第8話

「じゃあ、説明してもらおうか」

改めて席について私が三人に訊ねると、それぞれが、あー、と言ひながら顔を合わせた。

「あの、ね、千雨ちゃん。本当はこう言う話は普通の人にはしたらダメで……」

「話すと長くなるのよねえ」

「わざわざ聞くほどのことじやあるまい」

「お前ら説明を面倒くさがつてるだけだろうが！」

ドン、と机を叩いたので、掌が少し赤くなつたのだがそんなことを気にしている場合ではなかつた。

「そうね」

「まじで面倒だ。帰つていいぞお前は」

「ち、ちがうのよ千雨ちゃん。ほんとあんまり知らない方がよくて……」

「こまできて何も分からず帰つてたまるか！ 気になつて眠れなくなる！ 頼むから説明してくれよ！」

三人は息を合わせたかのように私への説明を拒もうとしていた。あきほさんだけは面倒という訳ではなさそうだつたが。

「うるさい奴だな。大体何が知りたいんだよ」

「全部だよ！ 魔力とか魔法とか呪いとか吸血鬼とかだよ！」

この時点でも、そんなものが本当にあるのかは半信半疑だつた。いや、半分も信じてはいない。十中八九そんなものはないと心では思つていたのだが、彼女達が全てを妄想で話をしているとはとても考えにくかつた。あんなに真剣な声で、あんなに本気な表情で話す彼女達が、偽物とは思えなかつた。だからこそ、私は説明して欲しいのだ。

「仕方ないわねえ」

そう言つて、雪姫さんは立ち上がり、私の目の前に来た。背の高い彼女を前にして、私はちょっと怯んでしまう。

「なんだ、記憶を消すのか」

エヴァがぽつりと言うので、私の肩はびくりと跳ね上がる。

記憶を消す。ファイクションでは何か秘密を知ったものにやる常套手段だ。

私は急にどうしようもなく怖くなつた。迫る手がとてもなく大きく恐ろしいものに見えた。足が震えて、嫌な汗をかく。

「あ、あの。私は、それはちょっと嫌かなつて……」

気付けばあきほさんも立ち上がって、雪姫さんの服の袖を摘んでいた。

「せつかく、3人でお友達になれたのに、その想いがなくなつちやうのは、嫌です……」

「……あきほさん」

エヴァはその様子を暫し見つめて、頭をぽりぽりと搔き、大きく溜息をついた後でゆつくりと言つた。

「……あんなことで友達になつたと思われるるのは困るが」

そう言いつつ、エヴァは首を横に振つた。

「やめとけ、雪姫」

「……あら、そう呼ばれるのは初めてね」

「荼化すな。私も記憶を消すのは反対だと言つてはいる。勘違いするなよ？ 記憶を消すってのはリスクキーな行為だ。後処理を考えたら面倒だが今説明する方がよっぽどましなんだ」

「……勘違いするなつて、ツンデレみたいなセリフだな」

「前言撤回だ。脳が壊れるまでやつていいぞ」

「じょ、冗談だつ！ 頼む、やめてくれ！」

私が大声で懇願すると、雪姫さんはくすくすとお淑やかに笑つた。

「安心して。元からそんなことする気はないわよ。情報をそのまま入れてあげようかと思つたけど、それもやめとくわね。せつかくだし、お話をした方が面白そう」

「それも結構怖いけどな……」

入れる、という表現がすでに恐ろしく感じた。人間の脳とは、そんな簡単に情報を出し入れ出来るものだったのか。

「とりあえず、一つ魔法を見てもらおうかしら。エヴァ、なんかやつて」

「雑すぎるだろフリー。しかもなんで私なんだ。お前がやればいいだろう」

「私がやると結局貴女の魔力を使うことになるわよ。それに久しく使つてないから加減が分からないわ」

「部屋を壊さない程度なら別に構わんぞ」

「貴女も私を止めたのよ。ちゃんと協力しなさい」

「……はあ、仕方ないな。プラクテ ビギナル 火よ灯れ
アルデスカット」

唐突に、何の準備もしない私の前にエヴァが指を差し出して、その先から一筋の揺らめく炎を灯した。ゆらゆらと漂う炎は、音もなく指の先に在り続ける。綺麗で神秘的だと思つた。

「……魔法なんて、ほんとにあるんだな」

「疑わないのか？ 手品かもしれないぞ」

そうだとしても私には見破れないのだが、違うという確信がある。根拠はなくただの直感でしかないが、これに仕込みや細工があるとは思えなかつたのだ。

「ツチ。つまらん奴め。本当に小学生か？ もつと驚いたり出来ないのか」

「充分、驚いてるよ」

夢にまで見た魔法だ。漫画やアニメの世界ではなくて、目の前で本当に実現している。だと言うのに、意外と私が冷静でいられるのはどうしてなんだろうか。

金髪の髪をしたエヴァの顔が、炎で明るく照らされている。シミひとつなく、赤子のように綺麗な肌だ。なんだ、と怪訝な顔をして言う彼女に、何でもない、と私は答える。現実離れしたこの光景に、彼女の存在がしつくりとくる。きっと、魔法を使うエヴァの姿があまりに自然であつたから、私はまだ考えが追いついていないのだと思う。

「あきほさんも出来るんですか？」

「うん。それは初級呪文だから。でも私は杖がないと無理かな」

杖、と聞いて少しづつ実感が湧いた。それは魔法使いっぽい。

「私にも使えるんですか？」

「練習すれば出来ると思うけど……」

「いや、どうかな。初級と言えどもセンスがいる」

「うーんそうねえ。出来なくもないだろうけど、多分千雨ちゃんは苦労すると思うわ。魔法道具を手にするのは仮契約するだけでいいんだけど」

「戦闘に役立つものが多いがな」

やはり戦うことがあるのかと、私はまた現実から引き離される感覚に陥る。こんな小さい火ならまだしも、大きい火球なんかをぶつけ合うような世界があるのでしたら、踏み入りたいとは思えなかつた。

「いや、戦うとかはちょっと……なんか日常で役立つのがいい。ワープとか、時間戻とか」

そんなの出来たら本当に魅力的だ。学校行くのに早起きの必要はなく、テストがあつても問題を見て戻つて答えを確認出来る。魔法使いというのはなんてずるい奴らなんだ。

「あほか。急に小学生らしいことを言うな。そんなのお前が使うのには何十年と掛けても足りないレベルだ」

「でもエヴァは影を使つた転移は出来るんじゃないの？」

「え、本当？ エヴァンジエリンさん、やっぱり凄いね」

「ふ、ふん。まあ、全盛期ならそれくらい訳ないさ」

満更でもないようエヴァは言う。少し鼻を高くして、得意げになつてている様子に彼女の子供っぽさを感じて、そんな一面もあるんだなどまじまじと見ていた。私には分からぬが、エヴァは凄い魔法使いらしい。

「……魔法使いってのは、結構何人もいるものなのかな？」

たまたまあつたあきほさんと、エヴァと、雪姫さんはよく分からないが、ここだけで4人中3人だ。私が知らないだけで、実は皆何かしら不思議な力を持っているのだとしたら、何ともたない私は劣つているように見える。

「全体数は多くはないけれど、麻帆良には結構多いと思う」

「……麻帆良には？」

「この街には世界樹があるからな」

「あの馬鹿でかい木が何か関係あるのか？」

麻帆良の中心に聳える信じられないほどの大きさの木は、普通ではないと思っていたが、まさか魔法なんてものに関わりがあるだなんて想像もしていなかつた。

「あれは凄いわよ。世界的に見てもあれだけ魔力を蓄えてるものは二つはないわ。あんなのがあつたら色んなものに影響するだろうし、当然悪いものも寄り付くわ」

「それを追い払つたりするのに魔法使いがいたりするの」

悪いもの。それがさつき言つた戦闘に関わる部分なのだろう。自分が住むところにそんなのが集まつてきているとは、あまり知りたくないし関わりたくもない。

「へえー……。じゃあこの街にむちゃくちや運動出来たりする常識外れな奴が多いのもその影響つてことか？」

「……ほお。常識と違うというのが理解できるのか」

「……そりやそうだろ」

幼い頃から、周りと齟齬を感じる瞬間があつた。普通じゃない、と思うことが多かつた。だが、周りがそう感じていないうから口には出させなかつた。それが世界樹のせいというなら、良かつた。私がおかしいという訳ではないのだから。

「千雨ちゃん。その感覚は良いことよ。周りにあるものを当たり前と捉えず、環境に染まらず、俯瞰的な眼を持つのは簡単なことではないわ。貴女はそういうところが優れているのね」

「あんまりいい事はなかつたんですが……」

自分がだけが、この街が普通ではないと感じていた。誰にも理解されずにいたので口に出す事はなかつたが、ずっと心にしこりは残つていた。

皆と違うと言うのはきっとまともな事ではなくて、私はどこかおかしいのではないかと、自問自答している時があつた。そんな自分が不安で自信を持てない時もあつた。1人にいる時が多くつたのは、多

分その影響もあつたのだろう。

「多勢と違う、っていうの決して悪いことではないわ。違うというだけなの。悲観的に考えては駄目。貴女は胸を張つていい。私は貴女が優れ正在中、とても素敵な子であることを知つていてるわ」

「……ありがとうございます」

そんな風に面と向かつて言われたことがなかつたので、純粹に感激してしまつた。ありがたいと思った。自分は変じやないと独りで言い聞かせると、他人から言われる時は大きく違う。大袈裟かもしないが、ここにきて一つ救われたと思った。

私は変じやなかつたのだ。



本当は魔法のことをもつと知りたかった。呪いや吸血鬼についてなんてほほ説明されていなかつた。しかし、気付けば夕暮れ時を過ぎかけていて、親が心配する時間になつてしまつたため、その日は御開きとなつた。

後日また話を聞きにきますとエヴァと雪姫さんに伝えると、エヴァは来なくていいぞ、と腕を組みながら言い、雪姫さんが、ごめんねこの子ツンデレだから。また来てね、と小さく手を振つてくれた。だれがツンデレだ！、と叫ぶ声を背中で聞きながら、私とあきほさんはお洒落なログハウスを後にする。

陽が落ち始めると、林道は来た時とは姿を少しえていて、木々に宿る葉の間から差し込む夕暮れが地面をオレンジ色に染めていた。履いて来た白いスニーカーは若干土で汚れてしまつて、次来るときは汚れてもいい靴にしよう、と次回のことを既に考えていたりした。

改めて考えると、凄い1日だつた。ただ学生証を落としただけであきほさんとの繋がりが出来て、それからエヴァや雪姫さんと会い、魔法だなんていう存在を知る。間違いなく人生で一番濃い日で、今後の生き方に関わるターニングポイントであつたと思う。でも、嫌な日と

は思わなかつた。

それはきっと、最後の雪姫さんの言葉のおかげだろうと、私はまたあの台詞を思い出し、胸を暖かくした。

「千雨ちゃん、ありがとね」

折れた小枝を踏むと、ぱり、という爽快感のある音がして、気持ちいいな、なんて思つていたところで、あきほさんが急にそう言つた。

「何がですか？」

「あの時、手を取つて、エヴァンジエリンさんの手の上に置いてくれたでしょ？ 私、ああいうこと咄嗟に出来ないから、千雨ちゃんが凄いと思つたよ」

「そ、そんな大したことじやないですよ」

勢いに任せてやつただけで、何か考えがあつた訳でもない。売り言葉に買い言葉、という感じに近かつたのだ。

「あの、あきほさんに一つ聞きたいことがあるんですけど」「なあに？」

今日の会話の中で、気になつたことがあつた。そのときは深く触れなかつたけれど、なんとなく心に残つたのだ。

「あの人のこと、『生きたくない』と思つていたつて言つてましたよね？ なんでそんな人と友達になろうと思つたんですか？」

彼女は言つていた。『生きたくない』という彼女が綺麗で素敵だつたと。私にはその感覚がよく分からなかつた。そんなネガティブな感情を纏つた人に向かつて、そんな風に思えるものなのだろうか。

「……ああ、それはね。エヴァンジエリンさんは私と逆だと思つたから

ら

「逆？」

「エヴァンジエリンさんは、吸血鬼だつて話があつたでしょ？」

「はい。それが何かはまだ分からないんですけど」

吸血鬼というのは、人の血を吸い、ニンニク嫌いで、十字架や銀や日差しに弱い、という創作で得た知識しかない。彼女が本当にそれだ

としても、見た目が人間にしか見えなかつたので全く実感がなかつた。

「エヴァンジエルさんは、600年生きてるって聞いたことがあるの。それだけ長生きしたら、きっと色んなことがあつたと思う。私なんかには全然分からないし、想像もされたくないんだろうけど、いつもあんな悲しそうな表情をしていたつてことは、辛いことも沢山あつたんだと思った。それでもやっぱり『死にたい』とは思つてないの。心の底に芯がある強さみたいなのが見えてて、それが格好良くて、凄くて、いいなつて、思つたの」

「……は、はあ」

説明を聞いても、私にはさっぱり意味が分からなかつた。あいつが600歳といふことも、魔法なんかより疑わしいと感じてしまつた。そもそも死ぬとか生きるとかいうことについて、そんなに深く考えたこともない。

ただ、この話をしているときのあきほさんは、なんだか寂しそうな顔をしているように見えて、私はあんまり追及しようとは思えなかつたのだ。

第9話

約束した通り、私は日を改めて休日にエヴァの家を訪ねた。

先日の帰り道にあきほさんと連絡先を交換して、2人で行ける日を合わせて決めた。エヴァへの連絡はあきほさんが学校でしてくれて、エヴァは相當に面倒くさがっていたようだが、断ると雪姫さんがエヴァを硬直させるらしく、結局承諾してくれた。

硬直させるの意味は理解出来なかつたが、どうせまた魔法絡みの話で私が訊いても仕方ないので追及しなかつた。

エヴァ家に着くというところであきほさんからメールが来た。どうやら家の用事で少し遅れるらしい。私は了解しましたと短く返事をして、玄関のドアを叩いた。

「勝手に入れ」

雑な迎え入れの声が聞こえたので、私はあまり遠慮せずに、お邪魔しますと言つて中に入った。雪姫さんがまたすぐに案内してくれるかな、と思ったが、誰の姿もなく、私はエヴァの指示通り勝手に進んだ。

リビングにつくと、エヴァは大型のテレビを前にしてゲームのコントローラを握つていた。画面には有名な2D格闘ゲームが映つていて、かちやかちやとコントローラを操作する音と、ゲーム内で人が殴られる音が響いていた。エヴァは私の方を振り向く気もなく、ゲームに集中している。体力的に彼女は優勢らしく、それでも一切の油断もしていない辺り相当本気で取り組んでいるのが分かる。

「千雨ちゃん、いらっしゃい」

「うおお!？」

いきなり横から声を掛けられたので、私は思わず飛び上がるようにな驚いてしまつた。

「ゆ、雪姫さん、いたんですね」

「いたというか、千雨ちゃんが来たのが分かつたからエヴァの中から出て来たのよ」

「……えつと」

「こういう感じよ」

そう言つて、音もなく雪姫さんは唐突に消えた。

先程までそこにいたのに今や見る影もなく、私は彼女がいた場所に手をかざしたりして感触を確かめようとしたが、なんの手応えもなかつた。

魔法という存在を知つたにしても、何が可能かなんかはまだ知らないので、いきなり消えるという行為に驚きしかない。

それから、また一切の音も立てずにいきなり雪姫さんが現れる。

「つて風にしたのよ」

「は、はは」

腰が抜けそうになる。人の存在とはこんなに自由自在だつたのか。いや、前の話からするに雪姫さんは普通の人ではなさそうなので、そのせいだろうか。そこら辺の話も今日は聞いておきたい。

「なんかこう、ドロンつてしまつてボンつて感じじやないんですね」

「それじや魔法使いつていうより忍者じやない。キュイン、ならまだ分かるけど」

「そうですね」

無音でいきなり現れたり消えたりするのは心臓に悪そうだ。かといつて爆音であつても困るのだが。しかし、雪姫さんにこんな話が通じるとは意外である。俗っぽいところもあるんだな、と変なところで感心する。

「おい！ 今いいところなんだから出たり入つたりするな！ 気が散るだろ！」

「何がいいところよ。お客様が来たのだからゲームはやめなさい」「ま、まで！ 切ろうとするな！ せめてこの試合が終わつてからにしてくれ！」

ガチャガチャと画面に釘付けになつてゐるエヴァに、仕方ないわねえ、と言ひながら、雪姫さんは私に問いかけてくれた。

「千雨ちゃん、あきほちゃんは？」

「もう少ししたら来るそうです」

「そう。じゃあ先に何か飲み物でも飲む?」

「いえ、そんな」

「遠慮しなくていいの。お茶でいいかしら?」

「すみません。なら、お願ひします」

「はい。今持つて来るわ」

「雪姫! 私はコーラだ!」

「冷蔵庫はないでしょ。貴女もお茶よ」

そう言つて、雪姫さんは奥へと移動していった。手持ち無沙汰になつた私は、とりあえずエヴァの横に座つた。

YOU WIN、と、大きく書かれた文字が画面に映つた。

「何勝手に横に座つている」

「……いいだろ別に。あんた、そのゲーム好きなのか?」

エヴァはやつとコントローラを置いて、私の顔を見た。

「好きでも嫌いでもない。ただの暇つぶしだ」

「あんなにまじになつてたのにか」

金髪の幼女が血を沸き立たせるようにしながらコントローラを握る姿はあまりに不似合いだと思ったが、スウェットでダラけたエヴァの格好は引きこもりのニートを彷彿させて、様になつてしまつているのが少しがつかりとする。もつとお上品なことをしていれば、私もこいつに一目置いていたかも知れない。

「負けるのは嫌いなんだ。お前、前から思つていたが吉野あきほと雪姫には敬語なのになぜ私には敬語を使わんのだ」

「いやなんか歳上には見えねえし、いいかなつて」

彼女が本当に600歳ならエヴァにこそ敬語を使うべきなのだろうが、初めからタメ口で話しかけてしまつたので、今更敬おうとも思えなかつた。

エヴァはその答えが気に食わなかつたのか、私を睨みつけるように見てきた。

「分かつたよ。せめて、あんた、じゃなくて名前を呼ぼう。エヴァンジエリン、は長いな。エヴァでいいか?」

「……馴れ馴れしいな」

「雪姫さんもそう呼ぶじやんか」

「あいつはいくら言つてもやめないからもういいんだ」

なんとなく、その言い方に2人の間での力関係が見てとれた。エヴァは雪姫さんに逆らえないと、何勝

「エヴァも私のこと貴様とかお前とか言うのやめろよ」「はあ？ なぜ私がお前の言うことを聞かねばならん……って、何勝

手にコントローラ握ってるんだ」

「これ一人用だろ？ ばとろうぜ」

このゲームは持つてはないがゼンでそこそことプレイしたことある。格闘ゲームは苦手ではなかつた。

「あほか。なんでお前とやらねばならんのだ」「なんだ、負けるのは怖いのか」

「はああん！」

エヴァは額に筋を付けながら、すぐにもう一つのコントローラを取り出してきた。まさかここまで単純に挑発に乗るとは思わなかつた。本当に600年も生きたのか尚更疑い深くなる。

「ほざいたな、貴様。ボコボコにしてやる。ボコボコにだ。もし負けたら一生私に敬語を使いエヴァンジエリン様と呼べ」

「じゃあ私が勝つたら、あんたもちろん私の名前を呼べよ？」

「塵ほど可能性がないことだが、いいだろう。乗つてやる」

すぐに画面は2人バトル用に切り替わり、キャラクター選択画面となる。エヴァはすぐに強キャラと呼ばれるものを選び、私は自分の使い慣れたキャラを選択した。

『READY』

と大きく文字が飛び出すと、私とエヴァは食い入るように画面を見つめた。

『FIGHT』

○

「お邪魔します」

「あきほちやん、いらっしゃい」

「ここにちは、雪姫さん。……なにか、すごい楽しそうな声が外まで聞こえましたが……」

「ああ、あれよ」

呆れた声でそう言つた雪姫さんが指差した先では、大声で怒鳴り合う私達の姿があつた。

「おい！ お前同じ強キャラばつか使つてんじやねえよ！ ずりいぞ！」

「何がざるいだ！ 貴様こそ球持ちか待ちキャラしか使わんだろうが！ 鬱陶しいんだよ！」

「はあ？ それを言うなら隙あればハメ技狙つて来るのはどーなんだ！ 強キャラでしかもハメ技しないと勝てないんですかねえ?!」

「修正されるまでは立派な戦法の一つだろう！ 大体貴様負けたんだから私に敬語使えよ！」

「お前が『雑魚な貴様のために1ラウンドくれてやろう』とか調子こいてた時は私が勝つたんだが？ ちゃんと名前を呼んで欲しいんだが？」

「あほか！ あれは勝負がついた後の提案だ！ 初戦の戦いで賭けは貴様の負けで成立してるんだよ！ くそが！ ギアスロールでも書かせるんだつた！」

「ダサいよなあー、余裕綽々で一ラウンド渡して負けて文句言う奴はなあー、ぐ、やっぱい、とか言つてるエヴァはダサかつたなあー」

「殺す。貴様は絶対に殺す。骨も残さん。バラバラにしてやる」「上等だやり返してやる」

そう言つて2人は再びコントローラを一瞬で握つて、キャラを決める。

何度目かの『READY』の文字がまた画面に浮かび上がつた。

「死ね」

「お前がな」

『FIGHT』と表示され、コントローラが千切れるほどに気合が入った私達がキャラクターを操作しようとしたときに、画面は唐突に真っ

暗になつた。

「はい、2人とも、そこまでよ」

雪姫さんは、いきなりゲーム本体の電源を切つた。黒い液晶が反射して私とエヴァのドアップしかそこには映つていない。

「雪姫え！　お前何勝手なことをしている！」

「ゆ、雪姫さん、後一回、後一回ですから！」

「駄目よ。さつきも言つてたでしょ貴女達。あきほちゃんも来たし、2人でやるゲームはやめなさい」

「巫山戯るな。もう一戦だ。こいつを血祭りにするまで終われん」

もう一度電源を付けようとエヴァがゲーム機に近付いたところで、ぴたり動きが止まつた。ギギギ、と何かに縛り付けられているかのように、エヴァはゆっくりと此方を振り返る。

「き、貴様。こ、こんなことに力を使いよつて……」

「……？　何かされてんのか？」

「千雨！　ゲームの電源を入れろ！　お前は動けるだろうが！」

「わ、分かつた」

初めて名前を呼ばれたことに若干戸惑いを感じてしまった。まさかこんなタイミングで呼ばれるとは思つていなかつた。エヴァも勢いで言つたようだつたが、ゲームの電源を入れろつて。もつと良い場面はなかつたのか。

「千雨ちゃん」

私がスイッチに触れようとした時、背筋を這い上がつてくるような悪寒がした。

「一度やめましょう、ね？」

怖かつた。笑顔の裏に見える鬼のような影が、恐ろしい。怒ると一番怖いのは学校の教頭先生だと思つていたが、それは違つた。世界一はここにいたのだ。

「は、はい」

「よろしい」

雪姫さんがそう言つたところで、背中に感じていた寒気が消えた。

「あきほちゃんごめんなさいね、放つておいて」

「いえ、私は全然……。そうだ。それならみんなで出来る遊びをしませんか。雪姫さん、いいですよね？」

「あきほちゃんも楽しめるならいいわよ」

「4人用か……何かあんのか？」

「なんだ、雪姫もやるつもりなのか」

「あら、駄目なの？」

「……構わんがこういうのが出来るタイプとは思えん」

確かに私もそう思った。雪姫さんもあきほさんもゲームなどをしそうではない。しかし、彼女らがいいと言うなら良いのだろう。ゲームはやはり楽しくて、今もまだ熱が残っていた。誰かとこうして一緒にやるのは久しぶりだつた。

この時の私は本来の目的をすっかり忘れていた。

「マ○カとかねえのか？」

「私はS○NY派だ。任○堂のゲームはない。そもそもコントローラーは二つしかないぞ」

「別にテレビゲームじゃなくてもいいじゃない。ボードゲームとかないの？」

「ボードゲームか、確かに暇つぶしに買ったのがいくつかあつたな」

そう言つて、エヴァは雑貨などを纏めている箱に向かつていつた。初めてあつた時の刺々しさは忘れてしまったみたいに自然体だった。年相応、ではなくて、見た目相応の彼女に、私はどこか安心感を覚える。

おもちゃ箱を漁る子供のように箱に顔を突っ込んで腰を曲げていたエヴァが、体を起こした。

「カタンとドミニオンならあつたぞ」

「なんだそりや。マイナーゲームか？」

「あほう。日本じや流行つてないだけで有名どころだ」

しかし、エヴァは何故多人数用のボードゲームを持つているのだろうか。家に誰かを呼んでやるようには見えないのに。訊いたらまた機嫌が悪くなりそうなので訊かないが。

「難しそうなのは皆が覚えるの面倒だからなしよ」

「あの、人生ゲームとかないのかな」

「ないな。あー、あと麻雀ならあるぞ」

「私は分かるが一番初心者にきついだらうそれは」

「覚えることが多く、簡単でもない。このままだとトランプとかになるかな、と思つていたところで、あきほさんは意外なことを言つた。

「私、麻雀できるよ」

「え？ そうなんですか？」

「うん。お兄ちゃんが好きでね、教えてもらつたんだ」

「役もばつちりですか？」

「うん」

「雪姫はどーだ」

「私に出来ない遊びはないわ」

「なんだそれは……。まあいい、決まりだな」

エヴァはまた箱に近づいて、麻雀牌とマットを取り出した。

「手積みだがいいな」

「ああ」

「ふふふ、これで貴様を血祭りに上げてやる」

おかしな賭け方さえしなければ血が闊わるようなゲームではないのだが、エヴァがやる気なのでよしとする。私もさつきの格闘ゲームのストレスをぶつけたいところだつた。

「当然だけ金を賭けるのはなしよ」

「ふん。面白さ半減だが仕方あるまい。おい、さつきの続きだ。負けたら一生敬語だぞ」

「はっ、エヴァこそ、負けたらちゃんと名前を呼んでもらうからな」

名前を呼ぶは先程達成したのだが、エヴァは呼んだ自覚がないよう

でまたすぐに貴様とか言い出しそうなので、同じ内容でいく。

「あの、私もいいかな」

マットを引き、四人が四角く座りジャラジャラと牌を混ぜ合わせて

いるところであきほさんが言つた。

「エヴァンジエルンさん。私が勝つたら、名前で呼んで、くれる？」

「なんだ、まさかお前まで私に勝てる気でいるのか。舐められたもん

だ

「ねえ、いい？」

「ふん、構わん。何でもいい。どーせ私が勝つのだから。しかし勝負を挑むなら、貴様も負けたら私に一生敬語だ、いいな？」

「うん、いいよ」

「じゃあ私はなるべく邪魔しないように手堅く打とうかしら」

そう言つて、雪姫さんが仮仮親を決めるサイコロを振つてゲームが始まつた。



ここで細かく内容を語るのは、やめておこう。

結果だけ言うと、物凄い強さを見せ付けたあきほさんが、圧勝であつた。信じられない強さであつた。

始まつてすぐにあきほさんがエヴァに直撃で大きな当たりをして、焦つたエヴァがイカサマをしようとするも全て暴かれて、自分で点数を減らしていき自滅した。

どうしようもなく情けない負け方をしたエヴァは、何もしてない私よりも当然点数が低く、圧倒的ビリであつた。

かなり落ち込み、拗ねた子供ようになつたエヴァの機嫌が元に戻るまでは、しばらくかかつた。

第10話

「大体な、麻雀なんていう運ゲーで勝敗を決めるつてのがおかしかったんだ。麻雀の実力は何百回と打つた時の勝率で決めるもんだ。1日やそこらで決着が着くもんじやない。そうだろう？」

「そうだそりゃ、と頷いておく。これ以上エヴァに不貞腐れていても話が進まない。今日の本題はまだ何も話していないのだ。」

「……言うことは最もだけど、賭けは賭けよね？」

「うぐつ……。まあいい。名前で呼ぶ程度いくらでもしてやる。あきほと千雨。ふん、満足か？ これでいいか？」

彼女にもプライドはあるようで、流石にあそこまでコテンパンにやられたら約束を反故にしようとは思っていないらしかった。雑な呼び方だが、それでもお前や貴様なんかよりはいい。無理矢理呼ばせて急に仲良し、となるものではないが、呼び方からして距離があるよりはずつといいだろう。

別に私は仲良くなろうとは考えていなかつたが、エヴァとゲームをするのは思つた以上に楽しいものだつたので、今後もそういう関係であれたらいいとは思つた。

女のゲーム友達なんてそういうものだ。

「うん。ありがと」

皮肉も感じず穏やかな笑みであきほさんがそう返すので、エヴァはつまらなそうに舌を打つた。

「それで、聞きたいことがあるんだろ？ さつさと聞け」

「お、おう」

若干苛ついた様子でエヴァは私に言った。膝を揺するのをやめなさい、と雪姫さんに注意されている。

随分と長く遊んでいたせいで、少し日が落ちていた。しかしそれでも休日な分前回よりは時間があつて、途中で説明が終わるということはなさそうだ。

「吸血鬼と、呪いについて教えてくれよ」

ふむ、とエヴァが頷く。私に対する警戒心は大分解してくれたのだろう。面倒だ、と一蹴される心配はないようで安心する。

きっと、元はわりと面倒見のよい性格なんだと思った。何だかんだこうやつて逃げずに相手をしてくれる時点で、彼女はそれなりにお人好しなんだと気が付いた。

「そうだな。吸血鬼のことなら私に。呪いのことなら雪姫が話すのがいいだろう」

「じゃあ、エヴァから頼む。……いや待った。吸血鬼のことじやなくていい」

「はあ？ なんなんだお前は」

「エヴァのこと、教えてくれよ」

この時には、吸血鬼という存在自体よりも、エヴァ本人のことの方が気になってきた。彼女は本当に吸血鬼なのか。だとしたらどうして吸血鬼が麻帆良の街にいるのか。やたらゲームは上手かったが、普段は何しているのか。

私が改めて訊くと、彼女は腕を組んだ。横にいたあきほさんも話があが気になるようで、身を少し乗り出すようにした。

雪姫さんが用意してくれた冷たい麦茶を、一口飲む。カラーン、と氷が音を立てた。

「……」

少しだけ、話すのを悩んでいるように見えた。自分のことを話すのは恥ずかしい、と思っているのではない。きっと彼女の中にはもつと複雑な感情があつて、それが心の中でせめぎ合っているのだと思った。

「……ゲームの報酬は、名前を呼ぶだけだつたんだかな」

「……エヴァ、いいじゃない」

雪姫さんが、エヴァの肩にそっと手を置く。

「……気安く触るな」

そう言いつつも、エヴァはその手を振り払うことはしなかつた。ほんのりと微笑んだ彼女の顔は慈愛に溢れていて、本当に綺麗な人だと

思った。

ふう、と一度息をついて、エヴァは私とあきほさんの顔を見つめる。吸い込まれそうに美しい瞳の奥には、怖さが見えた。覚悟が問われているような気がした。ここで目を逸らしては駄目なんだと、私は睨み返すように彼女を見る。あきほさんも、じつとその瞳を見ていた。

雪姫さんの後押しがあつたからか、エヴァは諦めたかのように表情を落ち着かせ、静かに語り出す。

「……私は、吸血鬼だ。今から約600年前、ちょうど百年戦争の最中に生まれ、齢10歳で吸血鬼となつた」

「……なつた？ 元は人間だつたのか？」

反射的に聞いてしまつた。

失言だと思い口を手で抑えたが、エヴァは特に気にした様子はなかつた。

寧ろ乾いた笑みを浮かべていて、哀愁を感じるその顔がどうしようもなさを物語つていて、私は息が詰まりそうになる。違う。そんな顔にさせたくて、訊いた訳ではないんだ。

「気にするな。人間だつたことに思い入れはない。それに、生きた時間のほとんどが吸血鬼だ。人としての生き方など、もはや覚えていない」

「つ……」

あきほさんが、唇を軽く噛み締めた。何か言いたそうだが、我慢しているように見える。

「最初に言つておくが、決して私に同情するな。それは私にとつてもつとも侮辱的で、気に触る行為だ。貴様らがそうしたと感じた瞬間、有無を言わせずここから叩き出す」

「……うん」

あきほさんは、エヴァがそう言うことを分かつていたのだろう。先日彼女が言つていたことを思い出す。辛いことも悲しいことも沢山あつただろうと言つていた。でも、私達に簡単に、辛かつたね、などと分かつたように言われるのを望んでいないことは、私にも察せた。

「真祖の吸血鬼となつた私は、不老不死になつた。それから600年
ダラダラと生き延びて、そして今ここにいる」

彼女がここまで経緯を簡潔に話すのは、私達に余計な詮索をさせ
ない為なのだろう。

どうして吸血鬼になつたのか。親はどうしたのか。その間どう
やつて生きてきたのか。それらのことは話すにはあまりに重々しく、
会つて数日の私が知るようなものではないのだ。

私自身、きっと重くて受け入れられない気がした。10歳なら、今
の私とそう変わらない年齢だ。

突然人間ではなくなり不老不死になつたと言われても、何か出来る
とは思えない。孤独を感じたり、苦悩したりするのかな、と安易な予
想をするしか出来ない。

ただ、彼女の容姿が異様に若い理由がやつと分かつた。吸血鬼になつた時から不老ということは、当時の姿のままだと言うことだ。創作ではよく不老不死を求めて旅をする者たちがいるが、私はエヴァの表情を見ていると、羨ましいとは思うことが出来なかつた。

「……そんなエヴァが、なんで中学校なんかに通つてるんだ？」

かろうじて質問出来たのは、そんな内容だった。吸血鬼として人間とどこまで違うのかは、怖くて聞けなかつた。臆病者だと言われても、この時の私は彼女と深く関わるのが恐ろしかつたのだ。

エヴァははつきりとした嫌悪感を示した。失礼だが、そんな顔でもさつきのような諦めたように悲しい笑みよりも、分かりやすい表情がずつとマシだと思つてしまふ。

「色々あつてな、中学校に無限に通い続けなければならないという呪
いにかかりてしまつたんだ」

「呪い？ それが、雪姫さんに関係あることなのか？」

「その呪いはこいつとは関係ないんだが……」

「いいわ、ここからは私が話しましようか」

そう言つて、雪姫さんはエヴァに代わつて話し始めた。

「彼女が呪つた呪いは、登校地獄。言つた通り、中学校に通い続けなければならぬ呪いで、卒業まで経つても、また一年からやり直さな

きやいけないの」

「それじゃあ、エヴァンジエリンさんはもう何回目かの中学校なの?」「何度もかなんか虚しくて数えてないが、一回や二回ではないな」「……どうやつたら解けるの?」

「それは」

雪姫さんが言葉を続けようとした瞬間、エヴァアが手で彼女を制した。

「——まだ分かっていない。だから私は未だにあんな所に通つてるんだ」

「そうなんだ……」

この時の私達は、エヴァアが何か隠しているのかな、と言うことくらいしか思わなかつた。

「んじや、雪姫さんの呪いつてなんなんだ?」

「私はねえ、エヴァアが露天商から貰つた呪いの玉なの」

「……玉?」

まるで意味が分からなかつた。

「封印されてたのだけどね、エヴァアが解いてくれたの。だから取り憑いたやつた」

取り憑いちやつたって、彼女は幽霊みたいなものなのだろうか。

「お前が出てくると分かつてたら、封印など解かなかつたがな」

「またまた。そんなこと心にもないこと言つて」

「本気だ」

「あの、雪姫さんは何の呪いなんですか?」

あきほさんが訊ねると、雪姫さんはじつと彼女を見た。

「えと、あの、登校地獄みたいに、何があるのかなつて……」

「何だお前、取り憑くだけじゃないのか」

「そうねえ……」

雪姫さんは、手を顎に置いて、考えるような仕草をした。彼女のそんな表情を見たのは、初めてだつた。

「……私はね、呪いであり、呪いでもあつたのよ」

「……?」

私には意味が分からなくてエヴァを見たが、エヴァも神妙な表情をしていた。

「呪術と呪いの区別など、そうないはずだが」

「そうね。でも、おまじない、つて訊いたら、違う気がするでしょ？」確かに、呪いなんかは悪いイメージが想像出来るが、おまじないというと、何となく良いことを思い付く。

エヴァは納得いかないような表情で、雪姫さんの話が続くのを待つた。

「私が生まれたのは1000年前。ある国で、国王の娘が産まれそうになつた。しかしそれが余りにも難産で、出産に長い時間が掛かった。その時に、王が必死に母子の無事を願い、たまたま握り続けた丸い石があつた」

エヴァもこの話は初めて訊くようで、興味深そうにしている。私は、人の姿をしている彼女が、玉である、ということに未だ脳が納得していなくて、そのことを考えたりしていた。

「結果、子供は無事に産まれ、王妃も何一つ後遺症はなかつた。その後、石は願いを叶える石とされて、王の宝となつた。事実、王は何か困つたことがあると、石に願いを込めた。娘には、お前はこの石にお呪いまじないをしたから元気に産まれたんだよ、と説明していた」

彼女の語りを、私達は真剣に訊いていた。私もいつの間にか次の言葉を待つていたと思う。それは、雪姫さんの高くて不快さは全くなく、澄みきつた声が、心地良かつたからだろう。

「その噂が国中に広まり、願いの石とされて、有名になつた。すると今度は、石を悪いように活用しようとすることが現れた。盗賊により盗まれた石は、別の貴族に買われ、他の貴族を凋落させるために悪い願いを込め続けられた。その願いは見事に叶い、それからたらい回しのように多くの場所で悪の願いを聞き続けた石は、呪いのろいの玉と呼ばれた」

「手垢に塗れるほど呪いを込められた石は、ついに意思を持つた。それが私よ。あらゆる呪いを内包し、それを達成させることに飽きた私は、人に取り憑くことを覚えた。そしてその人が死ぬまで人生と共に

して、また石に戻る。何十回と繰り返した私は、ついにはエヴァに取り憑いたつて訳」

「……なんだ、じゃあ、お前を握つて願い続ければ、何か叶うのか？」
「いいえ。私が意思を持つてから、私が本気にならないと無理よ。
まあ、本気になつたことなんてないけどね」

つまらん、と言い放つたエヴァは途端に興味がなくなつたようだつた。

「……只ね、お呪いの石として生まれた私は、誰かの願いを拾い続けて
いるの。黒い願いもあれば、清い願いもある。だから私は、人間を嫌
いになれずにいたのかもね」

「……それで、その姿は？」

「ああ、これはね」

雪姫さんは、くすくす、と可愛らしい笑い声を漏らした。

「エヴァが幻術を使つて見せる大人の姿なの。それを魔力で形どつて
成り立たせつてこと。つまりエヴァの、理想の姿つていうか、憧れの
姿つていうか……」

「……へえ、エヴァつてそんな感じになりたいんだな」

よくよく見れば、今のエヴァと違つて出るところはしつかり出ていて、かなり良いように成長した美人、という感じだ。彼女らが似ている理由ははつきりしたが、まさか彼女の夢見る姿が実現されているとは思わなかつた。

私が雪姫さんの身体、いや特にその豊満な胸を凝視した後エヴァを見ると、エヴァはみると顔を赤くした。

「なんだ貴様！ 何が言いたい！ 何が言いたいんだ！」

「いや、うん。いいと思うぞ。コンプレックスつてのはないものを欲
する心だからな」

「あのな！ 私は小さいままだと色々不便だつたんだ！ だから大人
の姿が必要だつたんだ！」

「そうだな。胸も小さいままだと不便そうだもんな。大人なら胸もバ
インバインの方がいいもんな」

「き、貴様あ!! お前だつてある訳じやないだろうが！ 貧乳だろう

が！」

「ば、馬鹿か！ 小学生に何言つてんだ！ 私には無限の成長の可能

性があるだろ！ 今からそんな氣にする奴なんていないからな！」

「馬鹿は貴様だ！ 素質があればな、その頃には片鱗を見せてるんだ

！ 何の希望見えないお前はもはや成長性もないんだよ！」

「はー?! 永遠の口リツ子には言われたくねーよ！」

「なんだと!?」

「やんのかよ!?」

そう言い合いながら、気付けば私達はまたゲームのコントローラ握っていた。

熱くなりながら罵り合う私達を、あきほさんと雪姫さんは、どこか呆れながらも、少しだけ微笑んで見ていた気がした。

ボツ話～DTCG～

彼女達、エヴァと雪姫さんと知り合いになつてから数日が経つた。平日は特に変わらなく、いつも通り私は学校に行く。だが、あの時の話を聞いてからは、私の心はなんとなく軽くなつたような気がする。

登校時に信じられないほどのスピードで走つて私の横を駆け抜け行く人や、忍者のように建物の間を飛び上がって行く人を見ても、ああ、ああいう奴らもこの街の影響を受けているんだな、と思えば、いぢいち深く考えたりする必要がなくなる。

そんな彼らを見て毎回驚いたり周りはどう思つてゐるのかという反応を気にしなくて良くなつたというのは、私の精神的にとてもよかつた。

そして休日は、よくあきほさんに誘われてエヴァの家に遊びに行くようになつた。

エヴァは毎回怠そうな顔をして私達を追い返そうとするが、雪姫さんが私のお客様だからいいでしょ、と言つて中に入ってくれる。

あきほさんと雪姫さんは特に仲が良いように見えて、よく二人で紅茶の話やハーブのことについて語つたりするのが、とてもお上品でお淑やかで、見てゐるだけで素敵に思えた。

反対に、私とエヴァは顔を合わせればすぐに言い争いをしたりゲームでマジ喧嘩をしたりして、女子らしくもなく精神的に酷いほど子供であつたと自覚はするが、そんな時間も嫌いではないと思つてる自分もいた。

あきほさんと雪姫さんはそんな私達をいつも呆れつとも大人びた目で見守つてくれていて、決して見下したりした目ではないことが嬉しかつた。

自分を変に偽つたりせず、ありのままでいても何も氣兼ねしなくていい場所は、心地よかつた。

たまにエヴァのことを観察すると、ちゃんと本気で怒つたり騒いだりしてるので、そんな彼女に応戦しつつも、私は心の何処かで安心するのだ。

接していると分かるが、エヴァは人と何も変わらない。些細なことでキレて、褒められると少し調子に乗って、打ちのめされると凹む。そんな人と同じ一面を見るだけで、私は少し穏やかな気持ちになれる。

そうあきほさんに話すと、あきほさんは同意してくれた。

「私もね、同じことを思うの。エヴァンジエリンさんの家に行つて遊んでいると、時々、彼女のことがどうしようもなく気になるの。ちゃんと楽しんでくれてるかな。彼女は、私達より遠いところにいないからなって。そうしてエヴァンジエリンさんの顔を見るんだけど、千雨ちゃん」と遊んではる時は本当に楽しそう。だから私、嬉しいの」

あきほさんがあまりに幸せそうに語るので、訊いている私が何故か少し恥ずかしく思つてしまふ。

「でも、私もエヴァを見てますけど、あきほさんと話すときも、エヴァは自然に楽しんでると思いますよ。だって、私の前ではあいつあんな風に穏やかな顔はしないですもん」

「そ、そうかな。ほ、ほんとに？」

「はい。ほんとです」

「……なら、嬉しいなあ」

あきほさんは、照れたように頬を赤くして可愛く笑つた。指で髪をいじる姿が愛らしく見えた。

エヴァとあきほさんの会話は、私達と違つてずっと大人しい。

「エヴァンジエリンさん、今日の紅茶も美味しいね」

「お前はいつもそう言つているな」

「あのね、この前洋服を買って、今日着てきたのだけれどどうかなあ」「……まあ、悪くないセンスだが、大人しいな。……一つワンポイントを入れてやろうか？」

「え？ ほんと？」

「ああ、少しの間貸せ。その間はこれでも着てる」

「わー、ありがとう。楽しみにしてるね」

「ふん、こういうのは私の趣味だから私が勝手にやるんだ。……あまり期待するなよ」

「うん。でも、ふふふ。待ってる」

こんな会話が多い彼女達は、私と話す時とは真逆で、急に女の子らしくなる。

でもそれは無理して言っているものではなく、自然体であることは側から見ても分かった。

そうやつて私とあきほさんはエヴァと遊んだ日の帰り道は、彼女について話したりすることがあった。

エヴァが本当にそう感じていたかは、分からぬ。私達の思い込みかもしれない。

きつとこんな話をすると聞いたら彼女は怒るだろう。

それでも、エヴァの10歳の見た目らしい姿を見て、あきほさんが嬉しく思う気持ちは私にも分かった。だから、嬉しそうなあきほさんが見れるのが私も嬉しくて、ついついそんなことを話してしまうのだ。

私達がこんなに彼女と気軽にいれるのも、雪姫さんの存在が大きい。

雪姫さんは、ちようどいい感じに私達の橋渡しのように話をしてくれるし、見守ってくれている。エヴァのことを誰よりも気にかけて、大事にしているというのが見れば分かる。

「……でもどうして雪姫さんは、エヴァンジエリンさんを気にかけるのかな」

「本人は、エヴァを通じて色々な世界が見たいからって言つてましたけど」

「うーん。私には、それだけには見えないな」

あきほさんは悩むように考えていたけど、私には見当もつかなかつた。大して考えもせず、エヴァのこと気に入つてからじやねえのかな、としか思つてなかつた。勿論、それは今でも間違つて無いと思う。

○

ある日、また休日にあきほさんとエヴァの家に向かうと、いつも通り雪姫さんが迎え入れた。

エヴァはまだ寝てるの、ごめんね、と言われ、毎回座るリビングの机に腰を降ろさせてもらう。

雪姫さんが、庭にハーブを植えたのだけれど見る、とあきほさんに訪ねたので、見たいです、と頷いた彼女と共に二人は庭へと歩いていった。私はあまり興味が湧かなかつたため、遠慮させてもらつた。一人で所在なくなつたので、私はケータイを取り出して横にする。最近ハマつてるゲームでもしてエヴァを待つていよう、と思つたところで、ちょうどパジャマ姿のエヴァが降りてきた。

「なんだ、暇人達がまた来てたのか……って、あいつらはどうした」「なんか庭にハーブを見に行くつてよ」

「ああ、あいつが最近植えてたな」

まつたく勝手に人の庭に何でも植えよつて、と愚痴りながら、エヴァは私の前に座つた。

「なんだお前。スマホゲームしてるのか」

「ああ、すまん。すぐにやめる」

「いや構わん。どんなゲームだ」

「カードゲームだよ」

ほお、と眠たげにしていた目をエヴァは光らせた。

D T C G デジタルトレーディングカードゲーム

「お、分かんのか」

「私もやつてる」

そう言つて、エヴァは自分のスマホをひらひらとさせて私に見せつけてきた。それから彼女はスマホを横にしてゲームを起動させたようだ。

「やり込み系のゲームもいいが、カードゲームもいいよな」

「分かるぞ。資産の差はあれど、やり込み度ではなく発想と知恵だけで戦うP v Pは面白い」

「運も絡むけどな」

「それもいいんじゃないか」

そう言つて、ふふ、と私達は笑い合つた。

「まさか千雨と意見が合うとはな」

「珍しいよな。エヴァはどのデツキ使うんだ?」

「ふふん。全部に決まつてるだろう。せつかく多くのカードがあるんだ。全部触らなきゃ損だ」

「わかるう……！」

ここまで意見が合うの本当に珍しかつた。

「よし、やるか？」

「いいのか？ 朝飯食わなくて」「ふん、貴様など文字通り朝飯前だ」

「言つたな」

私達はにやりと不敵な笑みを浮かべ合う。こんな風にゲームの話を堂々と出来るんだから、やはりここは居心地がいい。

私はスマホを操作して、部屋を作りエヴァに伝える。

「おい、ルーム作つたぞ」

「は？ ルーム？」

「ああ。ルームナンバーはな……」

「まで、までまでまで」

エヴァが急に頭に手を抑えて、不安そうに私を見た。

「なんだよ、まさか怖気付いたのか？」

「……違う。なんだルームつて。フレコを送り合つて対戦申し込めばいいだろう」

「はあ？ それでもいいけどよ、とりあえず今はルームからでいいだろ」「ルームなんて概念はない!!」

突然エヴァは私のスマホ画面をガバリと覗き込んできた。

「き、貴様！ やはりか……っ！」

エヴァは手を震わせ、キッと私を睨みつけてきて、大きな声で言った。

「ハ一〇ストーンではなく、シャドウ〇ースだとう!?」

ドン、と力強く机を叩き、まるで親の仇を見るような表情で私に怒鳴り散らしてきた。

「やはり貴様とは趣味が合わんつ！　まさかとは思つたが、そんな紛い物をやつているとはな！」

「紛い物だと！」

好きなゲームを非難されたので、思わず私も熱くなる。

「お前こそ！ そんな古臭いゲームやりやがつて！ 今の時代みんなシャド〇やつてんだろうが！」

「はあ？ 古臭いだと？ お前どつちが人口多いのか知らんのか？」

「圧倒的にハー〇だぞ?!」

「あーあー。ハー〇民はすぐにそれだよ。世界的に多いからつてすぐそこを持ち出す。日本じやどつちが流行つてるかなんか一目瞭然なのになあ!？」

「貴様らシャド〇勢は恥ずかしげもなくよくパクリゲーを出来るなあ！ ほんとシステムを丸パクリして自分たちが日本のカードゲーム背負つてるみたいな顔しよつて！」

「パクリじやねえ参考にしただけだ！ 大体絵が受付ねえんだよハー〇は！ シャド〇のが綺麗だしかつこいいだろうが！」

「はー。オタク共はすぐ絵がどうとか言い出す。システムパクつて環境はいつも無茶苦茶なくせになあ！ なんだバハムー〇つて！ なんだイー〇スつて！ 小学生の考えたカードかあ？ ニュートラルやヴァンプが暴れた不思議の国はさぞ生きにくかつただろうなあ可哀想に！」

「はいはいお前らはすぐこつちの環境終わつてるとかいうがそつちも大概だからな！ アグロシャー〇ンや海賊が支配してた時代忘れたかあ！ 面舵いっぱい！ で出てくる1ココストは見飽きたろう！ それに究極も動員も充分クソカードだろうが！」

「なんでこつちの環境詳しいんだ！ きもいんだよ！」

「その台詞そのまま返してやるわ！」

いつものように胸倉を掴みながら言い合つていると、雪姫さんとあ

きほさんが、またあ？ と溜息をつきながら部屋に戻ってきた。

「今度は何で喧嘩してるのよ」

大して心配もしてなさそうに尋ねる雪姫さんに、私達は同時に大声で状況を伝える。こいつが私のゲームをバカにしたと。

あきほさんもいつも通りオロオロとしながらも、私達の仲裁をしようとしてくれた。

「あ、あの。お互に、好きなゲームは人それぞれってことじゃ駄目かな？」

「あきほ。それはないんだ」

「あきほさん、そうじやないんすよ」

「え、と。どういうこと？」

「人それぞれなんてな。言われなくとも分かってる。当たり前なんだよ。だがな、それを言つたら議論は終わってしまう」

「私達はそれを大前提に置いた上で、相手を言い負かしたいんだ。屈服させたいんだ。私の意見を聞いて、たしかに私の負けだ、と言わせたいんだ……！」

「……な、なんか、すごいね。やっぱり仲良いね二人共」

「よくない！」「よくないです！」

心地よいなどと言つていたが、対立している時はやはりムカつく。圧倒的にストレスの方が多い。

私達が更に言い争いをしようとした時に、ついに雪姫さんが私達の間に入つた。

「まあまあ、落ち着きなさい、二人共。……こはね、間をとつて、二人仲良く」

そう言つて、彼女はどこからか、何故持つているのか分からぬ自分のケータイを取り出した。

「ウオー〇レしますよ？」

「そ、それは……」

私達は同時に視線を下げて、や、やりません。と小さな声で言つた。

千雨さんは、そこまで語ると一度小さく息を吐いた。顔を上げれば円のように丸く並んで座っている僕らが皆彼女に注目している。そのことを不意に恥ずかしく思つたのか、みるみると顔が朱色に染まつていつた。

「……まあ、その後もなんやかんやあつてだな」

「うんうん」

「私とエヴァはそこそこ仲良くなつて」

「それでそれで」

「……今でもたまに遊ぶくらいの仲になりましたとさ」

「……うん？」

千雨さんがぶつきらぼうにそう言い切つた所で、話を訊いていた僕たちは顔を見合させた。

「終わりだよ」

「えーーっ！ なんか最後すんごい雑じやなかつた!?」

「うち、もつと千雨ちゃんの話聞きたいわー」

「確かに、話の終わりとしては特にオチもなく中途半端だと……」

「うるせえなあ！ 嘸り続けるのつて結構大変なんだぞ！ エヴァ、なんか飲み物ないか？」

明日菜さん達の抗議を無視して、もうカラカラだ、と手を喉で抑えながら千雨さんがぐつたりとした顔をする。唯一椅子に座つて訊いていたエヴァンジエルンさんが、あつちの冷蔵庫から勝手に持つてい、と言つたので、彼女は歩いていつてしまつた。

空は暗いが、真上に浮かぶ満月の光が僕達を照らす。周りには洋風でお洒落な外灯もいくつか建つてあるけれど、強い月灯りはそれにも優つていて、夜とは思えない明るさがあつた。

だけど、遠くを見るとどんどん光が届かなくなつていて、漆黒が僕達に迫つて来ているように感じる。それが怖かつたからかは分からなければ、僕の肌は一瞬ぶるりと揺れた。

「なんだ坊や、寒いのか」

「いえ、そういう訳では……」

「ふん。いいからこれでも羽織つておけ。体調を崩される方がうざい」

そう言つて、エヴァンジエリンさんはどこから出したのかローブを一枚僕に投げた。ばさり、とちょうど肩にかかつたそれを受け取る。暖かかった。さつき感じた恐怖が一気になくなつた気がした。

「……ありがとうございます」

「エヴァちゃん、やつさしー」

「茶化すな。お前らも風邪を引く前に使え。いらん奴は捨てて置いていいぞ」

エヴァンジエリンさんはまた手品のようにローブを人数分取り出し、宙に舞わせた。ばさばさと鳥が羽ばたくような音と共にそれぞれの手にローブが渡り、口々にお札を言つていた。

「エヴァ、私のは」

「ふん」

「うわとど、乱暴だな私には！」

「貰えるだけありがたく思え」

ペットボトル片手に戻ってきた千雨さんもローブを受け取る。季節は夏であつたけど夜が深くなつたからか、皆多少なりとも気温の低下は感じていたようで、ありがたそうにそれを羽織つていった。

「エヴァンジエリンさん、たまにこう優しい時がありますね」

「ゆ、夕映、失礼だよう」

「確かに、私が昔聞いていた噂とは大きく異なります」

「刹那さんまで……」

僕が聞いていた話とも大きく違う。真祖の吸血鬼、闇の福音、他にも様々な呼び名があつて、全てが恐怖を煽るようなものであつたのに、実際はとてもそんな風には見えない。

麻帆良に来た当時、クラスメイトに彼女がいると聞いた時にはもうどうしようもないくらい困惑したものだ。カモ君からは逃げ出すことをオススメされ、僕も一瞬本気で考えてしまつたくらいだ。

しかし学園長やタカミチからは、むしろ困った時は彼女を頼れと言われ、そして実際に、彼女にはとても助けてもらっている。

噂が彼女を大袈裟に言つていただけなのか、それとも、彼女が何かを切つ掛けに変わつたのか。

僕が月灯りで照らされる彼女の綺麗な顔をじっと見つめていると、どうした、と訪ねられたので、思わず顔を逸らして、何でもないです、と答えた。

「千雨、もう語る気はないのか」

眼鏡を上げながら千雨さんは答える。

「悪いが。バスだ。疲れた。コスプレ分の仕事はしたぞ」

「短い氣にするけどなあ」

「聴衆はこう言つてるが」

「木乃香頼むもう勘弁してくれ」

「んー。せつちゃんはどう思う?」

「ま、まあ千雨さんも疲れてるようですし、とりあえず休んでもらつてもいいんじゃないですか?」

「じゃあまたエヴァアちゃんが語つてよ!」

明日菜さんがエヴァアンジエリンさんにぐつと顔を痩せるので、エヴァアンジエリンさんはその顔を掌で抑えた。

「…々近いんだお前は。それにまだ飽きんのか」

「飽きる訳ないじやない! エヴァアちゃんつて結構ミステリアスだから凄い氣になるのよ。お世話になつてるし! ネギもそうよね!」

明日菜さんが急に僕に振る。勿論僕も彼女と同じ気持ちだ。エヴァアンジエリンさんの話をもつと聞きたかった。

「…あの、聞きたいんですけど」

「なんだ」

「今のエヴァアンジエリンさんがいるのは、やっぱり雪姫さんのおかげなんでしょうか」

「…さあな。あいつがいなくても、あいつと会わなくとも、意外と私はこうしてお前らと関わつていたかもしけんぞ」

「じゃあ、雪姫さんが来てからの時間は、学校生活はどうでしたか?」

彼女がまだ麻帆良中学に通っているということは、登校地獄の呪いは解けていないということになる。だとすると、話の通りなら彼女は去年の三年間を学生として過ごせなかつたと呪いに判断されたことになる。

そんな時間は、彼女にとつてどうだつたんだろうか。

「ふふ」

エヴァンジエリンさんは、俯いて静かに笑い声を漏らした。

「……楽しかった」

顔を上げたエヴァンジエリンさんの笑顔は、今まで僕が見たことのない表情であつた。顔一面に満悦らしい笑みが浮かべられていて、本当に幸せを感じているようなその笑顔は、見る人の心すら癒すものだつた。

みんなが息を呑んで彼女に注目した。

クラスメイトではあるけれど、普段冷静な彼女がそんな風に笑う顔があるだなんて、想像していなかつたのだろう。

「あいつと過ごした日々は、最初こそ苛々したけれど、今思えば楽しかつたよ」

満月を背にそう語る彼女は、幻想的にすら思えた。普通の学生らしく過去を思い出し、楽しかつたと言えるエヴァンジエリンさんを見て、良かつたと思った。

彼女の人生は辛い時間も多かつただろうけど、それでも幸せに語れる時間が確かにあるのだと思うと、僕も救われた気持ちになつた。

「や、やっぱりもつと聞きたいです。僕、エヴァンジエリンさんのこともっと知りたいです」

「なつ……！」

おおー、という声が周りから上がる。何人かは顔を赤くしていて、ネギ君やるなあ、という木乃香さんの声が聞こえた。

「お前、よくそんな台詞を素で言えるな。いつか刺されても知らんぞ」「え、何がですか？」

「……いや、いい。自分で気付かぬならいつか勝手に刺されればいい

んだ」

諦めたようにエヴァンジエリンさんが言うけれど、僕にはよく意味が分からなかつた。

「しかし、面倒だな」

「でも、中途半端に終わられると気になつて仕方がないです。雪姫さんがどうなつてしまふのかも分からぬままですしこそ」

「え、なに。雪姫さんどうかしちやうの？」

「うち明日菜はただ純粋に聞いとればええと思うんよ」「え、なにそれ。余計気になつちやうんだけど！」

明日菜さんは、エヴァンジエリンさんの話を今と繋げずに物語のような話として聞いているのだろう。よく言えば入り込んでいるということだ。

だけど、彼女以外の人はほとんど気付いている。

雪姫さんは、現時点ではいない存在なのだと。

どうやつてエヴァンジエリンさんにやる氣を出させるものか、と皆が悩んでいる時に、明日菜さんは唐突に言い出した。

「てか私思うんだけどさ」

「どうしたんですか明日菜さん急に」

「その人見たことないから分からんないけど、雪姫つて名前エヴァちゃんにもぴつたりよね」

「……？　どういう意味ですか？」

「え、なんか肌白いし、雪とか似合いそうじやない？　それで金髪ロングでお姫様っぽいし」

「それは流石に安直かと……」

「……ククク。クハハ」

明日菜さんがどうでもいいような話をしたところで、エヴァンジエリンさんは不意に笑い出した。

「そうか、ぴつたりか」

どこか機嫌が良さそう笑うエヴァンジエリンさんの横で、千雨さんも微笑んで地べたに座る。

「まあいい。続きをまた私が語ろう」

「ほ、ほんと!?」

「ああ、最初に坊やに語り出したのは私だしな。最後までいこう。
らすのだから、しつかり聞いていけよ?」

喋

『ねえ、朝よ』

遠い記憶だ。目の裏にぼんやりとした乳白色の光を感じて、暖かいベッドと毛布の上にいる私が眼たげに薄眼を開ける。

『起きて、寝坊助さん』

額にキスされるのをくすぐつたく感じながら、頭の頂点から頬へ流れれる掌を愛おしく感じながら、私は窓から刺す光に起こされる。

『ご飯よ』

幸せだった日々。辛いことがあっても慰めてくれる人がすぐそばにいて、孤独とは無縁だった朝。

そんな毎日に私はいつも愛おしさを感じながら、眼を開けるのだ。起きて最初に見えるのは、いつも同じ顔だった——。

『キティ——』



眼が覚めると、味噌汁の匂いがした。

トントンと、小刻みに包丁がまな板を叩く音が家に響いている。低く静かな音なのに、何故かそれは耳に残つて、しかし決して不快ではなかつた。

頭の中に、雪姫がいる感覚がない。つまり、あいつが料理をしているということなのだろう。毛布をよけて、一度背伸びをしてから部屋を出てリビングに向かう。

「おはよう、エヴァ」

階段を降りる音で気付いたのか、一度私に振り向いて雪姫は挨拶をしてきた。

ああ、と適当に返事をして、私は席に座る。

「今日は早いじゃない」

「……目が覚めた」

「先に顔洗つてきなさいよ。目やについてるわよ」

「ああ」

半分寝ている思考のまま、私は立ち上がりのろのろと洗面所に向かう。水を出して手で掬い、ひしゃ、と音を立てて顔に当たた。冷たい水が心地よい。何度も繰り返して鏡を見ると、寝癖が跳ねた自分がいる。もう一度欠伸をしてから軽く手櫛で揃えた後に、私はまた席に戻った。

大分頭が冷静になつた後、私は雪姫の後ろ姿を見た。どこから出してきてたのかエプロンを着けていて、髪の毛はポニーテールになつている。整えられた金の後ろ髪が動きに合わせて少し揺れてい、馬の尻尾と呼ぶにはあまりに上品な動きだった。

頬杖をつきながら、私はその揺れを目で追つてしまつた。

「……何してるんだ」

今更の質問に、雪姫はおたまで味噌汁を掬い口に当てながら答えた。

「何つて、料理よ。朝ご飯作つてるの」

「パンを買い込んであつただろう」

「たまにはご飯で朝を迎えるでしょ？」

「食材はどうしたんだ」

「この時代つて本当便利ね。スーパーパーつてとこ、夜中にも食材を売つてくれるんだから」

他にも、金はどうしたとかエプロンはどこからとか、聞きたいところは沢山あつたが、ふんふんと上機嫌に料理を続ける姿を見るとどうでも良くなつて、私は大人しく彼女の料理の完成を待つた。

しかし、夜中に買い物に行くということは、夜は私から抜けて一人で活動していたということだ。私の少ない魔力を勝手に使つていることは、寝ていて自覚がないため憤りなどはないのだが、そこまで自律的になれることに驚く。つくづく不思議な存在だと再度思う。

どこまで遠くに行けるのか、誰かに見られていないのか、という事は気になつても、雪姫が夜な夜な悪さをしているという発想には至ら

なかつた。そんなくだらないことをする奴には思えなかつた。

癪だが、私もこいつのことをある程度分かつてきただということなのだろう。

「はい、出来たわよ」

両手に皿を持つて彼女は此方に向かってきた。右手には焼き魚。左手にはほうれん草のお浸しを手にしている。私の前に次々と料理が運ばれてきて、ひじき煮、大根おろしとしらす、ご飯、味噌汁が置かれて最後となつた。

そしてそれぞれ、2人前ずつある。

「お前、食べられないだろう」

「ええ。でも、一人で吃るのは寂しいじゃない」

「寂しくない。どうするんだそれは」

「口に入れて、体の中で消すわ。つまりは食べたふりつてことよ。別に捨てるわけじゃないし、いいでしよう?」

栄養にしていないことと消去することでは違うのだろうか。

食事も十分に取れない貧民や、食材の命を大事にするよう声を上げる人にとっては、食料の無駄遣いなどと言つて怒るかもしれない。しかし私にとっては別にどうでもいいことで、そのことを問い合わせる気はなかつた。

「……お前の分、私の金を使ったのに無駄にするとはな」

「ふふ、料理費用よ。それより早く食べましょ。冷めちゃう」

「味は分かるのか」

「美味しいか不味いかは私には分からぬけれど、どんな化学物質であるかは判定できる。一応味見して人の好みに合う味付けになつている筈だから不味くはないわよ」

「……まあ、味の文句は食べてからだな」

「はいはい、じゃあ、手を合わせて」

「……いただきます」

雪姫は慣れないだろう箸も上手に使い、料理を口に運んでいる。誰

からみても普通に食事を食べる女性だった。

私も箸を持ち、適当に摘む。

久しぶりの和食は、美味かつた。

いや、美味しいだけではない。高級料理店での外食では味わえない、不思議な安心感のある味がした。

「どう？」

微笑みながら聞いてくる雪姫に対して、私は、普通だ、と答えた。それでも彼女は嬉しそうに笑っていた。

○

飯を食い終わると、雪姫は、洗い物はしておくから着替えてきなさい、と指示してきた。ただしシンクまで持つてこないとやらないといふので、私は渋々空になつた食器を運んだ。

彼女がかちやかちやと水と洗剤とスポンジで音を奏でているうちに、私は学校へ行く支度をする。

身形を整え、制服に袖を通して、鞄を持つ。

なんて学生らしい朝の仕草なのだろう、と私は自分に言つた。前まではだらだらと適当に準備するだけで、それもまた学生らしいといえばらしいのだろうが、なんとなく今やつてている動きの方が一般的であると思つた。

どうだ、登校地獄よ、私はちゃんと学生してるぞ、と心に問いかげても答えはこない。

はあ、とため息を吐いてから私は玄関で靴を履いた。

「もう出るの？」

手を拭きながら、雪姫が外に向かおうとする私の後ろに立つた。
「家にいてもやることはない。だらだら歩いて向かう」

「そう。なら、いつてらっしゃい」

思わず。

振り返つて雪姫の顔を凝視してしまつた。

「……？　ああ、もうちょっと洗い物して、洗濯して掃除して、そしたら私も追いつく、というかあなたの中戻るわよ」

付いて来ないのか、という疑問を持ったと思われたのだろう。雪姫は何事もないかのように、もう一度手を振つて、いつてらっしゃい、と言つた。

心が波立ち、ざわざわと穏やかに揺れる。動く掌がスローモーションに見えて、雪姫が眩しく見えてしまう。

からうじて立ち上がれた私は、遠くに感じたドアノブをおもむろに掴んで、そのまま出て言つた。

行つてきます、とは言えなかつた。

久しぶりに雪姫が頭の中にいない状態で、外を歩く。

あいつが来てからこれまでずっと会話しつぱなしだつたので、一人が嫌に落ち着かなかつた。

しかし、さつきの瞬間にあいつが頭にいなくて良かつたと心から思つた。私自身、自分がどんな感情を抱いたのか処理できていないのに、彼女といいたらどうすればいいか分からなかつただろう。

「お、エヴァンジエリンさん、おはよう」

「エヴァンジエリンさん、おはよう」

林を抜けて街道に出たところで、たまたまあきほと千雨にあつた。二人も登校中だつたのだろう。

おう、とぶつきらぼうに返事をすると、二人は顔を見合させた。

「あの、何かあつたの？」　エヴァンジエリンさん

「……何がだ」

「何がつて、お前ちよつとにやけてるじゃん」

「……つへ？」

慌てて私は自分の頬を触つた。にやけているだと。そんな馬鹿な。

「ふふ。良いことでもあつたの？」

「ない！ 何もない！ にやけてもない！」

二人から顔を逸らして両手で自分の顔を揉む。いつもの冷静沈着でクールな自分になるよう引つ張つたりもした。

何してんだ、と怪訝そうに聞く千雨の声を無視して一心不乱に私は心を落ち着かせた。

「そういうえば、雪姫さんは今はいないの？」

「なななんであいつの名前が出るんだ！」

「どれだけ動搖してんだよ」

全く落ち着きそうにない私を見て、あきほはくすくすと笑つていた。

「多分、いないんだろうなーって思ったの」

「あー、だよな。多分、いないよな」

二人とも私との付き合いにも慣れて来たせいで、いつのまにかの中にあいつがいるかいなかも見て分かるレベルになつていたのか。

「……どうしてそう思う？」

「だつて、ね」

「いたら、おう、なんて返事許されないだろ」

「……」

思い返すと、確かにそうだ。他人からの挨拶に何故か執着する雪姫なら、私がそんな返事をしたなら身体を抑えつけてしつかり挨拶するまで説教を続けるに決まっている。

しかし、挨拶程度出来なかつたくらいであいつがいからだと見抜かれるのは、半人前と言われているようで癪だつた。私一人でもそれくらいはできるに決まっているだろう。

私はゆつくりと彼女達をもう一度見た。

口をすばめて、私は小さな声で言う。

「……おはよう。あきほ、千雨」

「……うん。おはよ」

非常に照れ臭く感じて、私は二人からまたすぐに顔を背けた。

「そんで、雪姫さんはどうしたんだ」

そんなに私と居ないことが気になるのか、千雨は再度あいつのことを見ねてきた。きっと、一人でいない時を見るのが珍しかったからだろう。

「見限られたか？」

「見限るつてなんだー！どうして取り憑かれてる被害者の私があいつにそんな判断されねばならん！」

「だつていつ見てもすげえ迷惑かけてるし」

「迷惑などつ……」

思い返せば、人型の姿で動けるようになつてから、あいつは私の世話を勝手にしていた。風邪を引いた私の看病をして、今日だつて頼んでもないのに朝食を作り、部屋の片付けまでしてくれるという。

……それに、私はあいつには碌に挨拶も返してない。

おはようも、行つてきますも言つてない。ごちそうさまは、言つただろうか。いつもは誰かに不誠実だと五月蠅いくせに、今日のあいつは怒りもしなかつた。

これは、見限られた、ということなのだろうか。

「じょ、冗談だよ。そんな深刻な顔すんなつて」

「だ、誰が深刻な顔などするか！ ふ、ふん！ あいつがそれで居なくなるなら私としてはラッキーだ！ やつと邪魔者がいなくなつたと清々する！」

（何が清々するつて？）

「うおお!?」

いきなり響く頭の声に、私が仰け反る。その勢いで鞄を落したが、すぐにおきほが拾つてくれた。

（あら、千雨ちゃんとあきほちゃんも一緒なの。おはよう、一人とも）二人は姿ない雪姫から脳内に声を掛けられるのは初めてだつたのだろう。少し戸惑つた表情をしたが、すぐに声を出しておはようございます、と言つていた。

「こ、これは、口に出して喋つた方がいいのか？ 脳で喋る感じでいいのか？」

（皆でいる時は口に出せばいいと思うわ。千雨ちゃんの心の声を周り

に響かせるのも出来なくはないけど、少し面倒だし、黙つて見つめ合つてるのも変でしよう？」

「お、おう」

（……でも、こういうテレビシーみた的に憧れてるならやつて見てもいいわよ？）

「み、見抜かれてる」

やはり魔法に対する憧れはあったのか、千雨は恥ずかしさで少し頬を赤く染めた。

（それで、どうして3人一緒なの？）

「私と千雨ちゃんの家つてそんなに離れてないから、たまにこうして一緒になるんです。初等部と中等部も近いし。そしたら、今ちょうどエヴァンジエリンさんにも会つて」

「なんだ、あきほも寮暮らしじやなかつたのか」

「……うん。それより、雪姫さんは今日は姿をみせないんですか？」

一瞬表情に陰りを見せたあきほであつたが、まるでそこに触れて欲しくなさそうにすぐ別の話題にしようとした。気にはなつたが深く聞くのも嫌なのだろうと私は気にしないふりをした

（学校でエヴァの側にずっと私の姿があつたら変でしよう？）

「なら、実体化して家にいればいいだろう」

（嫌よ。貴女から距離が出来るとやっぱりちよつときついもの。それに長い時間は離れてられないわ。実体化は側にいる時が一番いいわね。あと、家に1人なんてつまらないじやない）

多分、後者の理由の方が大きいんだとすぐにわかつた。雪姫は暇なのは好きじやないのだ。

立ち止まつて話をしていた私達は、やつと学校に向かい出しのろのろと歩き出した。折角早く家を出たのに、遅刻したら台無しだ。それにあきほのことだから、またどうせ日直紛いのことをやるつもりなので、学校には早めにつきたいだろう。

雪姫も合わせて4人で話しているのに、周りから好奇の目を向けられるることはなかつた。詳しく会話を聞かなければ3人で会話をしている

ようにしか見えないだろうし、そこまで他人の会話に聞き耳を立てる人もいないということだ。

「エヴァのやつ、なんかニヤついたり落ち込んだりしてすげえ情緒不安定だつたんすけど、雪姫さんなんか知つてます?」

「ち、千雨! 貴様適當なことを言うな!」

（んー。全然心当たりはないのだけれど、どうしたの? エヴァ）

「何でもない! 何でもないから気にするな!」

（なあに? 気になるじやない）

「だからなあ!」

第14話

千雨は途中で初等部に向かつたので、私とあきほは2人で中等部の門を潜つた。話しながらのんびりと歩いていた筈だが、まだ時間は早いようで人の姿は少ない。

学校の玄関はいつも賑わつてゐるイメージであつたが、人がいないだけでなんだか別の場所に感じるほど静かだつた。早起きも悪くない、と単純に思つた。

下駄箱にローファーを入れて、内履きを取り出す。あきほは一番下の段であつたため、しゃがむようにして靴を取り替えていた。

「下の段だと面倒そうだな」

「一年生の時も下だつたの。ずっと下だから慣れちゃつた」

（貴女も長く通つてるんだから下の段を使う時ぐらいあつたでしょ）

「ふふん。それがないんだよ。私はいつも真ん中だ。間違いなく、日頃の行いがいいからだろうな」

学年が変わるごとに下駄箱入れの場所は変わる。私は普通の人よりその機会が多いが、膝を曲げねばならない下や手の届かないほど上にはなつたことがない。

（日頃つて、ゲームか寝てるだけで特に何もしてないでしょ。なに変に自慢げになつてるのよ）

「でもずつと真ん中つてのは凄いね」

（駄目よあきほちゃん。下手に褒めたら調子乗つちゃうわ。よく考えなさい。実際全然凄くないわよ）

「あはは……」

あきほと雪姫の反応は大きく違う。雪姫は呆れるように私に叱咤し、あきほは純粹に凄いと感じて褒めてくれる。

下駄箱の場所なんて、どうでもいいことだらう。話にするようなことでもなかろう。

それでも私は気付けば話題にしていて、そして二人は自分の言葉で答えをくれた。こんなになんでもない事なのに、それが今までしてこなかつたことで、今は出来ている。

この時の私はこの変化に自覚していなかつたと思う。

同様に人通りの少ない廊下を通り、教室の扉に手を掛ける。がらら、と古臭い音を立てながら部屋に入つた瞬間だつた。

「ばあ！」

突然、大声が耳に響く。

「……」

目の前には、茶色い短髪の少女がいた。大きく手を突き上げながら、目を見開いて立つてゐる。

どうやら、扉の裏に隠れていたらしかつた。

「……」

私はただ啞然とそいつを見る。

後ろにいたあきほが、なんか変な声したけれどどうしたの、とひよいと肩から顔を出した。

「あ、ゆみちゃん。おはよう。今日は早いんだねえ」

「あ、あー」

大口を開けたままのせいか上手く喋れずフリーズしている少女の横を、私はすつと通る。

いいの？、と雪姫に聞かれたが、無視して席に向かつた。

「ちよちよちよつとーー！ なになになに!? 君はどうして無視するのかなあ!?」

だだだ、といきなり駆け出して、ゆみ、と呼ばれた奴は私の肩を後ろから、がし、つと掴んだ。

「なんだお前は。朝から煩すぎる」

芸人のような少女の手を払いのけながら答える。

せつかく静かな朝だと思いながら登校していたのに、その余韻が台無しである。

「なんだ、じゃないよお！ 私ね！ 今日はたまたま早く来たの！」

それであまりにも暇だつたから次くる人を驚かせようとずっと待つてたの！ それなのに！ なのに！ 無視つて!!」

何も聞いてないのに勝手に説明している。本当に煩かつた。雪姫

が、元気な子ねえ、なんて和やかに言つてゐるが、私からしたら鬱陶しいだけであつた。

「つてあれ。君、エヴァンゲリオンちゃん？」

「誰が人型決戦兵器だ」

「エヴァンジェリンさんだよ、ゆみちゃん」

「あーそつちかあ！　おいしいね！」

ぱち、と指を鳴らしながら悔しがる少女は、どうやら巫山戯た発言も全て本氣で言つてゐるらしくて、話していく頭が痛くなる。千雨もスイッチが入ると喧しいタイプだつたが、常時騒がしいこいつと比べたら随分マシである。

「初めてちゃんと話すね！　エヴァンジェリンちゃん！　私、竹光ゆみ！」

手を開いて、此方に伸ばしてくる。

握手を求めているということは、すぐに分かつた。

無視したいものだつた。純粋な瞳であつたが、私がそれに答える義理はない。

そうやつて、今までならシカトを決め込んでいただろう。

だが今は私の中に雪姫がいる。挨拶を無視したらどうなるかなんて、短い付き合いだからもう流石に学習していた。朝から金縛りに合うのは勘弁である。

「……エヴァンジェリンだ。おはよう」

適当に手を向けると、ゆみは力強く掴んでぶんぶんと振り回した。

「むふ、むふふふ」

「なんだ気持ち悪い」

「いやーー。柔らかい手だねえ。すべすべだねえ」

「……ゆみちゃん、危ないおじさんみたいだよ」

もういいだろ、と無理矢理手を離すと、ああーとゆみは名残惜しそうにした。

「エヴァンジェリンさんてさ！　何が好きな食べ物なの!?　いつも何

してるの!?　好きなアーティストは!?」

「ええいなんなんだお前は鬱陶しい！」

ぐいぐい質問してきながら顔を近づけてくるので、私はその頭を抑え込む。それでもゆみは負けじと力を入れてきて、思わず助け舟を求めるようにあきほの顔を見てしまつた。

「ゆみちゃんゆみちゃん。エヴァンジエリンさん困つてるよ」

「え、なんで!? 誰のせいだ!?」

「ゆみちゃんが凄い圧だからだよ。一回おちつこ? 深呼吸して、ね

?」

「私のせいだつたのか!? 深呼吸するよあきほちゃん!」

すうう、はああ、と身振りまでつけて大袈裟に息を吐くゆみを横目に、この隙にあきほに私は問い合わせる。

「こいつは一体どういう生き物なんだ」

「い、生き物つて……」

あはは、と困つたように笑いながらあきほは頬を搔いた。

「ゆみちゃんはね、中一の時から一緒のクラスだつたよ。いつも凄い元気で楽しい子だよ。だけど、たまに暴走しちやうの」

当然、私も去年から同じクラスだつたことになる。

これだけ騒がしい奴がいて、教室で注目されない筈がない。それなのに顔すら覚えてないということは、それほど私はクラスの人間に興味がなかつたのだろう。

あきほと関わるまでは、極端な表現だが全員がカボチャにしか見えていなかつたのかもしれない。

ふうう、と何回目かの深呼吸を終えたゆみが、カツと目を開いて私を見た。

「それでねエヴァンジエリンちゃん! 好きなーー」

「おいゆみ、朝から誰を困らせてるんだ」

誰かが後ろからゆみの頭にぽんと鞄を当てて、言葉を遮ってくれた。

「あ、むつみさん。おはよう」

ゆみの後ろには、長い黒髪の少女がいた。痩せ型で身長も高い。落ち着いた性格だということが見れば分かるほどすつとした顔付きだつた。

流れで私も、おはよう、と言つてしまふ。

するとむつみは意外そうに目を丸くしてから、やんわりと微笑んだ。

「おはよう、あきほ、エヴァンジエリンさん」

むつみはそのまま私の後ろの席に座った。

私は後ろの席の存在すら、今初めて認識したらしい。

「んが！ むつんじやん！ おは！」

「おはよう。ゆみ、今日ははやいな」

「そうそう！ 早起きしちゃつてね！ 一番乗りだつたよ！」

「それは良かつた。そういうえば、さつきC組の佐藤がゆみに話があると言つてたぞ」

「さつちやんが？ なんだろ！ 聞いてくるね！」

そう言つて何故か全速力でゆみは教室を出て行く。

ちらほらと登校してきた人達もその行動に一瞬ぎょつとしていたが、ゆみだと分かるとすぐに冷静になつっていた。このクラスではもう見慣れたものなのだろう。

「やつと喧しいのが消えたか……」

「ふふ。すまないな。ゆみは騒がしいのが良いところで悪いところでなんだ」

むつみは悟つたような口調で言つた。ゆみの後に話すからか、むつみはとても同じ年齢のものとは思えないほど大人びて見える。

「エヴァンジエリンさん、私の名前、分かるか？」

あきほやゆみがむつみと呼んでいたからそうなのだろうが、苗字までは分からぬ。

「……すまん」

「いや、いいさ。ちゃんと話したこともないからね」

私が知らんという意味で謝つたことに対しても、むつみは笑つて流すだけで怒つたりすることはなかつた。その余裕が尚更大人っぽく見えすぎて、こいつはこいつで中学生には見えん、と思つてしまう。

「沢村むつみだ」

彼女もまた、私に手を伸ばした。

1日に二度握手することなどあつただろうか、というかなんでこいつらはわざわざ握手したがるのか、などと思いながらも、私は手を出します。

むつみはゆつくりと私の手を握った。先程のゆみとはとても対称的に感じる。ただ、二人がどうしてか満足げなのは同じであった。「エヴァンジエリンさんには悪いが、ゆみが興奮する気持ちも理解出来るんだ」

手を離しながら、むつみは言う。

「うんうん、私も分かるよ。お話をくなっちゃうよね」「くすくすと口を押さえてあきほが可愛く笑う。

「どういうことだ？」

「エヴァンジエリンさんは2年間同じクラスだつたが、まともに話をしたことがないからだらう？ 挨拶だつて、無視はされどもそちらからされたのはさつきが初めてだ」

(貴女……)

(ええい過去のことだ今更金縛りなどするなよ!)

同情と怒りの混じつた声が脳に響いたので、釘をさすように言つておく。

「ゆみちゃん、みんなと仲良くなりたがる人だから。きっとエヴァンジエリンさんにも何回か声を掛けてるんじゃないかなあ」

「……全く覚えがない。しかし、私のことをエヴァンゲリオンとか呼んでいたぞ？」

「まあゆみは基本忘れっぽいからな」

(それですませていいのかしら)

(要するにあほつてことなんだろ)

「だが、声を掛けていたのは事実だ。……お前らのことなどどうでもいい。一度と話しかけるな。君はそんな風に答えていたけどね」
(最低じゃない。貴女の方があほよ)

(ぐぬぬ……!)

「……悪かつた。もしかしてお前にもそんな態度をとつていたか？」
私がそう言うと、むつみはまた大人っぽい笑みを見せた。

「いいや、私はそんな君が怖くて怖くて、話しかけれなかつたよ。どう見ても君は私達とは見ている世界が違くて、こう言うと悪いが、恐ろしかつたんだ。君の佇まいは、とても同年代の人間には見えなかつた」

意外と鋭い、と思いつつも、私はその言葉に考えさせられていた。

一瞬で思考の闇に墮ちていき、足からずぶりと沼にハマるような感覚を覚える。

深海のようにくらいた闇の中で、ちょっと今までの自分を思い返していた。

私は、どうでもいい話をクラスメイトと話すようなモノだつただろうか。

差し伸べられた手を、簡単に握るモノだつただろうか。
誰にでもおはようなどと挨拶するモノだつただろうか。

過去の自分を、悪かつたなんて素直に謝れるモノだつただろうか。
周り全てが真っ暗で、ただ消費していく日々を生きていた私は、何かと関わるのを異常なほど避けていた筈だ。
だが。

雪姫が私の中に來た。

あきほが私に声を掛けた。

たつたそれだけのことで、どうしてこうも変わつてしまつたのだろう。
どうして、誰かと一緒に自分も悪くないと思つてしまつたのだろう。

「あきほと教室で話す姿を見るようになつてから、エヴァンジエリンさんはちよつと柔らかくなつた。私は、今の君の方が好きだな」
恥ずかしげもなくキザな台詞を吐く彼女を前に、私は辛うじて、そうか、と言うだけであつた。

○

それから、私の学校生活はまた色を変えた。

「エヴァーーー！ 一緒にお昼たべよーーー！」

午前の授業が終わると、満開の笑顔のゆみが私の机の前に現れる。弁当を片手にしていて、後ろにはあきほもいる。

「私も一緒でいいか？」

「もちだよ！」

むつみも私の後ろから声を掛けてきて、許可を出した訳でもないのに、彼女達は勝手に机をくっつけて私の側に座る。

彼女達とともに話すようになつてから、ずっとこうだった。
それまで購買で適当にパンを買って飯を済ましていた私はその提案を断ろうとしたのだが、いつのまにか雪姫が弁当を作つて私の鞄に詰めていて、それを食べるしかなかつた。

「エヴァのお弁当いつも美味しそうだよね！」

「そうだな。いつ見ても凝つている」

「やらんぞ」

「それ、雪姫さんが？」

「ああ」

「凄いなあ。今度お料理教えてもらおうかなあ」

「いいんじゃないか。どうせ断らんだろう」

「ほんとう？ それなら、次お邪魔した時にお願いしようかな」

「なになに？ あきほちゃんエヴァ家に行くの？ 私も行こうかな！」

「ふむ。良ければ私もいいかな？」

「……勝手にしろ」

二人には雪姫の正体については教えていない。

何度も説明するのは面倒だし、あきほと違つて二人は魔法などとは無縁である。質問漬けにしてくるのは千雨だけで充分だ。

……だから、二人には、雪姫は私の母親というふうに説明している。

変わったのは学校生活だけじゃない。

朝、家を出る時は、雪姫が飯を作ってくれる。
いつてらつしやいと言つてくれる。

風呂に入れやら、ゲームのしそぎやら、細かいことを言つてくる。
寝る前には、おやすみなさいと、声を掛けてくる。

私はそんな生活にずっと違和感を覚えていた。
心が動搖しているのが、自分でも良くわかつた。

心の水面に浮かぶ一枚の木の葉は、絶えずせわしなく震えていた。
沈むことはなく、ただ、リズム良く揺れるのだ。

雪姫が、あきほが、千雨が、ゆみやむつみが私に当然のように声を
掛ける。

その度に、胸を抑えたくなる衝撃が走る。

感じたことのない感情の波が、私に押し寄せる。

生まれてから、ずっと大荒れだつた筈の私の心が、その時だけ確かに緩やかな波と変わり、小さな木の葉は、心地よく泳ぐのだ。

そんな変化に戸惑いを感じながらも、私は、彼女達に流されていく。
決して、不愉快ではなかつたからだ。
嫌だと感じるものではなかつたからだ。

そして、心の変化に私自身も慣れ始め、学校に行く憂鬱さを私が忘れ掛けた頃のことだ。

あきほの姿を、学校で見ることがなくなつてしまつたのは。

「あきほちゃん今日もお休みだねえ」

昼飯時、箸の先を口にパクリとつけたまま、ゆみがしみじみと言つた。

窓からポツポツと雨が当たる音がする。暑さはまだ衰えず、しかし湿気だけは強くて、もわりと嫌な空気が世界を覆つているように感じる天氣だつた。ゆみは雨がとても嫌いならしく、そのせいいかいつもの喧しさも今日は相当控えめになつていて。

「あきほ、最近はずつと調子が良さそうだつたのに」

箸を咥えるな、とゆみに注意をしたむつみが、少し目線を下げて心配する口調で言つた。

相変わらず二人は私の側で勝手に飯を食べている。そして、いつもならあきほも一緒にいる筈なのだが、姿がない。この日で学校を休んでから3日目になる。

「最近？」

「去年はもつと頻繁に休んでいた。あきほは元々身体が弱くて、病気にかかりやすく、かかると長いらしい」

知らなかつた。

私と会つてからは体調が悪そうな素振りを見せたことがない。

(心配ね)

雪姫が、ぼそりと私の中で呟く。私は弁当に入つてゐる卵焼きを掴んで口に入れた。

「あいつが寮生活じゃないのは、それが理由なのか？」

「本人からは直接聞いたことはないけれど、多分そうだろうね」

「……あきほちゃん、よく聞いてきたもんね。寮生活つてどんな感じなのつて。多分、みんなと生活してみたかっただろうなー」

自分が身体が弱いから。よく病気になつてきっと周りに迷惑をかけるから。寮より実家から通うことを選ぶ。寮で暮らすことが憧れだとしても。

自分より他人を気にするあいつなら、そう考えてしまうのだろう。
本当に損な性格だと思う。

「それじやさ！　お見舞い行こうよお見舞い！」

良いこと思い付いた！、と誰が見てもそんな心の声が漏れると分
かる表情で、ゆみは大きな声を出した。

どう、と続けて私達に自分の意見の肯定を求めてくる。

「私は構わないけれど、迷惑じゃないだろうか」

「分かんないけどさ！　どうせ溜まつたプリントは届けに行くし、そ
の時にお家の人に体調聞いて、大丈夫そうならお顔ぐらい見に行こう
よ！」

無理矢理家に押し入るくらいしか考えられない脳だと思つていた
が、流石に病人のことは思いやれるらしい。少しだけゆみを見直し
た。

「エヴァンジエリンさんは今日の予定あるかい？」

「……今日はないな」

（いつもでしょ）

細かくツッコミを入れてくる雪姫のことは無視する。

「つそれじやあさ！」

「待て。勝手に決めるな」

私がいつのまにか立ち上がりノリノリになつているゆみに制止を
かける。

すると、ゆみは一気に不安げな表情に変わる。
むつみも、私の言葉を静かに待つていた。

「……そもそもお前ら、あきほの家を知つているのか？　もし知らん
ならタカミチに聞くでもしてーー」

「つうん！うん！　そうだよね！　私らも知らないから、せんせに聞
きにいかなきやね！」

「急になんなんだお前は」

突然また元気になつたゆみが、私の両手をがしりと掴みぶんぶんと

上下に振る。せつかく雨でしおらしくなつていたのに、結局いつもと同じように鬱陶しかつた。

「……ちゃんと心配してくれてるんだな」

「……心配というか、こいつを止めれる奴がいなくなるのが困るだけだ」

ぶんぶん振り回される手はもうゆみの思うがままにさせておいて、ほんのり笑つて呟くむつみに、私は顔を向けないでそう返した。
(本当に素直じやないわねえ。どう見ても気にしてるじやない)

(うるさい！)

その後、ゆみは私を引っ張るようにして立ち上がらせて、高畑のいる職員室へと無理矢理私を連れて言つた。



「……吉野さんの家の住所？」

「はいっ！」

ゆみは私の手を握つたまま廊下を全速力で駆け抜け、注意する教師から逃げるために階段をいくつも上下し、ずいぶん遠回りしてやつとついた職員室でもまつたく疲れを見せずに、タカミチへしっかりと質問した。

対称的に、振り回された私はひどく疲れた顔でそこにいた。体力的にいうより、周りの人になんだこいつらと思われながら学校中を駆け回るのは、精神的にくる。

「えと、エヴァ、大丈夫かい？」

「き、気にするな」

そ、そう、とタカミチは私とあきほの組み合わせを交互に見てから不思議そうに言う。

「一応聞くけど、どうして吉野さんの住所を？」

「はい！先生！それはあきほちゃんちにお見舞いに行くためです！」

「……つ、どうしてお前はそういうふも無意味に大声なんだ」

右耳を塞ぎながら、私はゆみを睨みつけるようにして言う。

「……それは、エヴァも一緒にかい？」

「勿論でございます！」

「なんだ、悪いのか？」

「いや、いい。うん。是非。是非行くべきだ」

何故か嬉しそうな顔をした高畠が、ちよつと待つてねと机からファイルを取り出して、その中にある紙を見ながら、メモ用紙につらつらと住所を書き出した。

「はい、ここが吉野さんの住所だね。吉野さんによろしくね。家の人に迷惑をかけてはいけないよ？」

「はい、せんせい!!」

またアホみたいに声を出したゆみのせいで、耳がキンと響く。それから目的を達成したと昂ぶつたゆみは勢いよく部屋を出て行き、廊下から別の教師の怒声が聞こえた。きっと走るなど怒られたのだろう。私は一度ため息をついてから、次はゆっくりと部屋を出て行こうとすると、タカミチに呼び止められた。

「エヴァ、知っているかもしれないけど、吉野さんは……」

「関係者なんだろう？ 本人から聞いたぞ」

「……うん。昔は結構な家柄だつたらしい」

「だからなんだ」

「……いや。なんでもないよ。それじや気をつけて」

深みのある言い方をしたタカミチに適当に返事をして、私は今度こそ職員室を後にした。

○

放課後になると、私達は荷物を持ったまま学校の外に出ていた。

それぞれの持つ傘の上に雨が当たる。中学生といえどもゆみもむつみも女子らしく色のついた可愛らしい傘を差していた。

ゆみはいちいちケータイのナビで場所を確認しながら歩いていて、

私達を先導してくれている。

「エヴァンジエリンさん、聞きたかつたんだが」

雨音に負けない程度の少し大きな声を出して、むつみが私に訪ねる。なんだ、と訊くと、どうしてか彼女は少し恥ずかしそうにした。

「あの、もしかして、高畠先生とお付き合いしているのか？」

「つへ!?」

「ぶふつ！」

(あらあら)

思わず吹き出して、ついでに雨で足が滑つて転びそうになる。ゆみも一瞬で私達の方を振り返り、パシャパシャと水溜りを踏みつけつづけに詰め寄ってきた。

「ほ、ほんと!? エヴァアと先生て、そ、そういうご関係でありましたの



(私も全く気付かなかつたわ)

「そんな訳あるか！」

混乱して顔を赤くしながら訳の分からぬ喋り方になつてゐるゆみと、ふざけて話に乗つてくる雪姫に私は本氣で否定する。

「どうしてそんな発想になつたんだ!?」

「だ、だつて、エヴァンジエリンさん。先生のことを名前で呼んでいただろう？ タカミチつて……。だから、深い仲なのがなと……」

妙にもじもじしながら、むつみは似合わない様子で未だに恥ずかしそうに言つた。いや、似合わないというのは間違つてゐる。いくら大人びてていると言つても彼女はまだ子供なのだ。そういう話で顔を赤くするのは實に子供らしい。

「あいつとは昔からの知り合いなんだ。だからその頃からの呼び方をしているだけだ」

「昔つて、エヴァンジエリンさんが小さい頃からつてことかい？」

「まあ、そうだ」

本当は、あいつが小さい頃から、なのだが、説明が面倒なのでそういうことにしておく。

「うーん本当かなあー。あやしいなあー」

「くだらない話をしてないでさつさとあきほの家に迎え。もう近くなんだろ」

私が一人を置いてさつさと進もうとする、待つてー、と声を掛け
て二人が追いついてくる。

「あ、エヴァ、そー！ その家だよー！」

ゆみが指差す家の表札を見れば、そこには確かに、吉野、と書かれ
ている。住宅街に建つ、大きな特徴のない二階建ての家であつたが、
玄関や庭が小綺麗にされており、よく手入れされている家だというこ
とはわかる。

「ピンポーン」

ドアの横にあるインターホンを見つけたゆみは、掛け声とともにす
ぐさまボタンを押した。

「躊躇いとか準備とか全くないんだなお前は」

「え？ だつてどうせいつか押すのに躊躇う必要なくない？」

(正論ね)

「こういうところを私はゆみの凄いところだと思う」

少し待つていると、足音が家から聞こえてきて、すぐにドアが開いた。

「はい……どちらさまでですか？」

出てきたのは、二十歳ほどの青年であつた。短い短髪は爽やかで、
青いTシャツにジーンズを着ただけであつたが、スリムな身体をして
いるからかよく似合つて見える。

「ここにちは！ 私達、あきほちゃんのクラスメイトです！」

「ああ、あきほの」

青年は頬を緩めた。くしやりと寄つた皺からは子供らしさも出て
いて、モテそうな男だな、と私は思った。同時に、目元があきほに似
てると思った。きっと彼がいつかあきほが言つていた兄なのだろう。
「あきほ、調子はどうですか」

「今は大分良くなつてきたよ。そうだ、上がっていくかい？ 顔を見

てあげたら、きっとあいつも喜ぶよ」

「いいんですか！」

「ああ」

優しい笑顔で青年は私達を招き入れてくれた。兄妹とはやはり似るものなのだな、と思いながら私も彼女達に続いて家の中に入れてもらおうとする。

「……君、ちょっといいかい？」

二人の後を付いて行こうとした私は、靴を脱いだところで青年に声を掛けられた。

「……君も、あきほの友達なのかい」

そう訪ねる彼の声は、少し震えているように感じた。

恐怖、不安、心配、そんな感情が混じり合ったような瞳をしていた。それは、私には見慣れたものだった。何百年と、向けられ続けたものだ。

魔法使いの家系というからには、彼は私のことを知っているのだろう。悪評しかない者がいきなり家にやつてきたら、誰だつてそんな反応をする。

彼は、私が怖いんだ。

「……はい」

私は帰つた方がいいかもな。辛うじて答えながらそう思った。タカラミチが何を言わんとしていたかはよく分かる。分かつていた。それでも私はここまで来た。他人の目や評価を今更気にする私ではない。やりたいようにやる、というのは私の中の一つの理念ですらあつた。

しかし、あきほの家族にまで心配をかけるようならば、私は。

「……どうか。わざわざあいつのために来ててくれて、ありがとうございます」

青年は、ぎこちない笑顔を向けて、私にそう言つた。

予想外のことで、私は目を丸くしてしまう。

自然な笑顔ではないけれども、彼は恐怖に打ち勝とうとしていた。私を、あきほの友達であると信用してくれていた。

(素敵な人ね)

彼にあきほの部屋へと案内されながら、私は雪姫に、ああ、と返事をした。

○

青年があきほを呼びかけながらドアをノックすると、なにー、気の抜けた声が聞こえた。家族の前では気を許していると分かる声で、ゆみとむつみが少し笑っていた。

友達が来たぞ、といいながら青年がドアを開けた瞬間、まずゆみが飛び込むようして部屋へと駆けていく。

「あきほちやーーん！」

「つえ？ みんなどうしたの……つてうわ！」

「心配したよーー！」

「う、うん。ありがとう」

抱きつくように飛び込んで来たゆみをあきほは困った顔をしながら受け止めていた。

「離れろあほ」

私はあきほから引き離すようにゆみの首根っこを掴んで後ろに引いた。

「ゆみ、病人の前だぞ」

「あ、うんそりだね！ あきほちゃんごめん！」

「ううん、全然大丈夫だよ」

ベッドに座っているあきほは少しやつれていたが、顔色は悪くないよう見える。

ガチャ、とドアの閉まる音がした。後ろを見ると青年の姿はない。気を利かせて私達だけにしてくれたらしい。

「みんな、わざわざ来ててくれたの？」

「ああ、調子はどうだい」

「うん。今はいいみたい」

「なんの病気なんだ」

「お医者さんに診てもらつても、いつもよく分からぬの。急に体調が悪くなつちやつて……。でも、もう大丈夫だよ。みんな来てくれてありがとう」

「いつから学校に来れそなんだ」

「今は熱も下がつてゐるし、調子良ければ明日には行けると思うよ」

「おおーよかつたーー！」

ゆみが大袈裟に喜んでまたあきほに抱きつこうとしたので、私は制服の襟を掴んで後ろに倒す。

ぐわあ、と転がるゆみを見てあきほはクスクスと笑つた。

「エヴァンジエリンさん。学校はどう？」

「別にいつもと変わらん」

「あ、そういうえばあきほちゃん知つてた？ エヴァと先生付き合つてるつて」

「つえ団」

「さつきなに聞いてたんだお前は！ 違うからな！」

「あきほ。さつきの人はあきほのお兄さんか？」

「うん。今日は大学の講義はないみたいで、ずっとついててくれたの」

「イケメンだつたねえ！」

「そうなのかな。ずっと一緒だとあんまり分からぬの」

「う、うん。イケメン……だつた。」

「あれ、むつぶん惚れた!?」

「惚れてない！ かつこいいと思つただけだ！」

そうやつて、本当にどうでもいい話をしていた。

3人は笑つたり騒いだりしながら、中学生らしく和気藹々と盛り上がりつていた。

気付けば、私もその輪の中に、入つていたのかもしねりない。

話に夢中になつていたせいで、私達は時間の感覚が分からなかつた。途中であきほの兄が声を掛けてくれてやつと夕方が過ぎ去ろうとしていることに気付き、私達はあきほの家を後にした。ゆみとむつみとは途中で別れ、私は自分の家へと一人で向かつていく。

まだ、雨は降つていた。

日中よりもさらに強い雨となつていて、雲の色も真っ黒に見える。車道を走る車はタイヤから飛沫を上げていて、それを掛からないように帰るのは難しかつた。

(……雪姫、どうかしたのか？さつきから黙つて、あきほとも喋つてなかつたが)

遠くで雷も鳴つた。風も強まり、ザザアと感情のこもらない音が常に耳に残る。

(エヴァ、話があるの)

それでも、雪姫の声だけはしつかりと響く。雨も風も雷も関係なく、直接心に伝わる声は、私に間違ひなく届いている。

(……なんだ)

(あきほちゃんのことだけど)

いつになく、真剣な声だつた。
思わず私は立ち止まつてしまふ。

目の前に、雪姫の姿が現れた。

傘も差さず、ひたすらに雨に濡れている。風で揺れる金色の髪も、この時だけはとても綺麗には見えない。

水の粒が流れる彼女の顔は、はつきりした芯がありながら、悔しさでそれが崩れそうな、曖昧な表情であった。

「彼女、もう長くないわ。きっと、あと数日も生きてられない」

第16話

あきほは、次の日も学校に来なかつた。

ゆみとむつみが、自分たちのせいで無理させて悪化してしまつたのかも、と心配していた。あんまりお見舞いに行かない方がいいかもね、と訊かれたので、ああ、と答えた。

次の日も来なかつた。

千雨が放課後私の家に一人で來た。最近あきほさん見ないんだがどうかしたのか、と訊かれたので、体調が悪いらしい、とだけ答えた。千雨は心配して、お見舞い行くか悩んでいた。私は何も言わなかつた。

次の日も来なかつた。

朝、タカミチが教卓の前で深刻な顔をして言った。みんなに大事な話があるので訊いて欲しい。実は吉野さんが入院した。いつ退院出来るかは分からぬらしいが、面会できる時なら顔を見に行ける人は見に行つてあげて欲しい。そんなようなことを言いながら、タカミチは私の顔をちらりと見た。私は顔を合わせないようになつた。クラスメイトの殆どが、心配する声を上げていた。ゆみやむつみは、泣きそよな表情をしていた。私は二人の顔も見ないようにした。

その日、私は学校が終わると誰とも話をせずに家に帰つた。



雪姫には、あきほのどうしようも出来ない未来が見えてしまつたらしい。それは、靈だとか呪いだとかの悪いモノではなく、本当に手の付けようのないもの。寿命や運命と呼ばれる、人の手によつて左右出来る筈もないものであつたようだ。それは、人の死を願われてきた彼女の呪いとしての背景があつたからこそ、見えてしまつたものなのだろう。

下らない。そんな迷信めいたものを信じるものか。

なんて、言えなかつた。

雪姫が、確信もなく巫山戯てこんなことを言う人格じやないことを分かりきつていだ。長い付き合いでもないが、こいつは確定したことだからこそ口に出して私に教えたのだという、絶対の自信があつた。疑えた方が、まだ気持ちは楽であつたかも知れない。

私は家に着くと、鞄を放り出すようにしてソファに投げつけた。いつもなら注意する筈の雪姫も何も言わない。そのまま椅子に背中を向けて、どさりと座る。木が軋む音が高く鳴つた。片手を額に当て、目を瞑る。身体から雪姫が抜ける感覺がした。足音を聞くに、台所へ向かっているらしい。夕飯の支度でもするつもりなのだろうか。

少しすると、コンコンという玄関を叩く音が聞こえた。何も言わないと、きいと誰かが勝手に入ってきたのが分かつた。歩く気配は段々と私に近づいて来ている。

「……エヴァ、寝てんのか？」

「……不法侵入だぞ」

「わりい」

謝意を感じない返事をして、千雨は私の荷物を隅に避けてからソファに座つた。千雨ちゃん來たの、いらっしゃい。と奥から声がしたので、お邪魔します、と雪姫に届くように少し大きな声を出していた。本来は家主である私にまず言うべきだろ、と咎めたかつた。

「そういうあそこのゲーセン、新しいアーケードのゲーム置いてあつたぞ」

「そうか」

「なんだ、あんま興味ないのか？ 好きだと思つてたんだが」「まあな」

気が乗つてない私の姿を見て、千雨はどうしたんだよ、と笑つて言つた。私はその笑顔が見たくなかった。酷く不愉快な気持ちになつた。

「やっぱ今日もあきほさんは学校来てねえのか？」

「ああ」

「そうか……。ケータイに返事も来ないし、やつぱり心配だから、お見舞いに行つてこようと思うんだが」

そこまで言つて、千雨は私をちらりと見た。

「……なあ、一緒に行つてくれねえか？ 私あきほさんの家知らないし、学校も違うのに一人で行くのちよつと恥ずくてさ」

はは、と顔を赤くして照れ臭そうに言う千雨の顔に、私はまだ目を向けていなかつた。

「あいつの家に行つても意味ないぞ」

「はあ？ なんでだよ」

「あいつは今家にいない」

「何言つてんだよ。病人が家に居なくてどこにいるつて……」

千雨は先を言いかけて、察したようにしてから、はつと息を飲んだ。
「病院か!?」まさか、入院してんのか!? どこに!?」

「麻帆良大学付属病院」

「まじか……、そんな悪かつたのか」

千雨は顔を歪ませて、眉間に皺を寄せた。彼女なりに本氣で心配はしているのだろう。

だが、それでも。

死ぬ、ということまでは、考えていない筈だ。頭の片隅にもないだろう。先週まで彼女は私達の前で笑顔を見せてくれたのだから。人の死というものを身近に感じたことがないのだから。人は想像よりずっと簡単に死ぬんだと知らないから。

「なら尚更、お見舞い行くべきじやねえか。一緒に行こうぜ」

「行かん」

私がそう言つたところで、千雨は眉の間に皺を寄せるようにした。眼鏡の奥の瞳が細くなっている。

私のことをじっくり見てから、彼女は立ち上がつた。

「……さつきからなんなんだよ、エヴァ。なんか機嫌わりいのか？」

「悪くない」

「じゃあなんだよその態度、なんで私と顔合わせねえんだ」

千雨がぐつと私に近付いた。私はそれでも彼女と目を合わせない。

「おい、いい加減にしろよ。とりあえず、一緒に病院行こうぜ。あきほさん心配だろ？」

千雨は私の手をとつて、私を立たせようとしたのだろう。私はその手を弾くようにはたいた。

「……なにすんだよ」

「行きたければ一人で行けばいいだろう？ 貴様は私が行くか行かないかで自分の意見を決めるのか？ その程度の気持ちなら行かない方がずっとましだろうな」

「お前、心配じやないのかよ！」

千雨が大きな声で怒鳴った。

雪姫にも聞こえているだろうな、と思った。彼女はまだ台所で料理をしているのだろうか。それとも、私達の様子を伺つたりしているのだろうか。聞かれてたら嫌だな、と思った。

「私が心配しているかどうかが貴様にとってそんなに大事なことなのか？ 何故他人の気持ちを自分と同調させようとする。自分と同じように考えていないなら、私がおかしいとでもいいたいのか？」

私はゆっくりと立ち上がつた。千雨を見ることなく、背中を向けた。

「勘違いするなよ。私はそもそも人ではない。貴様の感性で測ろうとするな。そもそも、人間一人どうなるうと、私にとつてはどうでもいいことでしかない」

「つ!!？ なんだよその言い方！ あきほさんがエヴァをどんな風に想つてるのかわからんねえのかよ！」

「知るわけないし、あいつが何を考えてようと私の行動を決める理由にはならない」

「もういいっ！」

千雨はまた叫ぶように声を出した。ひつたくるように自分の荷物を持って、大きな足音を立てて我が家から出て行く。玄関の閉まる音はいつもよりずつと煩かつた。

私は、小さく溜息をついて、また椅子に座つた。そして目を瞑る。

視界が真っ黒の世界に覆われて、遮るものは何もない。

包丁がまな板をリズム良く叩く音が聞こえた。タタタタ、と疾走感のある音は、聞いていて心地が良かつた。私はそのまま、何も考えないようにして、抵抗なく睡魔に襲われた。



「エヴァ、ご飯よ」

雪姫が肩を揺らした。どれくらい寝ていたのだろうか。時計を見るとまだ遅い時間ではない。夕焼けが見える程度の時間だろう。ん、と吐息を漏らすような返事をして私はおもむろに立ち上げる。

机に着くと、いつものように二人分の夕飯が用意してあつた。早めの飯だが、腹はそこそこに空いていたので構わなかつた。

雪姫が正面に座り手を合わせる。私も同じようにして、いただきます、と小声で言つた。

飯を食べる音が二人の間に流れる。それ以外は何の音もなく、雪姫もただ、料理を口に運ぶだけであつた。

「……私に何も言わないのか」

「何か言つて欲しいの？」

「さつきのやりとり、聞こえてただろ」

ええ、と返事をしつつ、雪姫は肉じゃがに入っている人参を箸で掴んだ。

「真剣に二人が話せば、衝突することもある。喧嘩になることもある。別に悪いことじやないわ」

「お前は言わないのか」

「なんて？」

「あきほの様子を見に行け、と」

私がそう言うと、雪姫は箸を置いた。そして、じつと私の顔を見つめている。

「お前だつてあいつとは知らない仲ではないだろう」

「そうね。あきほちゃんは、私にとつても友達ね」

「なら、行けばいい。もし、私と距離が離れすぎて行けないというのなら、無理矢理私を行かせればいい」

雪姫の顔は、まだ私を見ている。私はやつぱり顔を合わせられなくて、下を向くばかりであつた。

「金縛りなんだりして、行かせればいいだろう。その気になれば私を動かすことなど造作もないのだから」

「……私に決めて欲しいの？ 本当は、行きたいの？」

「ちがう!!」

思わず、両の手で机を叩いた。食器が高い音を立てた。

「私は、あいつなんてどうでもいい！ 所詮ただの人間の一人で、いつか離れていく存在で、それが早まつただけだ！ 何人死体を見てきたと思っている！ 何人私が殺してきたと思っている！ 子供一人死のうが、吸血鬼である私がいちいち感情を左右されることでもない！」

――

「……エヴァ。エヴァ」

雪姫が私に手を伸ばす。頬に手を当て、ゆっくりと撫でる。そして、自分の顔を見るようにと、顎を持ち上げるようにした。

雪姫は、優しい顔をしていた。慈愛に満ちた、表情であった。

「決めるのは貴女なのよ。エヴァンジエリン」

語りかけるような口調だ。柔らかく、寄り添いを感じるその声に、私は惹きつけられる。

どうしてか、手を払うこともない。体温などないはずの彼女のその手が、どうしようもなく、暖かい気がする。

「吸血鬼でもない。人でもない。吉野あきほの友達である貴女が、どうしたいかを決めるのよ」

「……だが――」

「ええ。貴女の気持ちも、分かるわ。自分があきほちゃんを見に行つたら、きっと良くなき顔をする人がいる。彼女の家族はより心配してしまうかもしれない。だから、千雨ちゃんとも喧嘩になつてしまつたのでしょうか？」

私は、なにも言わない。そんな風に考えていただなんて、絶対に言

わない。それでも、雪姫は確信めいたように、私に言い続ける。

「でもね、いいのよ。貴女は、貴女のしたいようにやれば。人とか吸血鬼とか、全く関係ないの。その心に宿る気持ちは何？ 貴女という存在が、彼女と知り合い、遊び、作った関係の上で、彼女にどうしたいの？」

「……わ、私は」

頭には、あきほの姿が浮かぶ。あいっぽは、私が吸血鬼と知った上でも、友達であろうとしていた。距離を縮めようとしていた。そんな彼女を私はどう思っていたか。

最初は嘘くさいと決め付けていた。

でも、彼女は最後まで、私の近くにいようとしていた。私がどんな奴か、知ろうとしていた。悪評や、噂に流されず、私という人物に向き合おうとしてくれていた。

そして、心を開いてくれていた。それは、何百人と見てきた人間の中で本当に珍しいことで、私はそんな彼女の態度が、嫌じやなかつた。

「……もう一度、話がしたい」

「そう」

頬に触れる手を感じながら、前を見る。

どうして。雪姫はこんなに私をまっすぐに見てくれるのだろう。私なんかのために。

「じゃあ、行きましょうか」

彼女は立ち上がる。机に残つた料理は後で食べましょ、と笑顔で言つた。

「……後で、千雨ちゃんとは仲直りしておくのよ。喧嘩したあと仲直りするのも友達なんだから」

「……しらん。私が謝らなきやいけないのか」

「さあ？ それを決めるのも、貴女よ」

挨拶をしなかつたり、人を無視したりすると、怒つたり注意していく癖に、こういうことは私に決めさせようとしてくる。本当によく分

からない奴だ。

私も立ち上がるとき、雪姫はくすくすと笑いながら、私に向けて手を伸ばした。あまりに自然に差し出されたその手に、私は身動きが取れずにはいる。

「行くんでしょう？　まだ面会は間に合うわ」

「あ、ああ」

握れない。握る必要がない。病院まで行くのに、どうして手を繋ぐ必要などあるの？　さつさと向かえればいいだろう。歩きにくいだけだろう。

そう思うものの、何故か口には出来ない。

「ほら」

動かない私の手を、彼女は無理矢理握った。
大きい手だ。私より一回り大きな、女性の手だ。私が幻覚で作った簪の姿なのに、全く身に覚えがない感覚がした。彼女はまるで別物に見えた。

そして、その掌から伝わる暖かさは、どうしたって、振りほどけない気がしていたんだ。

その病院に足を踏み入れたのは、初めてであった。

麻帆良一大きな病院と呼ばれるだけあって建物は大きく、案内所に行かないと迷うのは明らかであつた。白く清潔な屋内は薬品らしきツンとした匂いが漂つていて。夜が近い時間でも人が多く、中でも老人の姿が多く見えた。白衣をきた男性は書類を手に慌ただしく早歩きをし、その後ろを看護師らしき女性が付いて行つていて。

こいつら全員が人を救うという仕事をしているのだと思うと、どこか感慨深かつた。私の世界には傷つけ合う人間ばかりが目に映つてきたが、世の中にはその手を治すことにしか使わないものがいる。かつて病気が蔓延し滅びかけた都市をいくつも見てきたが、いまや知恵あるもの達が克服しそれを常識としている。

全てが純粹に善意で動いているわけではなかろうが、それでも培つた技術を他人に使えるというのは、大層なことだと思つた。

だが、彼等にだつて救えない人間がいるのだ。

全力を出し、あらゆる技術を使つても、届かない世界がある。

そんなとき、彼等は何を思うのだろうか。

「……」

実体化した雪姫が、ある病室の扉の前で言つた。雪姫はずつと実体化していく、私と一緒にここまで來た。あきほの病室を看護師に聞いたのも彼女だ。柔らかい物腰で丁寧に訪ねたからか、看護師は特に怪しむ様子などはなかつた。今は面会できる状態ですよ、ということまで教えてくれた。

勿論、手はもう繋いでない。人前でそんな無様な姿を見せるなんて有り得ない。

なに、恥ずかしいだけだろつて？ うるさい。黙つて聞いていろ。

「さあ、ノックして」

「私がするのか」

「そうよ。貴女がするの」

誰でも一緒だろ、と思ったが、反抗しても仕方がないので、私は諦めて扉を叩いた。

はい、と男性の声がして扉が開く。そこには、先日あつたあきほの兄がいた。

青年は雪姫を見て不思議そうな顔をした後、目線を下げて私と目を合わせた。

そして、明らかに不快な顔をした。奥歯を噛み締め、強く睨みつけるように私を見ている。

ああ、いつもの顔だ。そう思った。

他人が私を見る目は、いつも恐怖か恨みであつて、彼もそうなつてしまつた。

前のような、優しげな青年の面影はそこにはなかつた。
「何しに来たのですか」

語気が強い。警戒しているのが手にとるように分かつた。

「私たち、あきほちゃんのお見舞いに来たの」

すつ、と私の前に出て、雪姫が笑顔で言う。青年は訝しげに眉を寄せた。

「失礼ですが、貴女は？」

「あきほちゃんのお友達です」

青年の警戒心は更に強くなつた。部屋を塞ぐようにして、威圧的に堂々と立つてゐる。

「帰つて下さい」

「あら、どうして？」

「怪しい人物をあきほに合わせる訳にはいかない！」

怒鳴られたが、それが当然の反応だと思つた。想像した通りだ。

悪評しかない私を、弱つてゐる家族に合わせようとする者などないでであろう。もしかしたら、先日私がお見舞いに行つたせいであきほが悪化してしまつたと疑われてゐるかも知れない。

そう思われていたとしても、私は彼を責めれない。彼は間違つてい

ない。彼は、家族を守ろうとしているだけなのだから。
こんな風に生きてきてしまった私は他人に疎まれても仕方がない
のだから。

だが、私はもう決断してしまった。

私はここに来ることを選んだ。あきほと話すことに決めた。

彼に悪いとは思うが、引く気はなかつた。どんなに疑われ、嫌われ
ても、彼女と話したいと思つたのだから。

「……お兄ちゃん、入れてあげて」

部屋の奥から、あきほの弱々しい声が聞こえた。私達の会話が聞こ
えていたのだろうか。

「あきほ。だけど……」

「お願ひ、お兄ちゃん。私、二人に会いたいの」

くつ、と口を歪ませて、青年は私達が通れるように身体を半身にし
た。その横を通るときも、青年は強い意志のこもつた瞳で私達を見てい
た。

あきほに何かしたら絶対に許さない。そう語つているようだつた。
広い部屋だつた。大きなベッドが一つあつて、その上にあきほがい
る。好待遇な部屋は、逆にあきほの病氣のどうしようもなさを語つて
いるようで、遺る瀬無い気持ちになる。

「……あきほ」

「エヴァンジエリンさん、雪姫さん。来ててくれて、嬉しい」

仰向けに寝ているあきほは、会つたのは数日前というのに、ずっと
痩せた様子であつた。手首に繋がれたチユーブが痛々しく、青白い肌
は彼女が弱つているのを如実に物語つていた。

「……お兄ちゃん、一人とだけ話がしたい」
「だ、だめだ！」

青年は強く否定したが、それでもあきほは動じずに首だけを振つ
た。

「……お願ひ。彼女達は、いい人だから」

「だけど……っ」

二人は長く目を合わせ、その後青年は諦めるように息を吐いた。
「分かつたよ。お前は昔から、大人しそうに見えて言い出したら聞かないもんな。何かされたら、すぐ呼ぶんだぞ？　あんたら、絶対にあきほに触れるなよ」

そう言いながら、彼は部屋から出て行つた。

部屋は私達三人だけになり、沈黙が場を流れる。

弱々しい彼女を前に、私は口に出す言葉が見当たらない。そもそも、何を喋るつもりであつたかも考えていなかつた。ただ、このまま終わりたくないと思つただけなのだ。

雪姫も、何も口にしない。見守るように、私とあきほを見ているだけだ。

「……ごめんね。嫌な思いさせて」

俯いていたあきほが、沈黙をひつそりと破るように小声で言つた。
「お兄ちゃん、嫌な人じやないの。ほんとよ。ただ、今ちよつと気が立つてるの。だから、許してあげて……」

「……っ」

胸が突かれる想いだつた。

この少女は、自分がこんな状態であつても、兄に煙たがれた私達の心を気遣つたのだ。兄を悪者にしまいとしたのだ。

呆れるほど、清い心で、呆れるほど、彼女らしい。

「いいのよ、あきほちゃん。私もエヴァも気にしていないわ」

雪姫が優しく言う。

「ほんと？」

「ああ」

私ははつきりと答えた。こんなことで彼女を不安にしたくなかった。

よかつた、とあきほは胸を撫で下ろした。

「そういうえば、さつき千雨ちゃんも來たよ」

「そうなのか」

「うん。入れ替わりで帰っちゃつたけど」

結局、あいつは一人で来たようだ。鉢合せなくて良かった。

「ふふ、千雨ちゃん、怒つてたよ。何かしたの？」

「いや、別に」

「喧嘩したのよ、二人で」

「言わなくていいだろ、と私は雪姫を睨むが、彼女はモノともしない顔付きだつた。

「ちゃんと仲直りしないと駄目だよ？」

「ふん。雪姫にも言われた」

「謝れるかしらねえ」

「うーんどうだろう？ どつちも強情だから」

二人はクスクスと笑い合つてゐる。その状況が、心地よく感じた。室内に流れる穏やかな空気は、ここが病室であるということを忘れさせた。

だが、その腕についたチューブと、彼女の服を見るたびに、私は現実に引き戻されてしまう。

「……」人は、聞かないんだね」

やがて、あきほは、そう言つた。

「私が、なんて病気なのか、どこが悪いのか、いつ治るのかつて」

きつと、千雨やゆみ達には聞かれたのだろう。それほど、彼女達はあきほのことを心配してゐるのだ。

だけど、私達は、何も言えなかつた。

「私ねつ、なんとなく、わかるの。自分がどれくらい生きていれるのかつて」

あきほは、わざとらしく元気な声で言う。その声が、あまりに分かれやすく無理をしていて、私は聞くのが辛いと感じた。

「昔から、体が悪くて、その度に自分の中の砂時計が、さらさらと落ちていく感覚がする。喉をゆっくり締められるような気がする。だからきつと、長生きは出来ないんだと思つてた」

彼女は、ずっと自覚していたのだろうか。

だとしたら、それはなんて残酷なことなのだろう。

そして、彼女はなんて強いんだろう。

死期が分かつていて、あんなにも平然に、私達と笑い合っていたのだ。

「エヴァンジエリンさんは、不老不死、なんだよね」

私は、こくり、と頷く。

「私、ずっと気になつてた。長く生きれるつて、どんな感じなんだろうつて」

別に、いいことばかりだつた訳ではない。むしろ、ほとんどが嫌なことだつた。

だけど、それを彼女の前では言える筈もない。

「うん。分かる、なんて言う気はないけれど、きつと辛いことが沢山あつたつていうのは、分かるの。なんて言えばいいのかな。貴女の人生は、私が語つていいようなものではないほど色んなことがあって、楽しい、なんて思えなかつたかも知れないけど、それでも、私は、それがどんな風景なのか、知りたかつたんだあ」

私が何も言わずとも、彼女は一人で語る。

布団を握る手の力が、強くなつたように見えた。

「何故だ」

思わず、私も握り拳を強めて訊いてしまう。

「お前は、自分が短命だと分かつてていたのだろう？ 知つてたんだろう？ なのに、何故他人を敬う。何故他人の為に動く。もつとワガママになつていい筈だろう！ もつと、勝手に生きていい筈だ！」

短い時間を、自分のために使わないなんて、おかしいと思つた。長く生きる私がこんなに好き勝手にしてるのに、短く賢明な彼女が人の為に動くことが、酷く不条理に思えた。

「ふふ、違うよ」

彼女は、私と初めて会つた時と、全く同じ表情で言つた。

「私がしたいから、するの。私はエヴァンジエリンさんが思うより、

ずっと勝手に生きてるよ」「だが……っ！」

「私が誰かを敬うと、その人の笑顔が見れる。そうすると、私は嬉しい。私も、人の為に生きていると実感出来る。それが、私にとつて一番だったの」

「そんなのおかしい！　おかしいぞ！」

「……優しいね、エヴァンジエルさんは」

そう言つて、彼女は、私の手をそつと握つた。弱々しい手だ。

「…………でも、寂しいなあ」

ぱつり、と呟くように、あきほは言つた。
「やつと、仲良くなれたのになあ。ゆみちゃんと、むつみちゃんと一緒に、仲良くなつたのなあ」

彼女の瞳からは、大粒の涙がぽろぽろと零れ落ちている。彼女はそれを、拭おうともしない。

「私ね、想像したんだ。私とゆみちゃんとむつみちゃんとエヴァンジエルさん。それに、千雨ちゃんも一緒に、遊びに行くの。洋服を見たり、映画を見たり、カラオケに行つたりするの。千雨ちゃんとエヴァンジエルさんは気付いたら言い争いしてて、それにゆみちゃんが混じつてぐだぐだになつて、私とむつみちゃんが笑つて見てるの。たつたそれだけなのに、どうしようもないくらい楽しいの」
涙が止まる気配はない。小さな少女の、精一杯の独白は、私の胸に痛いほど響いた。

「たつたそれだけ。それだけでいいのに、届かないの。寂しいなあ」

どうして、あきほなんだろう。もつと意地汚い人間がいる。親や子供に手を出すような奴だつている。それなのに、何故この少女が死ぬのだろう。

私はその現実に、納得がいかない。

ゆるせなくて、遺る瀬無くて、だから、この世界が、嫌いなんだ。

む。

泣き続ける彼女を前に、私は、なんて言葉をかけるべきか、悩

零れるその涙を、そつと拭うようにしたのは、雪姫だつた。

「あきほちゃん、届くわよ」

あきほが、ゆっくりと顔を上げる。

「心配しないで。貴女のそのささやかな願いは、届くわ」

「……本当に？」

ええ、と雪姫は、優しく笑う。

「ああ、届くよ」

私も、そう言つていた。

「服を見るのも、映画を見るのも、私は結構好きなんだぞ」

——優しい嘘、なんて言葉は大嫌いだつた。

「カラオケだつて、そこそこ歌える」

——でも、この少女が泣いているのはもつと嫌だつた。

「千雨と言ひ争い、はするかはわからんが、まあ自然となるだろう

——私の、最初の友達が、寂しいと泣いたままだなんて。

「うるさいゆみがそこに混じれば、まあその気も失せるだろうがな」

——人を想える友達が、泣いたままだなんて、許せなかつた。

「だから、さつさと治せ」

——だから、これが嘘じやなくて現実になればいいと。そう願つた。



ひとしきり涙したあきほは、その後疲れたように眠つてしまつた。私と雪姫は、起こさないように静かに部屋を出る。

廊下で、あきほの兄が前から歩いてくるのが見えた。その横には、壯年の男性もいた。

すれ違ひざまに、雪姫がお辞儀をしたので、私も合わせて軽く会釈をする。

壯年の男性の目つきは、あきほの兄より更に敵意の籠つたものであつた。殺意が溢れるほど憎しみを感じる瞳を横に感じながら、私は歩く。

通り過ぎた後も、その男性は私を睨んでいる気がした。



あきほが亡くなつたと訊いたのは、その次の日だつた。

タカミチから話を聞いたのは、授業が全て終わつた後であつた。

教室に入り、ゆつたりとした足取りで教壇に立つ彼の姿を見ても、クラスメイトはまだ笑顔でいた。これから部活があるものや、友達と遊びに行くものは、それらが待ち遠しいというそわそわした雰囲気であつた。しかし、しばらく口を開かないタカミチを見て、不思議には思つたのだろう。次第に教室内の口数は減つていつていて。

何かあつたのだろうか、とむつみが後ろの席から私に声をかけた。むつみの聲音は、不安が混じつていて。私は何も答えずに黙つていた。

顔を上げたタカミチは、ひどく深刻そうな顔であつた。いつもの柔らかな様子もなく、張り詰めた表情は、クラスメイトを緊張させるのに充分であつた。

タカミチも、多くの経験を積んできたのは知つている。

戦闘を知り、戦争を知り、希望も絶望も知つた筈の青年だ。

それでも、そのたつた一つの真実は、彼の心を痛めつけるほどであつたのだ。そして、それを自分の生徒達に伝えなければいけないということも、彼にとつては何よりも辛いことであつただろう。

――悲しいお知らせがある。

ついに、口を開いた彼から聞かされた話は、子供にとつてはどうしようもないくらいに残酷で、長く生きていれば誰もが経験するありふれた話であつた。

彼が口を開くたびに教室の温度は冷え切つていき、陰鬱で重たい空気が充満していく。だれかの息遣いがやけに大きく聞こえる。震えるものや一切動かないものもいる。

タカミチの話が終わつても、誰も席を立たなかつた。

そんな中で、私だけは一番に立ち上がり、歩いて教室を出た。誰も

私を目で追うものはいなかつた。

むつみや、ゆみの顔を、見れなかつた。見たくないと思つた。



家に着いて少しすると、千雨が家に來た。
玄関の前で立ち尽くしてて、顔は沈んでおり、体が小刻みに震え
ている。

なかなか動こうとせず、ひたすらにそこにいる千雨に、とりあえず
中に入れ、と私は無理矢理を引っ張り、部屋の椅子に座らせた。
雪姫が千雨の前にお茶の入ったコップを置いた。千雨は小声でか
ろうじてか細い声でお礼を言つて、ゆっくりとそれを飲む。
秒針の音が鳴り響く中、しばらくすると、少し落ち着いて来たのか
呼吸が安定してきていた。

この様子だと、もう、聞いているのだろう。
「……」の前は、悪かつた

私がそう言うと、彼女はやつと顔を上げた。一度意外そうな顔をし
て、それから、泣きそうな顔で不器用に笑つた。

「……いや、私こそ。今思えば、私の方が無神経だつた

千雨はもう一度、静かにお茶を飲んだ。

「……今日の夜に、通夜をやるらしい」

ああ、と私は返事をする。

憂鬱な気分だつた。通夜に行けば、ゆみやむつみもいるだろう。

元氣で明るいゆみの泣き叫ぶ声も、クールで落ち着いたむつみの涙
する眼も、見たくなかった。その姿を見るだけで、今までの彼女達と
は別の存在になるような気がしてしまつ。もう二度と、今までみたい
に接することが出来ないとなんて、思つてしまふ。

それがどうして嫌なのか、今まで誰とも接して来なかつたじやな

いか。そう問い合わせてくるする自分がいた。それすらも鬱陶しくて、答えを言うまでもなく振り払う。

自分の気持ちなど分からんし考えたくもない。ただ、憂鬱であつたことだけは確かだつた。

前を見た。

俯いた千雨の顔は影が差し込むように暗く、眼鏡の奥の瞳には精気すらないように見えた。あれだけ騒がしかつた少女も、今はもう萎れてしまつていて。彼女がただの10歳の少女であることは、分かつていたのに、いざ目にするとどうしてか戸惑いを感じてしまう。

「……、ういう時つて、どうすりやいいんだろうな」

絞り出すように放つたその言葉は、目的もなく宙を彷徨うような言葉であり、私には受け止められなかつた。

「なんか、分からないんだ」

千雨は誰に言うでもなく呟く。誰かに聞いてほしい、と言つた話しがではなく、喋つていないと気が落ち着かないといった様子だつた。「私、爺ちゃんも婆ちゃんも、まだ生きてんだ。皺だらけになつて、身体は細いけど、まだ、ふつうに生きてる。だから、誰かが居なくなるつての、初めてなんだ。近くにいた人が……死ぬっていうの」

声は、震えている。コップを持つ手も揺れているからか、カタカタと小さな音が鳴つていた。

「漫画とかだとさ、友達とかが死んでも、一回凹んで、それから、絶対に立ち上がるんだよ。前に進まなきやあいつが報われないと、あいつの為にも頑張らなきやつて」

私は何も言わずに、彼女の言葉の続きを待つ。雪姫も、彼女の独白をただ聞いてるようであつた。

「で、でもな。自分が、なると、実感がねえんだ。もう二度と話せないとか、会えないとか、遊べ、ないと、え、笑顔が、見れないとか、わ、分からない」

つまづきながら、千雨は話し続ける。嗚咽が、部屋に響く。こんな日に限つて虫や風の音は一切しなくて、ただ、少女の静かな泣き声だ

けが、私の耳に届いていた。

「わからねえ。こんな、こんなに辛い気持ちって、ど、どうすればいいんだ？　泣いても、泣いても、何も変わらないんだ。ずっと胸が穴が空いたように痛くて、頭が割れるみたいに痛い。目を瞑つても、あきほさんの顔が浮かんで、どうしようもないんだ」

眼鏡の奥からは涙が溢れるように出ている。彼女の言葉で、私の頭にもあきほの姿が浮かぶ。

『わ、私！　吉野　あきほって言います！』

私が吸血鬼と知つてなお、笑顔で自分の名前を告げた少女だつた。私と、友達になりたいと言つた少女だつた。優しすぎる少女だつた。私は自分の唇を噛み締めたくなつた。

「な、なあ。い、いつか、この、涙は止まるのか？　その時に、私は、死を受け止められているのか？　私、私は、いつか前に進めるのか？」

――

私は、どうすればいいのだろう。

懸命に生きている少女が、今、死を知り、傷を受け、自分の立ち上がり方を探している。

赤ん坊が自分を起き上がらせるように。暗闇で光を求めるように。手探りで、必死に掴める場所を探している。

だが。

私は、自分の手を見た。白く小さな手だが、その中で摘み取つてきただめがいくつあるかは分からぬほどだ。

私の手は、差出せるような手ではない。

命を奪い、消してきたこの手は、純白な少女に差し出していいものでもなく、掴んでいい手ではないんだ。

こんな、どす黒く、血に塗れた、この手は――

「つれえよ、エヴァ……」

——ふ、つと身体の中に、力を感じた。

泣きじやくる千雨の顔を見たら、助けを求めるその声を聞いたら。

私の手は、意識せず、彼女の方に向いていた。

誰かに操られた訳でも、雪姫の力でもない。

私は本当に、気付いたら彼女に手を差し出していたのだ。

「……千雨、前に進もうだなんてするな」

千雨は、顔を上げた。

頬を涙の跡がいくつも流れており、鼻からは今も水が出ている。あまりに不細工であつたが、そうは思えなかつた。仕方がなかつたら、その手で涙だけ拭いてやつた。

「いいんだ。その場所で、うずくまつて、泣き続けてもいい。心の痛みを乗り越えたら強くなる、立つて前に進め、なんて戯言に騙されるな。痛みはずっとお前の中に残る。生きていればこれからも、傷を負い、苦しくなっていく。それでいい。泣いて、止まつて、馬鹿みたいに泣け。そして、泣きまくつた後に、鼻水を垂らした顔を、上げろ」

言葉は、自然と出てきた。

打算もなく、意図もなく、ただ、私は私が言うべきだと思った言葉を口から発していた。

「誰かが居てくれる。懸命に生きたお前の横には、絶対に誰かがいる。膝を折つて、お前と目線を合わせてくれるそいつに、肩を貸してもらえ。立てたら、一緒に話でもしている。それだけでいい。いいか、無理矢理前に進まなくていいんだ。お前はただ、あいつの傷を負つたまま、生きればいい。出来れば、あいつの分健康に生きればいい。それだけで、いいんだ」

「……強い言葉だつたわよ」

「ふん。あんな言葉で、正しかつたかも分からん」
目を真つ赤にし、ふらついた足取りで家から離れていく千雨を窓から見ながら、私と雪姫は会話をしていた。

本当に千雨を元気付けようと言うなら、もつと適切な言葉があつたのだろう。もつと言うべき人物がいたのだろう。むしろ、しつかりと前に歩けるように助言するのが良かつた氣さえする。

しかし私は、ただ自分の思つたことを述べたにすぎない。慎重に考えるでもなく、私に言えることはこれしかないとthoughtから言つただけであつた。

「心の立ち直り方に正解なんてないわ。貴女は千雨ちゃんのために、真剣な言葉をあげた。あとは、千雨ちゃんがどう受け止めるか。それだけよ」

雪姫は、目を閉じながらそう言つた後、立つて私に向き直つた。
そして、両手を広げて、言つた。

「エヴァ。貴女も泣いていいのよ」

「泣くか」

「本当に？」

「……こんなことは、もう慣れてる。泣くわけないだろう」

「慣れるものじやないわ。貴女も言つたでしよう。傷は、貴女にも付いてるのよ」

「もう傷だらけなんだよ。今更一つや一つ増えたところで、何も変わらん」

雪姫は、私の言葉を否定するようにしつかりと首を横に振つた。

「エヴァ。貴女に付いた傷も、間違いなく貴女を痛めている。確かに人より長く生きた貴女は多くの傷があるかもしね。でも、貴女はその痛みに慣れた訳じやない。ただ、泣き方を、伝え方を、忘れてしまっただけ」

何故か、今まで生きてきた600年が、頭の中に流れ込んだ。荒れた大地の上をひたすらに一人で歩き続けた時があった。足は切れ、喉は枯れ、声も出ない。枯れ木を杖にして、ボロボロになつた布を纏つて何の目的もなくただ足を前に出していただけの時期があつた。

人に見つかれば石を投げられ、焼かれそうになる。それでも私は、血だらけの足でただ歩いていた。

……辛かつた。辛かつた。辛かつた。

でも私には、それを伝える相手が、居なかつた。だから、一人で前に進むしかなかつたのだ。

つれえよ。

そう呟いた千雨に言葉が出たのは、辛いと言える彼女が、そう言える相手がいた彼女が、羨ましかつたからなのかもしね。
「……そう、かもな」

雪姫の言うことは、間違つてないだろう。

私には、弱音を吐ける相手がずつといなかつた。こんな私になつてから周りはずつと敵だらけで、私の助け声を聞き入れる存在がいないと悟つてしまつていた。だから、誰かに辛い、ということは忘れてしまつてもおかしくはなかつた。

「だから、私に言えばいいのよ」
「……いや、いい」

「……もう意地を張るんだから」

雪姫は、いきなり私に近付いてきた。

そしてそのまま、私を包み込むように、抱き寄せてきた。

「……なつ！ 何をしている!? 離せ！」

「嫌」

暴れる私を抑えつけるように、雪姫は腕に力を込めていた。身長差もあってか力はどう考へても私の方が弱くて、必死に間に腕を入れても、んぐ、という情けない声とともに私の顔は彼女の胸に飛び込んでいく。

「……な、なんのつもりだ」

「エヴァ、よく聞いて」

優しい声だ。どうしようもないくらい穏やかな声だ。私の髪を、さらりと撫でながら、雪姫はゆっくりと語った。

「泣くとか、泣かないとか、別にどつちでもいいの。でも、無理はしないで」

「む、無理など……」

「してるわ。わかるもの」

雪姫は、私への拘束を解く気はないらしい。金縛りもなく、単純に力だけの抱きしめを、私は振りほどくことが出来なかつた。

「後悔してるの？」

その言葉は、私の胸に刺さつた。

私は雪姫への抵抗を諦めて、腕の力を抜いた。
そして気付けば、口に出していた。

「……うそを、ついてしまつた」

一緒に、買い物に行けるなどと。映画に行けるなどと。
死が訪れると、知つていながらも、私は彼女に希望を持たせてしまつた。

希望を持つて死ぬのと、絶望のまま死ぬの。どつちがいいかなんて私が決めることではない。ただ、事実なのは、私は彼女がそんなこと出来ないと分かつていながらもそう言つたことだ。

「エヴァ。良し悪しなんて、正解不正解なんて、決められたものじやない。事実なのは、貴女が嘘をついたことじやない。貴女が、あきほちゃんを想つて言葉を話したということ。貴女が最後に、友達に優しさで接したこと」

「……だとしても」

「自分を責めてもいい。悩んでもいい。でもね、私は知つてる。あきほちゃんも知つてる。エヴァが、彼女に対して真剣だつたこと。だから、私が貴女を許してあげる」

雪姫がどんなに言葉を吐こうが、私がしたことは変わらない。あきほが消えたことは変わらない。雪姫に許された所で、何の関係もない。

だというのに、この気持ちなんだ。

心の底を、撫でるような。胸の奥を、暖めるような。どうして、この感覚を、懐かしいと感じるのだろう。どうして、こんなにも縋りたくなるのだろう。

私が、雪姫の背中に、手を伸ばそうとしたその時。

轟音と激しい衝撃が家の壁を破壊したのが、からうじて分かつた。

突然家の壁を突き破った幾本もの魔法の矢は、そのまま私達に向かってきて、部屋にある机や皿を次々と切り裂いた。

戸棚のガラスが割れる音や木製の本棚が崩れていく音が響く。裂けた人形から飛び出る綿がふわふわと舞う様子は、高速で突き進む矢と対照的に見えた。ズドドド、と低く鈍い音を立てて突き刺さる矢の一本一本が間違いなく高威力であり、それはつまり、放つたものの実力の高さが知れた。

速度を増し連写される矢は、中々に打ち止む気配がなかつた。30秒近く撃ち続けられた矢は、無慈悲に私の家を滅茶苦茶にしていく。木屑や綿が捲き上り、ガラスが床中に散らばる。やつと止んだ攻撃の跡を見れば、形あるものは見るも無残な姿となつていて、横から貫かれた家自体も元の姿の片鱗はなかつた。

そして、放たれた魔法の中心に居たはずの私は、無傷だつた。

気付けば私の前には分厚い三重もの障壁が作られていたのだ。未だに私を抱き抱えていた雪姫は、大丈夫?、と余裕を感じる声で話しかけてきた。どうやらこの障壁は彼女の仕業らしい。

私は礼を言う前に、雪姫の腕の中にいる自分を恥ずかしく思つて、もういいだろ離せ、と無理矢理離れた。

そして、矢が撃ち込まれた方向へと目をやる。

家の壁に空いた大きな穴の先には、1人の壯年の男が立つていて。見たことのある顔だつた。

黒いローブを羽織り短めの杖を手にしているその男は、あきほが入院していた病院ですれ違つた奴だつた。

『叔父が名の売れた魔法使いで……』

脳裏に、あきほの声が聞こえた気がした。いつか彼女がそう言つたことを思い出し、私はそいつの顔を見た瞬間に、彼の目的を理解した。目に怒りの炎を宿し、禍々しくも悲しげなオーラを纏う姿を見れば、すぐに分かるのだ。

何度も、何度も向けられたその視線は、悲しいほどに見覚えのあるものであつた。

「……隨分と、野蛮な挨拶だな」

壁の穴から外に出て、私は男に話しかける。

男は私の顔を確認した後、あまりにも大きな歯軋りを鳴らした。怒りを抑えきれないようで、顔の筋肉がプルプルと震えている。杖を持つ手を前にして、男は私に訪ねる。

「……エヴァンジエリン A・K マクダウエルで間違いないようだな」

「そうだ。だとしたらなんだ。貴様のような魔法使いが、この私に何の用だ」

「……私の姪のことは、分かるだろう」

ああ、分かる。分かるとも。

このタイミングで私の前に現れるということは、つまりは、そういうことなのだろう。

暫くは平和なこの街にいたとしても、その視線だけは忘れる事はなかつた。業火の炎を背後に宿し、ただ一つの目的で私の前に現れたものは、どれだけ私が巨悪としても、どれだけ私が残虐としても、絶対に諦めることなく向かってくる。

どんな理由だろうと、仲間が殺されて身内が殺されてやつてきたものは、そんな眼をして、私に殺意の言葉を向けるのだ。

「私は！ 貴様が呪い殺したあきほの叔父だつ!!？」

杖の先端が強い光を放つ。

無詠唱で唱えられつつも、重く鋭い光の矢が私に光速で向かってくる。

そしてそれはまた、突如私の前に現れた障壁によつて弾かれていた。

「エヴァ」

無防備に前に出た私を叱咤するような口調で、雪姫は私の名を呼んだ。

「雪姫、お前は何もするな。黙つてろ」

「……黙つてろつて、貴女穴だらけにされちゃうわよ」

「頼む。任せてくれ」

雪姫はそれ以上返事をしなかった。

私は一步前に出て、更にその男に近付いた。

男は引く様子を見せることなく、激しい鼻息を尚荒くした。

「何故だ！ 何故あきほに近付いたつ！ あの子に魔法の才能など無い！ 斬う力などない！ そんな子をどうして死に追いやつたのだ！」

!!

杖の先端が顔の前に置かれた。

興奮で大量に発汗し、額には幾つもの筋を作る男の怒りは間違いく本物だった。

彼の中では、私はあきほを殺した人物となっている。

そう思われることについて、怨みはなかつた。

私の存在は、きっとあきほの兄からこの男に伝わっているのだろう。あきほが死ぬ少し前から彼女と関わり出した悪名高い魔女。家や病院にも顔を出して、彼女に近付いていた。それだけで、疑われるには十分すぎる。それだけのことを、私はしてきていた。

濡れ衣だと叫ぶことに何の意味もないことを、私は経験として知つていた。

「あの子は……っ！ 優しい子だつた！ 斬えなくても！ 魔法なんて使えないとも、良かつたんだ！ 幸せに、幸せにさえなつてくれれば良かつたのに……」

彼の怒号とは反対に、私は嬉しく感じていた。

魔法使いの家系で魔法が使えないものは、古くから差別され、辛い想いをして生きていくことが多い。

そんな中でも、彼女は確かに愛されていたのだ。優しさで溢れていった彼女は、家族に愛され、友人に愛されていた。闘う力だけが強さだと教えられることなく、周りを笑顔にして、育てられてきたのだ。

そう感じられる彼の怒りが、私には嬉しかった。

彼女は、私と違い、真っ当に生きていたのだと実感できたのだから。

「——くくく。何故、だと？」

私が悪意に満ちた声を出すと、彼の杖を持つ手の力が強くなつたのが分かつた。

「理由など、あいつの血が美味そうだつたから。それ以外にはない。あいつがどんな奴だつたかなんて、私に関係ないんだよ」

「つ貴様あ!!」

彼の身体から溢れるように湧き上がつた魔力は一気に杖に込められ、私の目の前で爆発寸前まで膨れ上がつた。風圧で髪が揺れ流れるが、私は気のことなく彼の顔を見続けた。

そして、ゼロ距離で放たれた魔法は、大きな光となつて爆発した。



また、私の身体には一切の傷がなかつた。

それどころか、いつのまにか私はあの場所を移動し、林の中にいる。雪姫に抱えられて、だ。

「……何もするなと言つた筈だ」

「言われたけど、私は従うとは言つてないわよ」

そう言つて雪姫は私を下ろした。男の切り裂くような叫び声が離

れたところから聞こえた。どうやら消えたを探しているようだ。これだけ声が聞こえるということはそう離れた距離にいる訳ではないらしい。

「……どういうつもりなの？」

雪姫が真剣な表情で訪ねてきた。

「死ぬ気だつたの？」

「ふん。不死の吸血鬼だから、あんなもんでは死なん」

雪姫は、私をじつと見つめている。怒る訳でも、責める訳でもなく、ただ、私の意思を問おうと見ている。

「……復讐者つてのは、簡単には止まらないんだよ。特にああいう、自分が死んでもいいと思つてる輩は、殺すか、本当に死ぬかまで一生付きまとつてくる」

「だから、死ぬ気だつたの？」

「死んだふりだよ。一旦灰にでもなつておけば勝手に満足するだろ」

「嘘よ」

雪姫は、さつきと変わらない瞳のまま、淡々とそう言つた。

「貴女、自分が今吸血鬼として弱つてゐるのかつているでしよう？ 麻帆良に閉じ込められ、満足に血も吸えてない貴女が、粉微塵になるまで攻撃されたら生き返れる保証なんてないのよ。それくらい、貴女が一番分かつてゐるでしよう？」

「……」

私は雪姫の言葉に応えることなく、服に付いた泥を静かに払う。

「今まで復讐者と会つたとき、殺してきたのでしよう？ なら、あれも殺せばいいじゃない」

「駄目だ！」

咄嗟に声が出た。私はそんな自分にも苛つきながらも、雪姫に向かい合うのを止めなかつた。

「……あいつの家族を殺すのは、なしだ」

「そう。なら逃げるしかないわね」

雪姫は、そう言つて私の手をおもむろに握つてきた。

「とりあえず街に出ましょ。それで、タカミチとかいう青年か妖怪

みたいな学園長に話をして彼を止めてもらいましょうか。それでも彼がまだ襲つて来るなら、その時また何か考えましょ

私が返事をする前に雪姫は既に走り出していて、私は引っ張られる。

「一つ言つておくけど、どんな道になろうと貴女が死ぬのは、なしよ
「……どうしてお前が決める」

「私がそう思つたからよ」
私と同じ長い金髪をはためかせながら、彼女は私の手を離さずに走り続けた。



裸足で走り続いているのに、足に痛みを感じなかつた。なんとかく、足元に魔力を感じる。おそらく雪姫が何かしらの補助をしてくれているのだろう。

先程の障壁も、私を助けた時のスピードも、並みのものではない。今まで機会がなかつたため知らなかつたが、どうやら雪姫はかなり出来る存在であるようだつた。長く存在する彼女にそんな力が宿つていたとしても、特に不思議には思わなかつた。

高速で木々の間を抜けながら、いつも通る、街に抜けるための道に出来る場所へとたどり着いた。

後は学園までいくだけなのだが、そこで雪姫の動きは急に止まつた。

「……どうした」

「やられたわ」

そう言いながら、彼女が手を前に出すと、空間に波紋が広がつていつた。

「結界か」

「ええ。彼、やっぱり中々やるようね。呪符式で、しかも高価なものね。壊すのは難解で、面倒な作りになつてゐるわ」

陰陽術である呪符を使つた結果は、その符を剥がして解くのが一般的である。そしてそれは基本四方に置かれていて、探すのに手間が掛かる。

「……半球に作つてあるみたいね。この林ごと、すっぽり囲まれてる」 目を瞑りながら、手で結界の感触を確かめつつ雪姫はそう言つた。

自分ごと私を閉じ込める東洋の結界。

それは、あの男の覚悟を示したものであつた。西洋の彼がそれに手を出し、真相の吸血鬼である私と一緒に籠るとということは、どうあっても決着をつける気であつたのだろう。

「……呪符の場所は分かつたわ。ただ——」

「解きに行かせると思つたか」

背後からする声に振り向けば、そこには男がいた。男はすぐに火の中級魔法を放つ。

無詠唱でありながらも魔力の籠つた巨大な業火の玉は直線で私達に向かってきた。

すぐに雪姫が前に出て、障壁を貼つた。火球は弾け火の粉が舞う。地面に落ちた小枝に飛んだ火が、小さく弾けるような音を立てながら燃えている。

ちつ、と男が舌を打つた

「……ねえ、貴方」

雪姫が男に声を掛ける。男は雪姫に警戒しながらも、その杖を私へと向けたままであつた。

「あきほちゃんの死は、エヴァのせいではないわ。あれは、どうしようもないものよ」

「嘘をつくな！」

地面で燃えた火の粉が、雑草や落ち葉を伝つて、少しづつ大きくなつてゐる。煙が緩やかに昇り始め、鼻に焦げた匂いを感じた。

「あんな、あんな突然、亡くなることがあるか！ その前まで、笑つてたんだぞ！」

男は瞬きもせずに、怒りの表情のまま涙を流し始めている。

「赤子の頃から、知ってるんだ！　よく泣き、よく笑う子だつた！　あの子がいれば、誰もが笑顔でいれた！　それなのに、こいつが、こいつさえいなければっ！」

「……分かるわ。彼女は、とてもいい子だつた。でも、死とは、そういうものよ。平等で、理不尽なの」

「黙れ！」

再び彼の杖から魔法が飛び出す。

それはさつきと変わらずに障壁によつて防がれている。燃え移る炎は、彼の周りにも到達している。それなのに、男は暑そうな素振りを全く見せない。

「雪姫、もういい」

「エヴァ、次は貴女が黙つていなさい」

雪姫は、横目で私を睨みつけるようにしながらそう言つた。

「死を悲しむ気持ちは分かる。誰かにぶつけないと、どうしようもない気持ちをどうにも出来ないのも分かる。悲しみを、怒りや恨みに変換しないと自分が保つていられないほどおかしくなるのも分かる。でもね、それは貴方の都合なのよ。同情はするけど、私は私の大事なものを見せる気はないの。貴方のためにこれ以上の傷をつけさせるつもりはないの。だから、引いてくれないかしら」

「黙れええ！」

男に雪姫の言葉が届く様子はなく、男はひたすらに魔法だけを打ち続けていた。どれだけ防がれても、魔法を放つことをやめない。林に溢れた緑が次々と炎に塗れていき、次第に黒煙までもが私たちの周りを囲む。

息をするのが苦しくても、魔力が尽きそうで苦しくても、男は一心不乱に魔法を放ち続けた。

私は、雪姫の説得が無駄であることが分かつっていた。激情に駆られた人間は、決して言葉などでは止まることは出来ないので。視野が狭まり、一つのことを為すことしか考えられないのだ。

だから、彼が止まるには、私が死ぬか、彼が死ぬかしかない。

私は、死ぬ気などはない。

これは本心であり、例えあきほの叔父であつても、あの男のために自分の命を散らすつもりなどはなかつた。

ただ、分からなかつたのだ。

殺さずに、殺されずに男を止める方法が。

例えここで彼の意識を刈り取ろうが、きっと結果は変わらない。タカミチに言つても爺に言つても、この男は絶対にまた私の元に現れる。復讐の意識とは、誰かの説得では止まらないのだ。

だから、私はさつき彼の魔法を受けようとしてしまつた。分からないままで、何か答えがあるかもと、思つてしまつただけなのだ。

しかし、今はとてもそれは思えなかつた。

私の前にでて、魔法を受け止め続けてくれる雪姫を見て、私は何故か心が熱くなるようなものを感じていた。

雪姫の背中は、どうしようもないくらいに頼もしくて、私はただただ見惚れてしまつていた。

そして、気付いてしまつた。

段々と、彼女の姿が薄まつてきているということに。

第20話

「雪姫、お前……」

火球を、剣の形をした焰を、魔法の矢を、次々と繰り出される男の全力の魔法を、涼しい顔をして雪姫は防ぐ。すらりとした長身から流れるようく泳ぐ金髪は跳ねた泥で汚れても尚美しく、余裕すら見えるその横顔は他者に安心感を与えるものである筈だ。だが、私はそんな気持ちにはなれなかつた。どうみても、雪姫の存在は見間違えこともなく薄まつていて。

魔法を一つ受け止めるたびに、ぱしん、とそれを弾く音がして、同時にまた一つ雪姫の姿が淡くなつていく気がする。

脳裏に、金色の玉の姿が浮かんだ。絶対的な魔法防御で守られていたそれが、少しづつひび割れていくイメージが鮮明に映る。

「……おい」

「——大丈夫よ。貴女には傷一つ、つけさせないわ」

何事もないかのように穏やかに笑う雪姫。白い頬が透明に近づき、向こうの景色が仄かに見える。

——何が、大丈夫、なのだろうか。

「……お前、透けてるぞ……」

「あら、そう」

「……消えかかってる」

「……そうね」

背中に、手を伸ばす。指先に、つん、と感触があつた。

まだ、触れる。まだ、そこにいる。

「……もういい」

震えた声が、絞り出すかのようになり出た。

声が小さかつたからか、雪姫はなんの反応もしない。そのまま男の攻撃に対して障壁を貼り続けていた。

「もうやめろ!!?」

雪姫の服を背中から思いつきり引っ張り、体勢を崩させた。結果、男の攻撃から目を背ける形になつたが、障壁は解いてないようで、こちらに攻撃が届くことはなかつた。

「何するのよ。危ないじやない」

土だらけの地面に膝をつき、私と目線を合わせた雪姫は口を尖らせながらそう言つた。

私はすぐに雪姫の襟元を掴み上げる。

障壁から破裂音が響いているが、私はそれに負けないほどの声を出していた。

「お前、死ぬ気なのか!?」

「……」

「私にはあんなことを言つておいて！自分は私を守つて死のうだなんて考えてるのか!?」

雪姫は、私の目を見て少し時間を置いた後に、笑つて言う。

「そうよ」

「巫山戯るな！」

襟元を掴んだ拳に力が入る。喉を押しつけるようにしたが、雪姫は苦しそうにもしなかつた。

「何故貴様がそこまでする?! 取り憑いただけの私なんかの為に、どうして命を捨てようとしている!?」

「言つたでしよう？ 私が、そうしたいからよ」

私は、自分でも信じられないほどの感情の昂りを感じていた。それは、雪姫の勝手な行動に対する怒りなのか。それとも、消え行く彼女への失望なのか。また別の想いなのか。はつきりはしないが、心臓が早鐘のようになつてているのは確かだつた。

「……いい。お前が消えるくらいなら、やる
「やるつて、なにを？」

「あの男を殺す」

雪姫から手を離し、立ち上がつた私は彼女が張つた障壁の外に出ようとする。

「……出来るの？」

「この程度のピンチ、幾度乗り越えて来たか。魔法がなくても、吸血鬼としての力が薄くても、私は長い経験で学んで来た技がある」

実際にその自信はあつた。激昂しただ無闇に魔法を連射しているだけの奴に、今の状態でも劣る気はしなかつた。

「そうじゃないわ」

雪姫は、未だに透けた体のまま、私に言う。

「本当に、あきほちゃんの家族を殺すことが出来るの？」

「……っ」

あきほの顔が浮かぶ。

優しい彼女は、自分の家族を失つたらどう思うだろうか。私に叔父を殺されたと聞いた彼女は、どんな心境になるのだろうか。彼女の家族は、あきほとあの男を同時に失うと、どれだけ悲観に暮れることになるのだろうか。

いや、関係ない。もうあきほはいないのだ。いない奴に気を使って、どうして私が危機に陥る必要がある。

死とは、無だ。

あの世に消えた魂に対して神経を使うのは間違っている。彼女が死んだ後のすべての行動は彼女には関係なく、私は私の為に生きていくべきなのだ。

分かつていて。頭の中ではそう理解している。

なのに。それなのに。私の足は前にも進もうとする気すらなかつた。

「…………出来ない」

私は、力を入れていた両手をだらんと垂らしてしまう。

どうしてこんな私になってしまったのだろう。昔の私なら、雪姫に遠慮することも、殺すことに躊躇うこともなかつたはずなのに。人を殺すなんて簡単なことなのに。

心も体も弱くなつた自分が、嫌になる。冷徹な頃の私になりたい。

そう思つてゐるのに、そう思えない。

「本当に、優しい子ね」

雪姫が私を抱きしめた。甘い香りと柔らかい感触がする。

何故か、とても懐かしい感覚がした。胸の奥が暖かくなり、涙腺が緩まる。

「……雪姫、よく考えろ。お前が消えても、今の状況は変わらない。私を守るもののが消えて、私があいつが死ぬだけだ」

「……」

雪姫は何も答えない。

私は唇を一度噛み締めた。

そして、雪姫の背中に手を回した。

半透明な彼女は、まだ温かみがある。

喉奥に、今まで長い間溜め込んでいた感情が一気にこみ上げてきた。何百年もの間、ずつとずつと、我慢していた想いが爆発するかのように溢れ出そうになつた。私はそれを辛うじて抑えるのに必死になつた。

誤魔化すように、雪姫を抱きしめる手の力を強める。

雪姫も、私を強く抱きしめてくれた。

それがまた、私の感情を昂らせる。

「……どうすればいいか、分からない」

「うん」

弱々しく出た言葉は、まるで自分の言葉じゃないみたいだつた。震えた声はあまりに弱つちくて、いつもみたいな強い口調に戻したくても、心は全く言うことを聞かない。

「殺したくない。でも、お前には消えて欲しくない」

「うん」

忘れられない。失いたくない。雪姫が起こしてくれた朝を。作ってくれた飯の匂いを。おやすみと言つてくれた声を。いつてらつしやいと、手を振つてくれた笑顔を。

この感情は、きっとそういうことなんだろう。

私は、自分が思つたよりもずっと雪姫に依存していく、ずっと雪姫

が好きだつたんだ。

そして、なによりも。

「寂しい」

心から、振り絞つた声だつた。

一人で生きるようになつてから。吸血鬼となつてから。
ずっと。ずっと胸の片隅に常にあつた想いだつた。

荒れた大地で独り夜を過ごした時も。不気味な森で独り野宿した
時も。たつた独りで宿に泊まつた時でさえも。私は何年も、何年もそ
う思つていたのだ。

だから、誰かと過ごしたこの数ヶ月は私にとつて夢のようで。
楽しくて、嬉しくて。だから。だから。

「いなくなつたら、寂しいよ……」

ぎゅうと抱く力を更に強めて、雪姫の胸に顔を埋める。こんな顔は
見られたくない。私ではない。目元が湿り氣を帶びた気がするのだが、
雪姫の服に擦り付けて必死になかつたことにしようとする。

「……いいえ、いいえ」

雪姫は、私の頭をさらりと撫でた。心地がいい。心地が良すぎて、
泣いてしまいそうだ。

「……エヴァ。貴女は言つたわよね。復讐を止める方法は、貴女が死
ぬか彼が死ぬかだけである、と。でも、そうじやないわ」

雪姫は、もう一度私を撫でてから、抱きついている私の頭を少し後ろに下げる。

雪姫と目が合う。今にも声を上げて泣き出しそうな私の顔を見て、雪姫は穏やかに笑みを浮かべていた。

「もう一つある。復讐を止めるには、復讐の原因となつたことを、無かつたことにするのよ」

「……それは、どういう——」

雪姫に更に魔力が漲る。同時に、雪姫の体がまた薄まる。それでもやつぱり雪姫は笑顔を崩さない。

「あきほちゃんの死を、無かつたことにするのよ」

信じられないほど魔力が彼女を中心へ渦巻いていく。雪姫の封印を初めて解いた時を思い出すほど、強い力が彼女から溢れていた。

「馬鹿な！ そんなこと出来るはずがない！」

「いいえ、出来るわ。言つたでしよう？ 私は呪いまじないによつて生まれた存在。誰かが強く願つたのなら、それを叶えることだつた出来る」

「……あつ」

思い出す。いつか雪姫が語っていた自分の出生の話を。彼女は、誰かの願いを叶えることが出来ると、そう言つていた。

そして、私はあきほの前で一つ願つた。私があきほに語った言葉が、嘘にならないようなど。

雪姫は、今その願いを叶えようとしているのだ。

自分の身を犠牲にして。

「やめろ！ お前が消えてあきほが生き返つたとして、あきほが喜ぶと思うか？ そんなど、あいつが望んでいると思うか！」

「ふふふ。何度も言わせないで。私は自分勝手なの。あきほちゃんを生き返らせたい。そう思つたから、そうする。後のことは、貴女がフォローしといて」

「……勝手すぎる」

人としてのルールなどを私に押し付けてくるくせに、自分だけは好き勝手にしようとする。本当に、自己中心的だ。

「……あきほだけじゃない。私だって、寂しい」

私はもう、虚勢を張つたりすることをすつかりやめていた。声は震えるし涙は出る。途轍もなく軟弱な姿であつたが、私は雪姫にそれを見せることに抵抗がなかつた。

「お前、言つたじやないか。私が死ぬまで一緒にいるつて。ずっと、同じものを見ていてくれるつて。嘘だつたのか」

「……そうね。貴女には、悪いと思つてる」

雪姫は、私を抱く力を少し強めてくれた。

「私ね、貴女のこと、知つていたのよ。ずっと

「……それは、私が悪の吸血鬼だから？」

「違うわ。貴女が、エヴァンジエル・A・K・マクダウエルだからよ」

意味が分からず、私は雪姫の顔をじっと見た。私の幻覚で映した姿を模倣している筈なのに、目元の優しさがどう見ても私とは違うことにやつと気付く。私には、こんな優しそうな表情は出来ない。

「もともと私は、赤ん坊の誕生を願つた末に生まれた存在。だから、親の子に想う気持ちは、全て私に伝わつてくる。勿論、貴女の母親の想いも」

また一つ、彼女が消え行く。もう、止められそうにない。伴流する魔力と比例して、彼女は消えていく。

「貴女の人生は、他の人とは少し違えど、母親は、間違いなく貴女を想つて産んだ。赤ちゃんの貴女の小さな手足をどんな高級な宝石よりも大切に扱い、愛していた」

色が薄まり、金色の髪はすでに透明になつてゐる。でも、まだ彼女の暖かさだけが残つてゐるので、私はそれを逃がさないようにただ抱きしめる。

「そして、言つていたわ。雪の日に、キヤツキヤと喜ぶ貴女を見て、同じような雪の日に産まれた貴女を思い出して」

誰かにこんなに長くくつ付いていたのは、きっと初めてだ。こんな暖かさを感じていられるのは、きっともうない。私はもつと力を強める。

「雪のよう白い肌。姫のよう美しい我が子。どうか、どうか幸せに」

「……それで、お前は」

雪姫は柄にもなく少し恥ずかしくなったのか、白い頬を朱色に染めて頬を搔いた。

「そう、雪姫と名乗つたの。貴女と同じ姿なら、そう名乗るべきだと思つたから」

また、雪姫の姿が薄まる。

もうじき彼女は消えるのだろう。私はそれを止められない。どれだけ強く雪姫を抱きしめても、もう雪姫を繋ぎとめれるとは思えなかつた。

「そうね。最後に言いたいことがあるわ」

雪姫は真剣な表情で私を見つめた。

「人にはしつかりと挨拶するのよ。損はないんだから。それと、夜更かしし過ぎてはダメ。肌に良くないわ。後で後悔するんだから。あと、自分の恋愛観を偉そうに人に語つては駄目よ。そういう女は嫌われるんだから。変な男には気をつけるのよ。外見よりも、中身を重視するのよ。でも、外見を疎かにしている男性は論外だからね。それと……」

「……最後に何の話をしてるんだよ」

思わず、笑つてしまつた。

自分が消えるというのに、何を言つているんだろう。

「——元氣で」

雪姫は、本当にゆつくりと、私の頬を静かに撫でる。
「いなくなつても、私は貴女の中に、ずっといるから」

「雪姫」

「ずっと、見てるから」

「雪姫え」

「貴女とずっと一緒にいると言ったのは、嘘じゃないから」「ゆきひめえ……」

最後に思いつきり抱きついた。溢れ出る涙を拭くこともせず、小さな自分の身体を、全力で彼女に押し付ける。

暖かい感触を忘れないために。彼女の存在を忘れないために。

「楽しかったわ。またね、キティ」

雪姫は、私の額に柔らかくキスをして、そして、すっと、その姿を消した。

○

同時に、世界が一瞬で白色に染まる。

全てを飲み込んだその白色の世界の果てに、雪姫と狐と蝙蝠の姿があつた。

彼女はそれらを全部引き連れて、世界の奥へと消えていった。